

茨城工業高等専門学校

研 究 彙 報

第 56 号

令和 3 年 5 月

RESEARCH REPORTS

OF

NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY(KOSEN),

IBARAKI COLLEGE

NO. 56

MAY 2021

茨城工業高等専門学校

茨城工業高等専門学校研究彙報 第56号

目 次

- 1 王績「遊北山賦」小考——隱遁空間の肯定——
.....加藤 文彬 (1)
- 2 八甲田山遭難事件 真実への彷徨
.....平澤 順治 (13)
- 3 テキストマイニングによる三大説話集の傾向分析
— x-means による分析結果に関する考察 —
.....平本 留理 (31)
- 4 論理回路開発・設計による PBL 実験とその学生アンケート結果
.....飛田 敏光 (41)

はじめに

初唐の王績については、高木重俊氏が「太平の世に疎外された隠士として生きるしかない現状は、不本意であろう」とし、彼の隱遁が必ずしも充足したものでなかったこと、寧ろそこには憤懣やるかたない思いがひっそりと横たわっていたことを明らかにしている。だからこそ彼は、阮籍・嵇康・陶淵明等の隠士・高士と自らとを比擬していくことを要請し、そうすることで太平の世の隱者たらざるを得ない自己を肯定していくのである。

古の隱士と自己とが、連作詩という構造の中で強固に結びついていくことは拙稿で既に述べたが、本稿ではその自己の在る空間がどの様に肯定されゆくのかに焦点を当てる。

一見すると王績詩文中には、充足した隱遁空間がありありと描出されている様である。しかしながら「太平の世」の隱者としての隱遁である以上、その空間も手放しに肯定されているとは考えにくい。

「太平の世」の隱遁を肯定していく営みを、「遊北山賦」を中心的に取り上げながら明らかにすることを本稿の目的とする。

〈王績「遊北山賦」〉

白牛溪裡、崗巒四峙。信茲山之奥域、昔吾兄之所止。許由避地、張超成市。……

山似尼丘、泉疑泗涑（吾兄通、字仲淹、生於隋末。守道不仕、大業中隱於此溪。續孔子六經近百餘卷、門人弟子相趨成市。故溪今號王孔子之溪也）。忽焉四散、於今二紀。

（白牛溪の裡、崗巒四峙す。信に茲山の奥域にして、昔吾が兄の止まる所なり。

許由地を避け、張超市を成す。……山は尼丘の似く、泉は泗涑かと疑う（吾が兄通、字は仲淹、隋末に生まる。道を守りて仕えず、大業中に此の溪に隱る。孔子の六經を續ぐこと百餘卷に近く、門人弟子相い趨りて市を成す。故に溪は今王孔子の溪と

號するなり）。忽焉として四散し、今に於いて二紀なり）

当該部分は王績の兄、王通について記された箇所であり、（吾兄通、……故溪今號王孔子之溪也）は王績の自注である。

ここでは王通の居住していた場所を、孔子生誕の地とされる「尼丘」と、孔子が講学を行っていた「泗涑」とに擬え、更にそこに多くの門弟が集ったことを述べ、王通の業績を礼讃している。

四散した理由については不明であるが、隋の大業十三（六一七）年に王通が死したことを指しているのであれば、それから「二紀（二十四年）」、すなわち唐の貞觀十四（六四〇）年以後であると推定することができよう。これは王績が太樂丞を辞して最終的な隱遁を開始した時期と重なり、かつ彼の没年が貞觀十八（六四四）年であったことからすると、「遊北山賦」には彼の隱遁に対する考えが存分に示されていると考えることができる。本稿が「遊北山賦」を中心的に取り上げる所以である。

「遊北山賦」の他にも、彼の詩文では隱遁空間が多く語られるが、先に述べた通りその空間は手放しで肯定されているわけではない。次節以降、王績詩文中に見える隱遁空間について、俗世間との距離感・仙界との距離感という観点から考えてみたい。

一 隱遁空間の肯定（一）——俗世間との距離感——

既に言及した様に、王績の隱遁は絶対的なものとしては肯定されていない。それは「明經思待詔、學劍覓封侯。棄繻頻北上、懷刺幾西遊。中年逢喪亂、非復昔追求。失路青門隱、藏名白社遊（經を明らかにして待詔を思い、劍を學びて封侯を覓む。繻を棄てて頻りに北上し、刺を懷きて幾か西遊す。中年にして喪亂に逢い、復た昔追い求むるに非ず。路を失いて青門に隱れ、名を藏して白社に遊ぶ）」（「晩

年敘志示翟處士正師」という世俗での栄達が達成されずに仕方なく隠遁したことに起因する。

よって彼の詩には、隠遁に対して稍否定的にも見える以下の様な記述もある。

〈王績「贈山居黃道士」〉

潔身何必是 身を潔くするは何ぞ必しも是ならん

避俗豈能全 俗を避くるは豈に能く全うせんや

動息都無隔 動息すべ都て隔つこと無きも

浮沈最可憐 浮沈は最も憐れむべし

05 嵇山高士傳 嵇山の高士傳

莊叟の讓王篇 莊叟の讓王篇

逃名遂得志 名を逃れて遂に志を得て

□□如爲傳ま (□□ 傳と爲るが如し)

「潔身」と「避俗」とが、完全に肯定しうるものではないことが初聯で述べられ、また第三句では出仕と隱遁と(動息き)は区別のないものであるとする様に、隱遁は積極的に肯定されてはいない。しかし語り手は、世俗に付き従うこと(浮沈き)については否定的な視点を提示し、結果世俗の名利から距離を置くこと(逃名)で、「志」が達成されるとしている。

王績は官界への未練を断ち切れずに居たのではあるが、それでも詩に於いては世俗と距離をとった空間こそが「志」を得る為に必要なとされているのである。

次に挙げる「春晚園林」も、自ら望んだ隱遁ではなかったということが語られている。

〈王績「春晚園林」〉

不道嫌朝隱 道おもわずして 朝隱を嫌にくみ

無情受陸沉 情無くして 陸沉を受く

忽逢今日樂 忽ち今日の樂に逢い

還逐少時心 還た少時の心を逐う

05 捲書藏篋笥 書を捲りて篋笥を藏め

移榻就園林 榻を移して園林に就く

老妻能勸酒 老妻 能く酒を勧め

少子解彈琴 少子 解く琴を弾く

落花隨處下 落花 隨處に下り

10 春鳥自須吟 春鳥 自ら吟を須まくす

兀然成一醉 兀然として一醉を成す

誰知懷抱深 誰か知らん懷抱の深きを

初聯の「朝隱」は、官に居りながら隱士の操を守ることであり、「陸沉」は官僚社会とは距離をとった隱者としての生活である。先に引用した「中年逢喪亂、非復昔追求。失路青門隱、藏名白社遊」という状況にあつて、彼は「陸沉」を「情無くして(そのつもりはないのに)」「受け入れざるを得なかつた」た。ただその隱遁は、酒・琴があるという充足したものであつて、更に「樂」たるものとして肯定的に描出されている。

重要なのは、ここでの「樂」が官僚社会と隔絶しているという前提のもとに確認されたものであるということ、つまり俗世間との比較の上で——いわば相対的に——この隱遁空間の価値が認められているということである。

隱遁空間が世俗と離れているからこそよい、と肯定していくという営みは陶淵明詩にも見ることが出来る。

〈陶淵明「歸園田居」其一〉

少無適俗韻 少くして俗に適う韻無く

性本愛邱山 性 本より邱山を愛す

誤落塵網中 誤りて塵網の中に落ち

一去三十年 一たび去りて三十年

05 羈鳥戀舊林 羈鳥 舊林を戀い

池魚思故淵 池魚 故淵を思ふ

開荒南野際 荒を開く、南野の際

守拙歸園田 拙を守りて園田に歸る

〈陶淵明「辛丑歳七月赴假還江陵夜行塗口」〉

01 閒居三十載 閒居 三十載

遂與塵事冥 遂に塵事と冥し

詩書敦宿好 詩書 宿好敦く

林園無世情 林園 世情無し

…

17 投冠旋舊墟 冠を投じて舊墟に旋り

不爲好爵榮 好爵の爲に榮がれざらん

養眞衡茅下 眞を養う 衡茅の下

庶以善自名 庶はくは善を以て自ら名づけん

「歸園田居」では、自身の役人生活のことを「誤落塵網中」として否定的に描き、

「羈鳥」「池魚」がかつて棲んでいた場所に帰らんとする様に、「拙」を守って園田へ帰る語り手の姿が描かれる。ここでの園田が「塵網」から隔絶されたものとして設定されていることは明らかである。また同様に「辛丑歳七月赴假還江陵夜行塗口」に於いても、「閒居」が俗世間と離れているからこそ良いということが、「塵事冥」「無世情」「投冠」「不爲好爵榮」と繰り返し述べられている。

王績詩が淵明詩と異なるのは、俗世間と隔絶した隠遁空間の中で自らと古の隠者とを比擬していく点である。

〈王績「解六合丞還」〉

我家滄海白雲邊 我家す 滄海白雲の邊

還將別業對林泉 還た別業を將て林泉に對せんとす

不用功名喧一世 用いず 功名の一世を喧しくするを

直取煙霞送百年 直だ取る 煙霞に百年を送るを

05 彭澤有田惟種黍 彭澤 田有りて惟だ黍を種え

歩兵從宦豈論錢 歩兵 官に従いて豈に錢を論ぜんや

但使百年相續醉 但だ百年をして相續き醉わしめば

何辭夜夜甕間眠 何ぞ夜夜甕間に眠るを辭せんや

自らの家を俗世から離れた「滄海白雲」にあるとし、その生活が俗世間との交わりをたつたものであることが初聯に於いて語られる。更に世俗での「功名」は求めず、山澤の景色を愛でる生活を望むとして、この空間が世俗と隔絶したものである

ことが詩の前半で繰り返し述べられている。

そしてここで、「彭澤（陶淵明）」と「歩兵（阮籍）」とが出現する。陶淵明が

醸酒の為に「秫」を植えた様に、また阮籍が酒を求めて歩兵校尉となった様に、自らの生と彼等のそれとを擬えているのであり、ここでの比擬は俗世間と隔絶された隠遁空間という規定の上で為されていると言える。

さて「解六合丞還」と同様に、俗世間と離れた隠遁空間を設定した上で比擬が行われるものとして、「山家夏日」の連作詩がある。

〈王績「山家夏日」其一〉

寂寞坐山家 寂寞として山家に坐し

簫條斃物華 簫條として物華を斃づ

樹倚全擁石 樹は倚りて全て石を擁き

蒲長半侵砂 蒲は長じて半ば砂を侵す

05 池光連壁動 池光 壁に連りて動き

日影對窗斜 日影 窓に對して斜めなり

石榴兼布葉 石榴 兼ねて葉を布き

金荳唯作花 金荳 唯だ花を作す

落藤斜引蔓 落藤 斜めに蔓を引き

10 伏笋暗抽牙 伏笋 暗いて牙を抽く

高臥長無客 高臥して長しえに客無く

方知人事除 方に人事の除かなるを知る

当該詩では先ず、「山家」の豊かな情景が描かれる。終句に「方知人事除」とある様に、山家での生活が俗世間から離れていることが確認されている。

つづく其二の語りだして、「隱士長松壑・先生孤竹丘（隱士長松の壑、先生孤竹の丘）」と、隱士たる自己が獲得され、其四の終聯で「自得爲巢許、無勞買卻山（自ら巢・許と爲るを得て、買いて山に卻くを勞すること無し）」と、自らと巢父・許

由とを比擬することに成功している。ここでも自己と古の隠士とを比擬していくその前段階として、其一の「人事除」と規定された空間が必要とされているのである。以上見た様に王績の隱遁空間は、世俗との比較の上でその価値が保証されているのであり、謂わば消極的な肯定が為されているのである。王績詩文中に多く見える比擬も、この前提が必要とされているのであって、殊更に世俗との距離感を述べていないものも、その距離は詩に内在していると筆者は考える¹⁰⁾。

二 隱遁空間の肯定(2)——仙界との距離感——

さて前節で言及した様に、王績詩に於いては俗世間との距離感が隱遁空間の価値を保証していたのであるが、仙界との比較の上でその価値を認めようとする詩群もあり、本節ではその観点から見ていきたい。

同時期の詩に於いて仙界はどの様に描かれているのか、盧照鄰の例を挙げる。

〈盧照鄰「羈臥山中」〉

01 臥壑迷時代	壑に臥するは時代に迷えばなり
行歌任死生	行歌 死生に任す
紅顔意氣盡	紅顔 意氣盡き
白壁故交輕	白壁 故交は輕し
…	…

15 紫書常日閱	紫書 常に日び閱し
丹藥幾年成	丹藥 幾年にして成る
扣鐘鳴天鼓	鐘を叩きて天鼓を鳴らし
燒香厭地精	香を燒きて地精を厭む ¹¹⁾
倘遇浮丘鶴	倘し浮丘の鶴に遇わば
飄飄凌太清	飄飄として太清を凌がん

当該詩が制作されたのは、東龍門山にて療養していた晩年であろう。詩は「臥壑迷時代」という、語り手を取り巻く重苦しい現実を始発点とする。更に第三句・第四句「紅顔」「白壁」という肯定的なものも「盡」「輕」として詠出されているこ

とから、ここにもやはり初聯と同じ現実の辛さが表出されていると言える。上記の如き表現には、病に臥す盧照鄰の心情が多分に反映されているが、語り手はその現実から脱却することに成功している。

それは「紫書」「丹藥」という道教の書・仙薬であり、「扣鐘」「燒香」という仙的行為に他ならない。終聯に於いては、登仙への希求が——「倘遇」という仮定形ではあるが——表出されている。

対峙する現実が艱難たるものであるからこそ、その救済の一つとして仙界が詩中に設定される、というのは阮籍「詠懷詩」にも見える。

〈阮籍「詠懷詩」其五十七〉

驚風振四野	驚風 四野に振い
迴雲蔭堂隅	迴雲 堂隅を蔭う
牀帷爲誰設	牀帷 誰が爲に設け
几杖爲誰扶	几杖 誰が爲に扶く
05 雖非明君子	明君子に非ずと雖も
豈聞桑與榆	豈に桑と榆より聞からんや
世有此聾聵	世に此の聾聵有り
芒芒將焉如	芒芒として將焉 ¹²⁾ にか如かん
翩翩從風飛	翩翩 風に從いて飛び
10 悠悠去故居	悠悠として故居を去る
離塵玉山下	離りて玉山の下を塵 ¹³⁾ し
遺棄毀與譽	毀りと譽れとを遺棄せん

「詠懷詩」の語り手は、「驚風」「迴雲」という重苦しい現実を象徴する世界に在り、そこからの逸脱として西王母の住む「玉山」が設定されている。仙的世界は詩の語り手にとって単なる羨望の対象では決してない。艱難たる現実を癒やすものであるからこそ、(少なくとも表現行為の内部での)到達が可能なものとして描き出す必要があったのである¹⁴⁾。

これは初唐四傑に於いても同様であり、出世の道が閉ざされ中央を追われた彼等にとって、現前にある現実が鬱快たるものであった。実際、彼らの表現には度々現

実に対する憤懣やるかたない思いが示されており、その救済の場として神仙世界が設定されている⁸¹⁾。

王績も同様に、「太平の世」に隠遁せざるを得ないという現実を抱えていたことは既に述べた。ではその詩に於いて隠遁空間と仙界とは如何なる関係で描かれるのであろうか。

(王績「田家」其一)

阮籍生年嬾 阮籍は生年は嬾にして

嵇康意氣疎 嵇康は意氣は疎なり

相逢一飽醉 相い逢わば 一えに酔うに飽き

05 獨坐數行書 獨坐すれば 數行の書あり

小池聊養鶴 小池 聊か鶴を養い

閑田且牧豬 閑田 且く猪を牧す

草生元亮逕 草は元亮の逕に生じ

花暗子雲居 花は子雲の居に暗し

10 倚杖看婦織 杖に倚りて婦の織るを看

登壇課兒鋤 壇に登りて兒の鋤くを課す

迴頭尋仙事 頭を迴して仙事を尋ぬるは

併是一空虛 併びに是れ一空虚なり

初聯で阮籍・嵇康が出現し、更に自らの隠遁空間を「元亮(陶淵明)」「子雲(揚雄)」と連続したものと描くことで、隠者としての充足した生が示されてはいる。しかし、やはりその空間は手放しで享受されているとは言えない。

それは終聯に於いて、「仙事」を追い求めることを「空虚」であるとし、仙界を否定的に捉えていることから明らかである。本当に隠遁空間が充足しきつていたのであれば、ここで敢えて仙界に言及する必要は無い。陶淵明「飲酒」其五の如く、その空間に安住する姿さえ描けばそれで良いのである。

ここで「仙事」が「空虚」であることを述べざるを得ないことそれ自身が、隠遁空間を絶対的に享受できていないというものであり、それはつまり隠遁空間の価値を認める上で仙界の否定(仙界を希求することの無意味性)が必要とされていると

いうことを意味する。

同様の構造は他詩にも見える。

(王績「贈學仙者」)

採藥層城遠 藥を採るも層城遠く

尋師海路賒 師を尋ぬるも海路賒かなり

玉壺橫日月 玉壺 日月に横たわり

05 金闕斷烟霞 金闕 烟霞に斷たる

仙人何處在 仙人 何れの處にか在らん

道士未還家 道士 未だ家に還らず

誰知彭澤意 誰か知らん 彭澤の意

更覓步兵那 更に歩兵を覓めんか

10 春釀煎松葉 春釀 松葉を煎り

秋杯浸菊花 秋杯 菊花を浸す

相逢寧可醉 相逢えば 寧ろ酔うべく

定不學丹砂 定めて丹砂を學ばざれ

初聯に於いて仙界との距離感が詠われ、更に「仙人」「道士」の存在の確証がないことよって、仙界を否定する視点はより強固なものとなっている。

ここで、「彭澤」「歩兵」という比擬の対象が出現し、「春釀」「秋杯」による充足した隠遁空間が確認せらる。そしてこの空間にあれば「丹砂」を学ぶ必要などない、と仙界を希求しないことが改めて語られる。

すなわち、当該詩も隠遁空間が手放しに肯定されているのではなく、仙界など目指す必要がなく、良い空間として隠遁を認めていると言えるのである。

以上見た様に、王績は太平の世の隠者であるが故の憤懣によって、隠遁空間にある自己を手放しに肯定し得なかつた。そこで彼は仙界を希求することの無意味性を述べ、或いは俗世間との距離を強調することで、隠遁空間を相対的かつ消極的に認めていくのである。

それを象徴するのが、以下に挙げる「詠隱」詩である。

〔王績「詠隱」〕

獨有幽棲趣

獨り幽棲の趣有り

能令俗網賒

能く俗網をして賒はるかならしむ

耕夫田作業

耕夫 田に業を作し

巢叟樹爲家

巢叟 樹を家と爲す

05 晚谷柔殘黍

晚谷 殘黍柔かにして

春園掃落花

春園 落花を掃く

忽然乘興往

忽然として興に乗りて往かば

何必御雲車

何ぞ必ずしも雲車に御せん

ここでも、初聯に於いて「俗網」から解放された隱遁空間が描かれる。更に終聯に於いて「雲車」に乗らずとも良いのだとする様に、官でもなく仙でもない空間としてせり上がってきた空間がここに確認され、「晚谷」「春園」に於ける「太平の世」の隱遁が消極的に肯定されているのである。

三 隱遁空間の肯定(3) — 「遊北山賦」の構造 —

王績の隱遁は、憤懣やるかたない思いを抱えながらのものであり、その空間は手放しに肯定されてはいなかった。そこで彼は、世俗と仙界との比較の上で相対的に隱遁を把握していくという方法を探っていた、というのが前節までで明らかとなったところである。

本節では晩年に制作された「遊北山賦」に於いて、この意識が如何に語られているのかを明らかにしたい。

「遊北山賦」に附された序文では、以下の如く隱遁空間を語っている。

〔王績「遊北山賦」序〕

續南山故情、老而彌篤。東坡餘業、悠哉自寧。酒甕多於步兵、黍田廣於彭澤。……

孫登默坐、對嵇阮而無言。王霸幽居、與妻孥而共去。窗臨水石、砌繞松篁。歌田園

之去來、亦已久矣。望山林之故道、何其悠哉。

(續の南山の故情、老にして彌いよ篤し。東坡の餘業、悠なるかな自ら寧し。酒甕

は步兵よりも多く、黍田は彭澤よりも廣し。……孫登は默坐して、嵇・阮に對いて言無し。王霸は幽居し、妻孥と共に去る。窗は水石に臨み、砌は松篁を繞る。田園の去來を歌うこと、亦た已に久し。山林の故道を望むこと、何ぞ其れ悠なるかな)

ここで着眼すべきは、「酒甕多於步兵、黍田廣於彭澤」という記述である。王績の他詩文に於いては、阮籍・陶淵明はあくまで比擬の対象として出現していたのであるが、ここでは「多於步兵」「廣於彭澤」と、自らの隱遁空間の優位性を雄弁に語る為にそのイメージが使用されている。更には、「孫登」「王霸」の如き隱者が居る空間が北山であることを述べ、語り手は陶淵明の「田園之去來」(歸去來辭)を歌うという、充足した隱遁空間が過剰なまでに示されている。

しかし、この充足しているはずの北山での生活さえも、俗世間との距離、そして仙界を希求することの無意味性と共に語られ、相対的に捉えられているのである。

〔王績「遊北山賦」〕

天道悠悠、人生若浮。古來聖賢、皆成去留。八眉四乳、龍顏鳳頭。殷憂一代、零落千秋。暫時南面、相將北遊。玉殿金輿之大業、郊天祭地之洪休。榮深責重、樂不供愁。何況數十年之宰相、五百里之公侯。兢兢業業、長思長憂。昔怪燕昭與漢武、今識圖仙之有由。人誰不願、直是難求。聞鼎湖而欲信、怪橋山之遽修。玉臺金闕、大海水之中流。瓊林碧樹、崑崙山之上頭。不得輕飛如石燕、終是徒勞乘土牛。

(天道悠悠、人の生くること浮くが若し。古來の聖賢も、皆去留を成す。八眉四乳、龍顏鳳頭。一代に殷憂し、千秋に零落す。暫時南面するも、相い將に北遊す。玉殿金輿の大業、郊天祭地の洪休。榮は深く責は重く、樂しみは愁いに供せず。何ぞ況んや數十年の宰相、五百里の公侯をや。兢兢業業として、長く思い長く憂う。昔燕昭と漢武を怪しむも、今圖仙の由有るを識る。人誰か願わざらん、直だ是れ求め難きのみ。鼎湖を聞きて信ぜんと欲し、橋山の遽に修めるを怪む。玉臺金闕は、大海水の中流にあり。瓊林碧樹は、崑崙山の上頭にあり。輕やかに飛ぶこと石燕の如きを得ずんば、終に是れ徒勞なること土牛に乗るがごとし)

「遊北山賦」本文は「天道悠悠、人生若浮」と語りだし、「八眉(堯)」・「四乳(文王)」の如き聖賢すらも、死去(「北遊」)するという摂理からは逃れられ

なかったことを言う。そして曾ては「燕昭（燕の昭王）」「漢武（漢の武帝）」等が、神仙を篤く信じて不死の薬を求めたことに疑問を持っていたが、今はその「由」があること（仙界への飛翔が可能であること）を理解した上で、「人誰不願、直是難求」とし、仙界への到達が難いということが語られる。

仙界が偽りのものであるとしているのではなく、あくまで到達不可能なものとして認識している点に注目したい。それ故、「石燕」の如く軽飛することができなければ、仙界を求めるとは「土牛」に乗るがごとく徒勞であるという結論に達するのである。

その後語り手は北山への登山を始める。その心持ちは「自謂搏風颺而出埃壙、邈若朝玄宮而謁紫都（自ら謂う風颺に搏りて埃壙を出で、邈として玄宮に朝し紫都に謁するが若きを）」とし、その上で神仙空間が「疑似」的に描かれ、「喜方外之浩曠、嘆人間之窘束（方外の浩曠なるを喜び、人間の窘束なるを嘆く）」と、北山の状況を「方外」として規定し享受する。更にここでは「逢閨風之逸客、值蓬萊之故人。忽據梧而策杖、亦披裘而負薪（閨風の逸客に逢い、蓬萊の故人に値う。忽ち梧に據りて杖を策つき、亦た裘を披きて薪を負う）」とある様に、より神仙的側面が強調されている。

ただし、その神仙空間には安住しない語り手の姿が次に示されている。

〈王績「遊北山賦」〉

過矣劉向、吁嗟葛洪。指期繫影、依方捕風。誰能離世、何處逃空。假使遊八洞之金室、坐三清之玉宮、長懷企羨、豈非樊籠。徒勞海上、何事雲中。

（過てり劉向、吁嗟葛洪。期を指して影を繫ぎ、方に依りて風を捕う。誰か能く世を離れ、何れの處にか空に逃れん。假使八洞の金室に遊び、三清の玉宮に坐すとも、長しえに企羨を懷かば、豈に樊籠に非ざらんや。海上に徒勞するも、何ぞ雲中を事とせんや）

仮に「八洞」「三清」という仙界にあつても、そこに羨む気持ちがあつたのであれば鳥籠の中に居ると同様であるとし、仙界を毀棄する語り手がここで出現する。

結果として回帰するのは、次の様な空間である。

〈王績「遊北山賦」〉

昔蔣元詡之三徑、陶淵明之五柳。君平坐卜於市門、子真躬耕於谷口。或托閭閻、或潛山藪。咸遂性而同樂、豈違方而別守。余亦無求、斯焉獨遊。

（昔蔣元詡の三徑、陶淵明の五柳あり。君平坐して市門に卜し、子真躬ら谷口に耕す。或いは閭閻に托し、或いは山藪に潛む。咸な性を遂げて樂しみを同じくし、豈に方を違えて守を別たん。余も亦た求むる無く、斯焉に獨り遊ぶ）

蔣君平は成都の市門で売卜を行い（托閭閻）、漢代の隱者である蔣詡・鄭樸、そして陶淵明は山や田園での隱遁生活を享受したのであつて（潛山藪）、彼等が皆「遂性」「同樂」であつた様に、語り手「余」もまた同様の空間を志向するのである。

仙界との比較の上で、隱遁空間が相対的に捉えられて確認されるというのは、本稿第二節で言及したものと同様の構造であると言えるが、「遊北山賦」ではその隱遁空間を仔細に描出している。

例えば山中の景色は「雲峯龜甲而重聚、霞壁龍鱗而結絡。水出浦而潺湲、霧含川而漠漠。是欣是賞、爰遊爰豫。結蘿幌而迎宵、敞茅軒而待曙（雲峯は龜甲のごとくして重聚し、霞壁は龍鱗のごとくして結絡す。水は浦より出でて潺湲たり、霧は川を含みて漠漠たり。是れ欣び是れ賞し、爰に遊び爰に豫しむ。蘿幌を結びて宵を迎え、茅軒を敞きて曙を待つ）」と述べられており、これらが「欣」「賞」の対象となつてゐることから、語り手は明らかにこの空間を享受していると言える。更にこの空間には隱者の生活を彩る酒・琴が「松花柏葉之淳酎、鳳翮龍脣之素琴（松花柏葉の淳酎、鳳翮龍脣の素琴）」として描かれ、より強い肯定が為されている。

上記の様に、淵明の如き隱遁空間を獲得した語り手であつたが、それでもまだ完全に充足しているとは言えない。そこで本稿第一節で述べた様な俗世間との距離感を確認することが必要とされるのである。

それは既に引用した、王通についての記述から読み取れる。ここでは王通の他、自注に於いてその門弟（姚義・薛收・溫彦博・杜淹）等が列挙されている。確かに王通を礼讃してはいるが、寧ろその不遇に焦点が当てられているのである。

〈王績「遊北山賦」〉

昔文中之僻處、諒遭時之喪亂。守逸歩而須時、蓄奇聲而待旦。旅人小吉、明夷大

難。建功則鳴鳳不聞、修書則獲麟爲斷。惜矣吾兄、遭時不平。

(昔文中の處を僻け、諒に時の喪亂に遭う。逸歩を守りて時を須ち、奇聲を蓄えて且を待つ。旅人は小吉、明夷は大難。功を建てんとすれば則ち鳴鳳は聞かず、書を修むれば則ち獲麟斷を爲す。惜しいかな吾が兄の、時の平らかならざるに遭うこと)

更に自注に於いても「吾兄仲淹、以大業十三年卒於郷館。時年三十三、門人諡爲文中子。及皇家受命、門人多至公輔、而文中子之道未行於時。余因遊此溪、周覽故跡、蓋傷高賢之不遇也(吾が兄仲淹、大業十三年を以て郷館に卒す。時に年三十三、門人諡して文中子と爲す。皇家命を受くるに及びて、門人多く公輔に至れども、文中子の道未だ時に行われず。余因りて此の溪に遊び、周ねく故跡を覽るは、蓋し高賢の不遇を傷むなり)」と、王通の不遇は繰り返し述べられている。

先述の様に、王通は大業十三(六一七)年に死去し、また門弟の一人で李世民にその才を買われた薛收も、武徳七(六二四)年に夭逝した。王績の仕官への望みが潰えた原因の一つとして、王通・薛收の死があったと考えることができるだろう。だからこそ、彼等の不遇を記した後に以下の記述が為されるのである。

〈王績「遊北山賦」〉

天未悔禍、遭家不秩。子敬先亡、公明早卒。吾自此而浩蕩、又逢時之不仁。天地遂閉、雲雷漸屯、與沮溺而同趣、共夷齊而隱身。幸收元吉、坐偶昌辰。容北海之嘉道、許南山之不臣。養拙辭官、含和保眞。豈若馮敬通之誹世、趙元淑之尤人、殷臧恥賤、憔悴傷貧、操井臼而無樂、曆山河而苦辛。

(天未だ禍いを悔いず、家の秩ならざるに遭う。子敬先ず亡び、公明早に卒す。吾此自り浩蕩し、又た時の仁ならざるに逢う。天地遂に閉じ、雲雷漸く屯すれば、沮溺と與にして趣を同じうし、夷齊と共にして身を隠さんとす。幸いに元吉を收め、坐に昌辰に偶う。北海の嘉道を容れ、南山の不臣を許す。拙を養いて官を辭し、和を含みて眞を保つ。豈に馮敬通の世に誹られ、趙元淑の人に尤めらるるが如く、殷臧して賤を恥じ、憔悴して貧を傷み、井臼を操りて楽しみ無く、山河を曆て苦辛せんや)

王通をはじめとする兄達の死を「子敬(魯肅)」「公明(管輅)」が夭逝したことに擬え、それが契機となり「吾」の不遇が引き起こされたことを述べる。その不遇故に「太平の世」の隱遁があり、それは「沮溺(長沮・桀溺)」「夷齊(伯夷・叔齊)」という古の隱士と自己との比擬と、「拙」「眞」という陶淵明の言とによって肯定されていくのである。更には、俗世にこだわり続けた結果「誹世」「尤人」となった馮敬通・趙元淑の姿が否定的に取り上げられ、結果として俗世と離れたこの空間こそが良いのだ、という結論にたどり着くのである。この視点は続く箇所でも述べられている。

〈王績「遊北山賦」〉

豈如我家生事、都盧棄置。不念當歸、寧圖遠志。坐青山而方隱、遊綠潭而似喜。(豈に我が家の生事の如く、都盧棄て置かんや。當歸を念わず、寧ぞ遠志を圖らんや。青山に坐して方に隱れ、綠潭に遊びて喜ぶが似くせん)

ここでの「當歸」・「遠志」は、直接的には草藥の名を指しており、また文字面としての意味、すなわち俗世間へ帰還しない、世俗での榮譽を求めない、という意味にも取れることは既に先行の注釈書が指摘する通りである。

つまり本稿第一節で見た様な、俗世間と隔絶した空間がここで再度述べられ強調されているのである。この様にして確認された空間はやはり肯定的に描かれている。

〈王績「遊北山賦」〉

舊知山裏絕塵埃、登高日暮心悠哉。子平一去何時返、仲叔長遊遂不來。幽蘭獨夜之琴曲、桂樹凌晨之酒杯。邱園散誕、窟室徘徊。坐等枯木、心如死灰。

(舊より山裏塵埃を絶つを知れば、高きに登り日暮れて心悠なるかな。子平は一たび去りて何れの時にか返らん、仲叔は長しえに遊びて遂に來たらず。幽蘭獨夜の琴曲、桂樹凌晨の酒杯。邱園に散誕し、窟室に徘徊す。坐すること枯木と等しく、心は死灰の如し)

ここでも琴・酒という隱者の生活を強調するものが描かれ、更には『莊子』を踏まえながら、自得の空間を享受する語り手の姿が生き生きと描かれ、その後も隱

遁空間は仔細にかつ肯定的に示されている。

以上見た様に北山での隠遁は、仙界とも俗世間とも距離を持ったものであるが故に肯定され得ていた。この様にして相対的に捉えられた隠遁空間は、最終的にどの様に語られるのであろうか。

〈王績「遊北山賦」〉

天網寬寬、人生豈難。飲河知足、巢林必安。亦何榮於拾紫。亦何羨於還丹。紅藜促節之杖、綠籜斑文之冠。野餐二簋、園蔬一盤。送阮籍而長嘯、得劉伶而甚歡。曉入柴戶、暮歸藥欄。老萊地僻、鄒生谷寒。楊柳則條垂鍛沼、杏樹則花飛坐壇。賦成鼓吹、詩如彈丸。攜始暍之鳴鶴、對新婚之伯鸞。

（天網寬寬として、人生豈に難からん。河を飲みて足るを知り、林に巣くいて必ず安んず。亦た何ぞ紫を拾うを榮とせん。亦た何ぞ還丹を羨まん。紅藜促節の杖、綠籜斑文の冠。野餐は二簋、園蔬は一盤。阮籍を送りて長嘯し、劉伶を得て甚だ歡ぶ。曉に柴戸に入り、暮に藥欄に歸る。老萊の地は僻にして、鄒生の谷は寒し。楊柳は則ち條鍛沼に垂れ、杏樹は則ち花坐壇に飛ぶ。賦は鼓吹を成し、詩は彈丸の如し。始暍の鳴鶴を攜え、新婚の伯鸞に對^{むか}う。）

官界での榮達（拾紫）は望まず、また仙となる為の藥（還丹）も求めず、すなわち官でも仙でもないという相対的に捉えられた隠遁空間がここで改めて提示されている。ここで隠遁空間とそこに在る自己とを肯定していくのであるが、その方法が今までのものとは異なっている点に注意したい。

その一つは「送阮籍而長嘯」という記述である。「遊北山賦」序に於いて孫登は客体として出現していたのであるが、ここでは阮籍を送る側として——そしてそれは隠遁空間に在る「余」「吾」として——語られている。

また、「遊北山賦」はその序で「詩者、志之所之。賦者、詩之流。式抽短思而賦焉（詩は、志の之く所なり。賦は、詩の流れなり。式れ短思を抽きて焉に賦す）」と言及する通り、『毛詩』大序、班固「兩都賦」の文学認識を踏まえて語られてきたが、ここに至って孫綽が張衡・左思の賦を賞賛した言（賦成鼓吹）と、謝朓が王筠の詩に関して述べた言（詩如彈丸）とを引き、自らの詩賦について最大限の賞賛を行っている。

よって、この段落に於いて他詩文とは異なつたより高次な比擬と自己肯定が達成されていると考えることができる。そしてこの達成の為には、仙界でもなく、また官界とも距離が離れていることの確認が改めて必要とされているのである。さらに続けて以下の様に言う。

〈王績「遊北山賦」〉

我有懷抱、蕭然自保。古人則與子同歸、紛吾則此賢將老。礪溪沼渚之蘋芰、丘陵阪險之桑棗。接果移棗、栽苗散稻。不藏無用之器、不愛非常之寶。抵玉驚禽、揮金薙草。接朋友於杯案、弄兒孫於繡襪。樂山澤之浮遊、笑江潭之枯槁。戒非佞佛、齋非媚道。無譽無功、形骸自空。坐成老圃、居為下農。身與世而相棄、賞隨山而不窮。披衣竈北、逐食牆東。儻有白頭四皓、厖眉八公、小童乘日、仙人馭風、鄉老則杖頭安鳥、邦君則車邊畫熊、心期關合、道術潛同、解來相訪、愚公谷中。

（我に懷抱有れども、蕭然として自ら保つ。古人則ち子と歸を同じくし、紛として吾則ち此の賢將に老いんとす。礪溪沼渚の蘋芰、丘陵阪險の桑棗。果に接して棠を移し、苗を栽ちて稻を散らす。無用の器を藏めず、非常の寶を受せず。玉を抵ちて禽を驚かし、金を揮いて草を薙ぐ。朋友に杯案に接し、兒孫を繡襪に弄ぶ。山澤の浮遊を樂しみ、江潭の枯槁を笑う。戒は佞佛に非ず、齋は媚道に非ず。譽れ無く功無く、形骸は自ずから空し。坐して老圃と成り、居りて下農と為る。身と世と相い棄て、賞して山に隨いて窮まらず。衣を竈北に披りて、食を牆東に逐う。儻し白頭四皓、厖眉八公、小童日に乗りて、仙人風に馭し、鄉老則ち杖頭鳥を安んじ、邦君則ち車邊に熊を畫き、心期關に合し、道術潛かに同じくするもの有らば、解^よく來たりて、愚公谷中に相い訪わん）

ここで「不藏無用之器、不愛非常之寶。抵玉驚禽、揮金薙草」、「無譽無功」、「坐成老圃、居為下農」と、自らの隠遁空間を裝飾していく語り手の姿が出現する。更には「江潭之枯槁」（屈原）さえも否定的に捉えることで、自らの「披衣竈北、逐食牆東」という隠者としての生が享受されている。

最も重要なのは末尾十句であり、ここでは南山の四隱士、「四皓」も、神仙の、「八公」「小童」「仙人」も、俗世間の、「鄉老」「邦君」も區別無く、「心期關合、道術潛同」なるもの全て許容する、絶対的かつ包括的な隠遁空間が獲得されているの

である。

おわりに

「太平の世」の隠者であった彼は、淵明の様に手放しに隠遁を享受できず、その空間の価値は俗世間・仙界との比較の上で相対的に認めるほかなかった。

この営みは「詠隱」詩でも行われてはいた。しかし「遊北山賦」では、仙的世界を述べた後に隠遁空間を目指す「余」、王通等の記載の後に俗世間と距離をとった空間に安住する「吾」が描かれ、隠遁空間に在る（在らざるを得ない）自己が強烈に自覚されていたのである。更に、仙界ではない隠遁空間・俗世間と距離をとった隠遁空間の様子を仔細に描くことを通じて孫登と語り手とが契合し、更には自らの詩賦すらも賞賛することで、より高次の比擬と自己肯定が達成されていた。結果獲得されたのは、相対的な観点から肯定された空間を超越した、隠遁も仙界も俗世間も全てを包括する絶対的に認められるものとしての隠遁空間であった。

晩年の王績は、「太平の世」の隠遁を肯定することを求めていた。その結果が「隠者としての自己演出^{※1}」としての「自作墓誌文」であり、真に充足した隠遁空間を獲得する為の「遊北山賦」の表現であった。前者は他者に向けられたものであり、後者は隠者たらざるを得なかった自己へ向けられたものである。

絶対的に肯定された空間を獲得した語り手「余」「吾」の姿を描くことで、書き手としての——「太平の世」の隠者としての——自己を納得させていく、というのが「遊北山賦」の意義であったと言える。

*1 高木重俊『初唐文学論』（研文出版、二〇〇五）

*2 拙稿「王績『古意』六首考」（『中国文化』七十一、二〇一三）

*3 本稿で引用する王績詩文は、五巻本をもととした金榮華『王績詩文集校注』（新文豊出版公司、一九九八）に拠った。底本と三巻本との間で文字の異同があり、三巻本の文字を取った箇所には注を附した。

*4 『史記』孔子世家「孔子生魯昌平郷陬邑。……紇與顔氏女野合而生孔子。禱於尼丘得孔子。魯襄公二十二年而孔子生。生而首上圩頂。故因名曰丘云。字仲尼、姓孔

氏（孔子は魯昌平郷の陬邑に生る。……紇は顔氏の女と野合して孔子を生む。尼丘に禱り孔子を得たり。魯の襄公二十二年にして孔子生る。生れて首上圩頂なり。故に因りて名づけて丘と曰うと云う。字は仲尼、姓は孔氏）」

*5 王通の没年については、杜淹「文中子世家」が「大業十三年、江都難作、而文中子有疾、……蓋寢疾七日而終（十三年、江都難作、而して文中子疾有り、……蓋し疾に寝ること七日にして終る）」といい、「遊北山賦」自注でも「吾兄仲淹、以大業十三年卒於郷。時年三十三、門人諡爲文中子（吾が兄仲淹、以て大業十三年郷に卒す。時に年三十三、門人諡して文中子と爲す）」とあることから、大業十三（六一七）年に王通が死したことがわかる。

*6 張錫厚『王績研究』（新文豊出版公司、一九九五）も、本賦の制作年を貞観十四とする。

*7 呂才「王無功文集序」に「貞観中、以家貧赴選。時太樂有府史焦革、家善釀酒、冠絶當時。君苦求爲太樂丞、選司以非士職、不授。君再三請曰、此中有深意、且士庶清濁、天下所知。不聞莊周羞居漆園、老聃恥在柱下也。卒授之。數月而焦革死、革妻袁氏、猶時時送酒。歲餘、袁氏又死。君嘆曰、天酒不令吾飽美酒。遂掛冠歸（貞観中、家の貧なるを以て選に赴く。時の太樂に府史焦革有り、家は善く酒を釀し、當時に冠絶たり。君苦だ太樂丞と爲ることを求むれど、選司は士職に非ざるを以て、授けず。君再三請いて曰わく、此中に深意有り、且つ士庶清濁は、天下の知る所なり。莊周漆園に居るを羞じ、老聃柱下に在るを恥じるを聞かずと。卒に之に授く。數月にして焦革死し、革の妻袁氏、猶お時時酒を送る。歳餘にして、袁氏又た死す。君嘆きて曰く、天酒^{すなわ}ち吾をして美酒に飽かしめずと。遂に冠を掛けて歸る）」とある。これが具体的に何時のことであるかは明らかではないが、張錫厚『王績研究』は大樂丞を求めた年を貞観十一（六三七）年とし、その職務を離れ隠遁したのは貞観十二（六三八）年としている。

*8 呂才「王無功文集序」に「貞観十八年、終於家（貞観十八年、家に終わる）」とある。

*9 缺字は□で示した。缺字はそのままに訓読を試みた（待考）。

*10 『文選』所収の謝朓「觀朝雨」詩に「動息無兼遂、歧路多徘徊（動息兼ねて遂

ぐる無く、歧路に多く徘徊す」とあり、その李善注に「動息猶出處（動息は猶お出處のごときなり）」とある。

*11 『文選』所収の阮籍「詠懷」其十六に「輕薄閑遊子、俯仰乍浮沈（輕薄の閑遊子、俯仰し乍は浮沈す）」とあり、その李善注に「輕薄之輩、隨俗浮沈（輕薄の輩は、俗に隨いて浮沈す）」とある。

*12 前掲の金榮華『王績詩文集校注』は、「不道」「無情」を「王績自謙之辭」として解釈する。

*13 『晋書』陶潛傳「在縣公田悉令種秫穀、曰、令吾常醉於酒足矣。妻子固請種粳、乃使一頃五十畝種秫、五十畝種粳（在縣の公田に悉く秫穀を種えしむ、曰く、吾をして常に酒に酔わしめば足ると。妻子固く粳を種えんことを請う、乃ち一頃五十畝をして秫を種えしめ、五十畝に粳を種えしむ）」

*14 『世說新語』任誕篇「步兵校尉缺。廚中有貯酒數百斛。阮籍乃求爲步兵校尉（步兵校尉缺く。廚中に酒數百斛を貯う有り。阮籍乃ち求めて步兵校尉と爲る）」

*15 王績詩に於いても俗世間との隔絶を殊更に詠わないものもある。しかし、その空間も手放しに享受されているのではなく、例えば「秋園夜坐」詩が「秋來木葉黃、半夜坐林塘。淺溜含新凍、輕雲護早霜。落蛩飛未起、驚鳥亂無行。寂寞知何事、東籬菊稍芳（秋來たりて木葉は黃ばみ、半夜林塘に坐す。淺溜は新凍を含み、輕雲は早霜を護る。落蛩飛びて未だ起たず、驚鳥亂れて行無し。寂寞として何事なるを知らんや、東籬の菊稍芳し）」とする様に、陶淵明という古の隱士のイメージを出現させることで、俗世間と隔絶した空間を印象づけている。

*16 阮籍「詠懷詩」中には、仙界を否定する表現も度々見える。これは現実からの逸脱を望む語り手の姿と、表現外部にある書き手としての阮籍との表現の違いである、と筆者は考える。

*17 例えば駱賓王は「遊靈公觀」で「別有青門外、空懷玄圃仙（別に青門の外に有れども、空しく玄圃の仙を懷く）」とする。更に「出石門」では「暫策爲龍杖、何處得神仙（暫く策きて龍杖と爲さんとするも、何れの處にか神仙を得ん）」と述べる様に、神仙への到達が叶わないことを詠うが、それが逆説的に神仙を強く希求することへとつながっている。

*18 拙稿「王績「過山觀尋蘇道士不見題壁」四首考——「不見」と「疑」「似」空間」（『筑波中国文化論叢』三十三、二〇一四）。

*19 「姚仲由之正色、薛莊周之言理（姚仲由の正色、薛莊周の言理）」とあり、その自注に「此溪之集門人、常以百數。河南董恆、南陽程元、中山賈瓊、河南薛收、太山姚義、太原溫彥博、京兆杜淹等十餘人、稱爲俊穎。而姚義多慷慨、同儕方之仲由、薛收以理達稱、見方莊周。薛實妙玄理也（此の溪の門に集まる人、常に百を以て數う。河南の董恆、南陽の程元、中山の賈瓊、河南の薛收、太山の姚義、太原の溫彥博、京兆の杜淹等十餘人、稱して俊穎と爲す。而して姚義多く慷慨し、同儕之を仲由に方べ、薛收理達するを以て稱され、莊周に方ぶ。薛は實に玄理に妙たり）」とある。

*20 王氏の頽勢については、小南一郎「王度『古鏡記』をめぐって——太原王氏の伝承——」（『東方学報』六十、一九八八）に詳しい。

*21 「拙」については、陶淵明「歸園田居」其一に「開荒南野際、守拙歸園田（荒を開く南野の際、拙を守りて園田に歸る）」とあり、「眞」については「飲酒」其五の他、「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口」に「養眞衡茅下、庶以善自名（眞を養う衡茅の下、庶はくは善を以て自ら名づけん）」とある。

*22 「坐青山而方隱」の「方」字は、底本では「非」に作る。本稿では三卷本の「方」ととつた。

*23 「當歸」については、『列仙伝』山圖に「山圖者、隴西人也。少好乘馬、馬踏之折脚。山中道人教令服地黃當歸羌活独活苦參散。服之一歲、而不嗜食、病癒身輕。追道人問之。自言、五嶽使。之名山採藥。能隨吾、使汝不死。山圖追隨之六十餘年。一旦歸來、行母服于家間。期年復去、莫知所之（山圖は、隴西の人なり。少くして乘馬を好む、馬之を踏みて脚を折る。山中の道人教えて地黃當歸羌活独活苦參散を服せしむ。之を服すること一歲にして、食を嗜まず、病癒えて身輕し。道人を追いて之を問う。自ら言う、五嶽の使いなり。名山に之きて藥を採る。能く吾に隨わば、汝をして不死たらしめんと。山圖追いて之に隨うこと六十餘年。一旦歸り來たりて、母の服を家間に行う。期年にして復た去り、之く所を知る莫し）」とあり、「遠志」については、『抱朴子』仙藥に「陵陽子仲服遠志二十年、有子三十七人。開書所視不

忘、坐在立亡（陵の陽子仲遠志を服すること二十年、子三十七人有り。書を開きて視る所忘れず、坐在立亡す）」とある。

*24 金榮華『王績詩文集校注』は「當歸・遠志、皆中藥名。此處取其字面意義雙關使用、蓋王績自喻往年之出仕在外（不念當歸）非有遠志也」とし、康金聲『王績集編年校注』（山西人民出版社、一九九二）も「當歸・遠志、皆草藥名、此以『當歸』指返回塵俗、以『遠志』指建功立業」とする。

*25 『莊子』齋物篇に「南郭子綦隱几而坐、仰天而噓。荅焉似喪其耦。顔成子游立侍乎前。曰、何居乎。形固可使如槁木、心固可使如死灰乎。今之隱几者、非昔之隱几者也。子綦曰、偃、不亦善乎、而問之也。今者吾喪我、汝知之乎（南郭子綦几に隱りて坐し、天を仰ぎて噓す。荅焉として其の耦を喪うに似たり。顔成子游前に立侍す。曰く、何ぞや。形は固より槁木の如くならしむべく、心は固より死灰の如くならしむべきか。今の几に隱る者は、昔の几に隱る者に非ざるなりと。子綦曰く、偃、亦た善からずや、而の之を問うや。今は吾我を喪えり、汝之を知るか）」とある。

*26 「既採藥而爲食、諒隨情而不矯。負錡春前、腰鎌歲杪。草漸密而饒獸、樹彌深而足鳥。地寂寞而森沉、路縱橫而窈窕。野亭鶴唳、山梁雉鷲。遠遊之所、幽棲之次（既に藥を採りて食と爲し、諒に情に隨いて矯らず。錡を春前に負い、鎌を歲杪に腰にす。草漸く密にして獸饒に、樹は彌いよ深くして鳥足る。地は寂寞として森沉たり、路は縱橫にして窈窕たり。野亭に鶴唳き、山梁に雉鷲く。遠遊の所にして、幽棲の次なり）」とある。

*27 『晉書』孫綽傳に「三都・二京、五經之鼓吹也（三都・二京は、五經の鼓吹なり）」とあり、『南史』王筠傳に「謝朓常見語云、好詩圓美流轉如彈丸（謝朓常見語を見て云う、好き詩は圓美流轉なること彈丸の如きなりと）」とある。

*28 前掲高木重俊論文。

本稿は科研費（若手研究 19K13093）の助成によるものである。

八甲田山遭難事件 真実への彷徨

平澤 順治

一. はじめに

2021年2月現在、新型コロナウイルスの世界的な流行は未だ収束の見通しが立っていない。このような未曾有の状況にあつてこそ正確な情報の収集と冷静な判断が求められるが、実際には真偽の定かでない情報が飛び交い、混乱に一層の拍車をかけている。氾濫する情報に対峙するために、どのような指針が必要となるだろうか。本稿では百年以上前に起きた八甲田山遭難事件を題材に、史実がどのように曲解されていくのか、その過程を観察してみたい。筆者の関心は、なぜ誤りが発生するのか、また、なぜその誤りが継承されるのか、の2点である。

本稿における年号は西暦を基準とし重要と思われるところのみ元号を併記するものとした。また、資料名を除き適宜、引用部分も含めて現代仮名遣いに改めた。

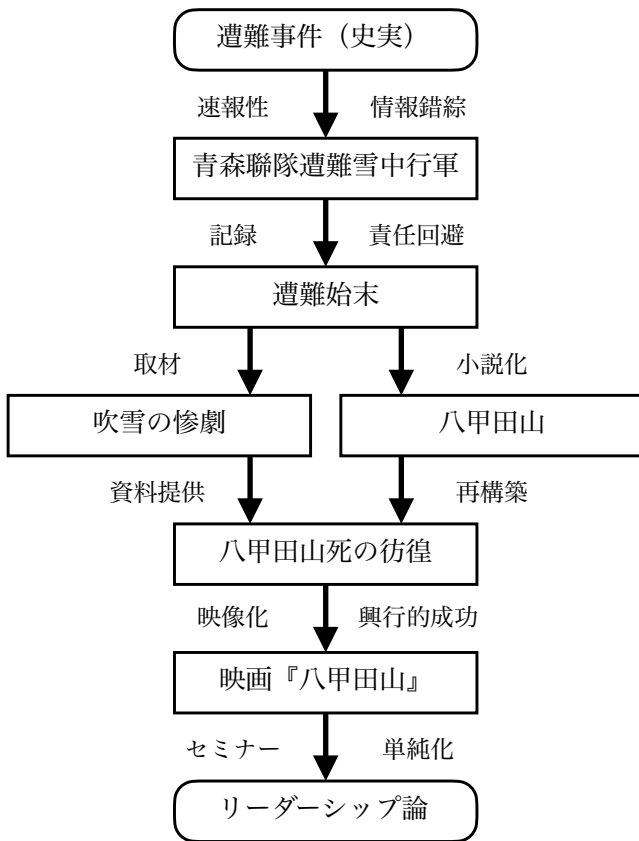


図1 遭難事件資料・文献の関連

二. 八甲田山遭難事件

二. 一 遭難事件の概要

1902年（明治三十五年）、陸軍の青森第五連隊が厳冬の八甲田山中において雪中行軍実施中、吹雪の中で進路を見失い彷徨、参加将兵210名のうち199名が死亡するという、山岳史上においても例を見ない大規模な遭難事故が発生した。事故の半年後に公刊された第五連隊編『遭難始末』¹⁾によれば、第五連隊隷下第二大隊は、厳冬期における青森より三本木（現十和田市）への部隊移動の可能性について確認すべく、中間地点である田代への雪中行軍を計画。1月18日に小部隊で中間地点まで日帰りの予行行軍を実施した上で、21日に大隊長名で命令を下達、神成大尉を指揮官とし、大隊を構成する4個中隊からそれぞれ将校・下士・兵卒を約40名ずつ選抜し一個小隊とし、さらに第一大隊・第三大隊の長期伍長からなる特別小隊を参加させた臨時の混成部隊による一泊の行軍を実施する、とされた。編成外として第二大隊長山口少佐本人を含む大隊本部が随行する。

1月23日早朝、予定通り屯営を出発した行軍隊であったが、行李の運搬が想定以上に困難を極め、天候の悪化も重なり目的の田代に達せぬまま急遽、雪壕を掘り露営することを決心。悪条件下で食事も睡眠も十分に取れぬまま、24日2時頃、日の出を待たずに露営地を出発、暗がり吹雪により前日の自らの足跡すら見失い行軍隊は遭難。帰営予定を一日過ぎた25日になつても行軍隊の帰着がなかったことから連隊は急遽、救援隊を編成、26日早朝に出発するもこの日は行軍隊と接触できず、翌27日になつて瀕死の後藤伍長と、神成大尉・及川伍長の2遺体を発見。連隊は総力を挙げて捜索を開始、下士・兵卒から駆り出された人夫まで含めれば千名を超える人員を投入した。次々に悲惨な凍死体が発見され、その点から行軍隊が方向を失い彷徨った状況が推測される（図2）。

1月31日、駒込川の谷底において山口大隊長以下9名が発見される。その後も必死の捜索がなされ最終的には17名の生存が確認されたが、うち6名は入院中に死亡（2月2日に亡くなった山口大隊長も含む）、うち8名は四肢の切断を余儀なくされ、全治退院となつたのは倉石大尉、伊藤中尉、長谷川特務曹長の僅か3名で

あつた。

『遭難始末』では未曾有の悪天候に遭難の主原因を求め、当日の気象の異常さが強調されているが、この説を翻すかのように、ほぼ同じ時期に八甲田山系を踏破した部隊が存在した。弘前三十一連隊、福島泰蔵大尉率いる38名は十二日間の日程をかけて弘前から十和田湖の南を通り、三本木を経て青森へ到着。足の捻挫（脚気とも）で途中離脱した1名を除き、全員が予定のコースを歩いて生還した。当時、第五連隊の遭難と併せて第三十一連隊の壮挙も全国紙で報道されたものの、世人の耳目を集めたのはやはり悲惨な事故についてであった。行軍の軍事的価値が市井の一般市民には伝わりにくいという事情もあつたであろうし、何より軍は青森隊遭難の責任論の火消しで手一杯だったことであろう。所属連隊が異なつたこともあるが、弘前雪中行軍隊について『遭難始末』には一言の言及も無い。

二二 遭難事件関連資料

悲惨な遭難事件はどのように伝えられたのか。当時の新聞報道を含め、遭難事件



図2 遭難地之図（『遭難始末』より）

に関連する資料については、川口の著作の引用が充実している。1902年1月29日付『東奥日報』は「噫至惨！至惨！！雪中行軍隊の大椿事 全軍貳百餘の凍死」というセンセーショナルな見出しで事件を伝えた。見出しにもある通り、この時点では最初（1月27日）に発見された後藤伍長の他は、全員が遭難死したと思われていた（川口によれば1月28日付の『東奥日報』にも遭難事件を報じる記事が掲載されたとされるが、何故か現在欠号となっており詳細の確認ができないとのことである。このため、後世の研究本では1月29日を事件の第一報とするものが多い）。

弘前隊の踏破については、同行した『東奥日報』従軍記者、東海勇三郎が1月30日付『東奥日報』号外に「三十一聯隊雪中行軍隊最後の三日」と題し、「茲には先づ最近三日に於ける経過の梗概を記して無事到着の報に代へん」として直近3日間、すなわち1月26日の三本木出発から同28日田代での露営まで（内容としては29日朝の青森到着まで）の行軍について書かれた記事が掲載される。この速報の中で東海は「兵士の死屍二箇を発見せり」「誰か計らん、是予等と同じく雪中行軍の途に上れる五聯隊の惨死者ならん」と書き、八甲田山中で遭難隊の死体を発見したことを公表してしまう。この弘前隊による青森隊遭難の発見ありやなしは、後年まで議論の対象となる。

その後、新聞では軍の責任を追求する意見も散見されるが、世論の大多数とはならなかった。1902年5月28日、最後の遺体が発見される。残る銃2丁、銃剣8丁は搜索を断念。7月23日、事件からは半年後に第八師団長を祭主とした弔魂祭開催。『遭難始末』の発行はこの日に合わせたものと考えられる。

事故の2年後に開戦した日露戦争から明治、大正、昭和を経て太平洋戦争の敗戦まで、遭難事件で失われた将兵のさらに何千倍、何万倍もの兵士や一般国民が戦争の犠牲となる。青森隊の遭難も弘前隊の壮挙も共に風化し忘れ去られたかと思えたが、1971年（昭和四十六年）、新田次郎が事件を題材にした小説『八甲田山死の彷徨』を上梓、ベストセラーとなる。さらに1977年（昭和五十二年）小説をもとにした映画『八甲田山』が公開、こちらも大ヒット作品となる。小説と映画が多くの人々に共有され、明治の悲惨な遭難事件は約70年の時を経て再び日本人の記憶に蘇った。映画で描かれた「遭難した大部隊と生還した少数精鋭部隊」というイメージから、企業向けセミナーの教材ともなった。

歴史から教訓を得ることは重要である。しかし、史実を正しく理解しなければ、有意義な教訓を引き出すことは出来ない。八甲田山遭難事件についてはどうだろうか。図1に遭難事件に関する資料・文献等の関連図を示す。

『青森聯隊遭難雪中行軍』は遭難事件の翌月、『遭難始末』は半年後に発刊された。同時代の資料ではあるが同じ本の中の記述に矛盾もある。

『八甲田山死の彷徨』は事件に材を採った新田次郎の小説であり、在野の研究者、小笠原孤酒から情報提供を受けた。『吹雪の惨劇』は小笠原の著作であり、新田は第一部を読んでいる。一方、新田は古書店で『遭難始末』を入手したことから事件に興味を持ち、短編『八甲田山』を執筆。気象庁での職を辞し執筆活動に専念してから再度事件に取り組み大作『八甲田山死の彷徨』を書き上げた。

映画『八甲田山』は新田の小説を下敷きに製作された。活字と映像という表現手法の違いは当然のこと、撮影上の制約から生じたと思われる違いも多いが、現在流通する八甲田遭難事件のイメージは小説と映画で型作られたものと言って良いだろう。後年のセミナーはこのイメージに依拠して語られている。

次節にて、各資料について詳説する。

二・三 資料の成立

① 『青森聯隊遭難雪中行軍』

問題の雪中行軍は、1902年1月23日に青森第五連隊の屯営を出発、一泊行軍の予定が目的地に達せぬまま遭難、27日、瀕死の生存者1名と遺体2体を発見とされている。つまり『青森聯隊遭難雪中行軍』は事故の発覚からわずか2週間あまりで発行された資料である。国立国会図書館デジタルライブラリーでその奥付を確認すれば、2月12日印刷、16日発行、24日増補再版とある。巻末の広告に2月19日付奥羽日日新聞、東北新聞の「本書評」を載せており、ここから編者の百足登は東北新聞の記者であることが読み取れる。

『青森聯隊遭難雪中行軍』における情報の誤りの一例を指摘する。同書21ページからの「第二、捜索隊の出発 後藤伍長の発見」に、1月27日の捜索において「雪中に直立したる」瀕死の後藤伍長と「五十メートルを経て神成大尉が雪中に仰向けに倒れたるを」発見した際の状況が記される。ところが同書110ページからの「青森聯隊遭難雪中行軍増補」「捜索隊の概況」1月28日から2月10日までを読むと、その1月29日のところに「第八哨所にて神成大尉の死体を発見せり」とある。雪中行軍隊指揮官である神成大尉の遺体発見は、27日が正しいのか、29日が正しいのか。続く1月30日「中野中尉以下死体三十六発見（注意）死体発見の数日々報告のものと異なるは各哨所に於て発見せしものを第八哨所に取纏め点検を行い然る後報告せしに依る」との注意書きがあるが、いかにも不自然である。1冊の中ですでに矛盾が生じているのである（27日発見するも回収できず山

中に残置、28日再度見失い、29日再び発見・回収、という解釈もできるかもしれないが、それでは捜索隊があまりにも拙劣である）。本書は事故直後に発行された史料として大変重要なものだが、速報性を重視したためか情報が錯綜したままに発行されたきらいがある。

『青森聯隊遭難雪中行軍』76ページから後編第一章「歩兵三十一連隊雪中行軍」が載る。青森隊とほぼ同時期に八甲田山系を通り落伍者も出さず踏破した弘前隊「福島大尉以下二十九名」（この資料では29名）について記載されている。国立国会図書館のデジタルコレクションでは81ページから88ページまでが欠落しており、弘前隊の1月25日の行程、三本木村から増澤村到着までしか確認できない。

欠落により後編第二章のタイトルは確認できないが、末文より仙台第四連隊の将官による青森隊・弘前隊の比較寸評と思われる。第三章「雪中の軍隊教育」、第四章「雪中凍死隊」、第五章「凍死の歌」、第六章「全国の評論」と続く。第五章に採られた脇屋三郎作詞「吊凍死大隊の歌（とうしだいたいむらいのうた）」には「第五連隊の一部隊／山口少佐の指揮の下／混成大隊編成し／二十三日の朝まだき」など事件の速報に即した文言が含まれている。「哀れ凍死の二百人」は部隊全滅の誤報に基づくと思われるが、事件から半月のうちに作詞されたことは間違いない。さらに「悼東北兵凍死之歌（とうほくへいとうしをいたむのうた）」として和歌十首が載る。これらの歌を各種事故報告と共に同書に収めた明治の新聞記者のバランス感覚は、筆者の理解の及ばないところであるが、当時の編集者なりの弔意の表明だったのだろう。

② 『遭難始末』

事故の半年後、1902年7月に発行された第五連隊編『遭難始末』は公刊の事故報告書という位置付けがなされているが、史料としての価値はどうだろうか。

非常に些末な点であるが、『遭難始末』が『青森聯隊遭難雪中行軍』を引用していると思われる点を挙げる。雪中行軍の実施にあたり、直前の1月18日に日帰りの予行練習が行なわれている。軍としては慎重に計画が進められた証左として記録に残したかったのであろう。『青森聯隊遭難雪中行軍』には「歩兵大尉神成文吉氏の指揮下に一中隊を編成し踏雪隊二十人を先導とし」とあり、『遭難始末』には「神成大尉の指揮下に一中隊を編成し」。「此行軍は二十名より成る寒地着隊を先頭とし」とある。中隊を編成した、としか記載が無いため、厳密にはこの予行練習の参加総数は分からない。後年の研究書で、例えば三上、山下は20名としているが、

これは『遭難始末』の先の文章を「此行軍は二十名より成る」で区切って誤読したためと思われる。『青森聯隊遭難雪中行軍』を併せて読めばそのような誤読は起こらないし、20名では小隊編成としても少ない。カンジキや橇を牽く者は随時交代したであろうから、川口の40名という推測が近いのではないかと思う。研究本の些末な誤りを指摘したいのではなく、『青森聯隊遭難雪中行軍』に書かれていないことは『遭難始末』にも書かれていない、ということを目指したい。次の文章の類似からも、引用は明らかであろう。

同日午前八時三十分第五連隊屯営を出発し同十一時三十分目的地たる燧山近傍に達し午後二時帰営、屯営燧山間の距離約二里半にして往路には四時間、帰路は二時間を費やし少しく人跡ある部分は一里の徒歩行に一時間半、全く人跡なき部分は二時間を要す
(『青森聯隊遭難雪中行軍』3ページ)

午前七時三十分屯営を出発同十一時三十分小峠丘麓に達し午後二時過帰営す屯営小峠間里程約二里強往路には四時間帰路には二時間を費やし全く人跡なき部分の行進には一里に二時間を要せり
(『遭難始末』5〜6ページ)

両方の傍線は筆者による。目的地の燧山(スイザンまたはヒウチャヤマか)は確認できなかった。青森県内では下北半島、恐山のさらに北に燧岳(ヒウチャダケ)を見つけたが、あまりにも場所が違い過ぎ、地名の燧山(ヤケヤマ)にしても増沢の先、三本木に近い。仙台の新聞記者である百足が何かの資料で混同したのだろうか。

到着が11時半で往路4時間なら逆算した出発時間は7時半が正しく、これも百足のミスで『遭難始末』が修正して辻褄を合わせたのだろう。さらに時間・距離・速度の情報が含まれ相互に矛盾することを怖れて、『遭難始末』は「二里半」を「二里強」と少し曖昧にしている。いずれにせよ、『遭難始末』が『青森聯隊遭難雪中行軍』(あるいはこれと同じ原資料)を引き写したのは間違いない。

引き写したにも関わらず、『青森聯隊遭難雪中行軍』に書かれていて、『遭難始末』に書かれていない事項もある。一例として『青森聯隊遭難雪中行軍』の「第二章 雪中行軍」には「歩兵第五連隊長津川歩兵大佐は軍隊の雪中行動研究のため雪中行軍を為すの計画を劃し立見第八師団長に具申」したと書かれており、連隊長が企画、師団長が承認したものはつきり書かれている。ところが『遭難始末』には対応する文章が無く、上級部隊の関与が確認できない。日本語特有の主語の無い文

章で企画立案の責任の所在が曖昧なまま、大隊長判断で神成大尉を行軍隊長とする命令がなされた、と続けてしまう。山口大隊長も神成大尉も遭難で死亡、当然ながら『遭難始末』発行時にはこの世の人ではない。意図的な削除とみて良いだろう。

肝心なその命令の記載もいよいよ加減である。大隊長が命じたという「第四、行軍に関する命令」では詳細が不明で「五、右の外実施に関する細事は凡て神成大尉の指示を受くべし」と丸投げされており、一方「第七、神成大尉の計画」は「神成大尉が大隊長の意図を受け細部の計画を立てたる原稿にして大尉の死体と共に発見」されたもので、「覚書」に過ぎないが大体この通り実施したようなので原稿のまま掲載する、と書かれているのである。『遭難始末』執筆者に、本気で遭難事件から教訓を得ようとする考えはあったのだろうか。

この「覚書」には「出場人員」の表があり各中隊からの参加人員が階級毎に一覧でき、総計210名となっている。『青森聯隊遭難雪中行軍』にあった参加者名簿は無く、巻末に「遭難死亡者人名」を附するのみ。第八中隊の倉石大尉は前日の壮行会席上、山口少佐から直々に説得され急遽参加と決めたという話が伝わっている(『歩兵第五聯隊史』に記載)。命令「覚書」の表では第八中隊の将校の欄4名、すなわち倉石大尉を含む人数となっている。神成大尉が計画書の下書きを行軍に持参したという話と、倉石大尉が行軍前日に参加を決めたという話、どちらが真実なのだろうか。積雪の八甲田山中に命令の下書き原稿を肌身離さず持参したという雪中行軍隊長は、ならば命令の最終版の完成原稿は一体どこに保管したのだろうか。「出場人員」の表は大隊本部の小計4名という数字も、『青森聯隊遭難雪中行軍』の3名と矛盾する。

大隊長の命令では「田代に向い一泊行軍を行う」と明記されている一方、神成大尉の「覚書」には「宿営地の里程及給養予定」に二泊三日、田代・鱒澤(『青森聯隊遭難雪中行軍』では「増澤」)を経て三本木(現十和田市)の計画が表で示されている。表の備考としてわざわざ「第二日以下実施せず」と書き入れたのは、『遭難始末』を編集した将官は、一泊説でなく二泊三日説を支持したのだろうか。その場合、三本木に進出した二百名の将兵は、また八甲田山系を通過して歩いて帰ってくるつもりだったのだろうか(当然、鉄道の利用が考えられるが、同書には帰路について一切の記載が無い)。命令の基本である、いつ・どこで・誰か、が全て曖昧なのである。問題は、山口少佐や神成大尉が本当に曖昧な命令を出したのか否か、ではなく、曖昧な情報しか確認できなかったという事実を認識できていない『遭難始末』編集者のレベルの低さである。あるいは不明の誹りを承知で韜晦したのであれば、そこにはまた別の思惑を考えなければなるまい。

『遭難始末』には生存者の証言に基づく遭難の状況やその後の捜索の状況なども詳細に記載されているが、そもそもの出版の目的が上級部隊の責任回避であることは明白であり、全てを真実として受け入れるのは危険である。なお、所属部隊が異なることもあるが、弘前隊の行軍については一切触れていない。

③ 『吹雪の惨劇』

『吹雪の惨劇』は大戦後、在野の研究者が独力で遭難事件の記録をまとめた自費出版の書籍である。全5部の大作となる計画だったが、1970年に第1部、1974年に第2部を出版するにとどまった。作者は小笠原孤酒、本名は小笠原広治、1926年(大正十五年)に青森県の十和田湖町で生まれた元新聞記者である。小笠原の足跡は同郷の後輩、三上悦雄の著作に詳しい。

時事新報社の記者であった小笠原が、同紙の産経新聞への吸収を契機に職を辞したのが1955年(昭和三十年)。その後、フリーの文筆家として糊口を凌いでいたが、郷里の青森県で自衛隊の普通科第五連隊(普通科は旧陸軍でいうところの歩兵科、ナンバリングも継承しているが、旧陸軍の第五連隊と直接の関係は無い)が、八甲田山遭難事件の経路を辿る冬季訓練を企画している、との記事を見て、風化した遭難事件を取材しノンフィクションとして発表することを思い立つ。この時点では小笠原と遭難事件の間には、青森という共通項しか無い。

取材手法はいかにも元新聞記者らしい、自ら現地を回り、関係者に会って話を聞いて回るといふ実直なものだったらしい。本稿図1では『遭難始末』に取材としたが、当然ながら入手しうる限りの資料を収集、事件当時の新聞や青森市史なども参考にしたとある。青森雪中行軍隊最後の生き残りとなった小原忠三郎元伍長にも国立箱根療養所まで足を運びインタビューを行っている。3回目にして最後のインタビューが1969年(昭和四十四年)8月。翌1970年2月、小原は天寿を全う、享年は数えて九〇歳。小笠原の取材により貴重な証言が後世に残されたこととなる(鴻上尚史が特攻隊の生き残り、佐々木友次のインタビューから『不死身の特攻兵』を上梓したこと、その社会的意義において相通するものを感じる)。同1970年7月、『吹雪の惨劇』第一部(前夜編・行軍編)を自費出版。時系列に沿って青森隊と弘前隊の両部隊を比較しつつ細大漏らさず事件を記録するドキュメンタリーは、小笠原の構想では全5部の大作となるはずだった。

知人の伝で小笠原が取材を進めていることを知った小説家の新田次郎は彼に手紙を書き、二人の初めての対面が同1970年8月。新田の青森取材が9月。小笠原は現地を案内するとともに、取材で得た情報を惜しみなく提供したらしい。『遭難

始末』では単なる加療中の死亡となつている山口大隊長のピストル自殺説も、小笠原が親族からの取材で情報を得て、新田に提供されたエピソードの一つとされる。新田は自殺説を小説に採り入れた。翌1971年『八甲田山死の彷徨』発刊。新田は小説に後記した「取材ノート」で小笠原の協力に対する謝辞を述べるとともに、書店には並ばない『吹雪の惨劇』の入手法まで懇切に記載している。ただし三上の確認によれば、『新田次郎全集』では「取材ノート」が削除されており、文庫本では「取材ノート」は残されているものの小笠原に関する文章は全て削られている。また、三上の述懐によれば、新田の小説の「人間実験」という結論にも反撥を禁じ得なかつたらしい。

新田の小説に遅れること3年、1974年(昭和四十九年)9月に『吹雪の惨劇』第二部(遭難編・葛藤編)を自費出版するも、結局これが最終巻となる。資金面での行き詰まりもあつたようだが、新田の小説がベストセラーになつたことで、明治の悲惨な事件をノンフィクションとして蘇らせ戦後の世に問う、という執筆の動機が薄れてしまつたのではないか。

小笠原の残したもう一つの業績として、遭難事件と靖国神社の関わりについて触れておきたい。遭難事件で亡くなつた将兵は戦死者に準ずるとされたため、靖国神社への合祀が検討されたが、結局は戦争中ではない平時の訓練中の事故であつたことを理由に却下された。新田は小説の終章で「靖国神社に合祀するということを聞いて、遺家族も国民もようやく納得した」と書いているため、その後、神社側が拒絶した経緯は知らなかつたのだろう。小笠原は調査を進める中でこの合祀問題に付き、1981年(昭和五十六年)神社側に合祀を請願するも、戦死者ではないことを理由に断られる。さらに遺族らの署名を集め1987年(昭和六十二年)再度請願するも、同じ理由で却下。

1902年1月29日に八甲田山遭難事件を報じた『東奥日報』は、元号が平成と改まつた1989年8月30日、小笠原の死亡記事を載せる。享年六三歳。未完に終わつた『吹雪の惨劇』とともに、合祀の問題もさぞ心残りであつたと思われる。しかしながら、小笠原が青森隊、弘前隊、その表面的な成功や失敗に関係なく平等に注いだ眼差しは、新田の小説にも確実に影響を与えている。彼の取材がなければ、我々の知る八甲田山遭難事件はまた別の色彩を帯びていただろう。一方で、軍の思惑で矛盾だらけの『遭難始末』他の史料からノンフィクションを構成しようという試みは、不良品のジグソーパズルを完成させようとするような、そもそもが不可能な試みであつたのかもしれない。

④ 『八甲田山』

小説家、新田次郎。本名藤原寛人。八甲田山遭難事件の十年後、1912年（明治四十五年）長野県生まれ。満州国観象台勤務時に太平洋戦争の敗戦を迎え、新田本人は抑留、生き別れた妻は幼子3人を連れ大変な困難を伴って帰国、この引き揚げ時の壮絶な体験を著したものが藤原てい『流れる星は生きています』であり、1949年発行、ベストセラーに。ちなみに、この本に登場する「次男」が数学者の藤原正彦である。

1956年『強力伝』にて直木賞受賞（作品の発表は1951年）。1966年に気象庁を辞し、以降は執筆活動に専念。気象庁勤務時代の経験と知識を活かした、山にまつわる作品を多く著したことから「山岳小説家」と称されることもあったが、新田本人はそのようなジャンル分けを快く思わなかったようである。

『八甲田山』から『八甲田山死の彷徨』の成立過程については、エッセイ集『白い花が好きだ』所収の『八甲田山死の彷徨「遭難始末」との出会い』に詳しい。これによれば、少年時代に軍歌の一節として親しんだ程度の遭難事件であったが、気象庁勤務時代に『遭難始末』を古書店で入手、執筆欲をそそられ小品『八甲田山』を仕上げた、とある。作品は1956年刊『孤島 他四編』に収録。事件のスケールに比し原稿用紙30枚ほどの内容に物足りなさを感じており、執筆活動に専念できらなくなったから大作『八甲田山死の彷徨』に取り掛かったという。

『八甲田山』の結末には「救助された者は僅かに十一名、大隊長山田少佐、今成大尉を含めて残る百九十九名の生命は、ことごとく雪の下に眠っていた」とある。山田少佐のモデル山口少佐はじめ6名は救助された後に入院先で亡くなったのだから、厳密には199名が雪の下という解釈は正しくない。『遭難始末』は「第六章特別業務」第5節「衛生事項」「四、生存者の救護並に治療」に一覧表を掲載し17名の入院患者の治療の経過をまとめている。官姓名も載せているため、山口少佐の入院治療中の死亡は明らかであり、新田らしからぬミスと見えるが、大隊長は31日に発見、救助され2月2日に亡くなった、という経緯は短編のラストとしては回りくどい。資料との矛盾は知りつつ、「ことごとく雪の下」と創作した可能性ももちろんある。

なお、同様のミスは後藤伍長の銅像の碑文にも見られる。「掘得大尉神成文吉以下百九十九人屍其幸而得生者大隊長少佐山口鋌等十有一人而已」とあるが、雪を掘って得た御遺体は193人分で6人は入院で亡くなった、また最終的に生き残ったのは11人だがここに山口少佐は含まれない（川口の指摘による）。創作を含む小説ならともかく、軍が悲劇を後世に伝えるためにわざわざ建立した銅像で、なぜ

このような単純な誤りを犯したのか。

短編『八甲田山』は行軍の発案も今成大尉とし、判断ミスで部隊を遭難させてしまった指揮官と炭焼きの経験を活かし生き延びた江藤伍長、2名の対比を中心に描く。このため、山田少佐は脇役の一人に過ぎない。道に迷い溪流を渡り、靴を濡らしてしまつたことが凍傷、遭難を決定づける。このシーンは新田の創作で追加されており、この時点では軍の装備で、雪道を歩いただけで凍傷になったことが、新田にとつてはイメージしにくかったのかもしれない。

⑤ 『八甲田山死の彷徨』

本作は短編『八甲田山』のリライトではない。一から再構成された本作は、青森隊の悲惨な遭難と弘前隊の紙一重の生還を描きミリオンセラー、新田次郎の代表作となった。

『八甲田山死の彷徨』では、作品内で参考文献が繰り返し提示される。

このときの状況を歩兵第五聯隊編集、明治三十五年七月二十三日発行の『遭難始末』より原文どおり抜粋すると、
(第二章 3)

この時の状況については正式遭難報告書ともいべき『遭難始末』には、
(引用部中略)

と書いてあるが、昭和四十年に自衛隊第九師団が発行した『陸奥の吹雪』には『第五聯隊雪中行軍の遭難によせる教訓』として、次のように記述してある。
(引用部中略)

この引用文の中の姓は実在した人物の姓である。
(第二章 5)

新田は神成大尉を『八甲田山』では今成大尉、『八甲田山死の彷徨』では神田大尉、両作に共通して山口少佐は山田少佐、後藤伍長は江藤伍長、『八甲田山死の彷徨』のみ登場する福島大尉は徳島大尉、と変名を用いた。実名を使わなかった理由を新田は筆に丸みを持たせるためとしているが、『遭難始末』他の引用部分では実名も載せており、右に引いたとおり「実在した人物の姓」だとわざわざ念を押している箇所もある。これで筆に丸みが付いたのかどうかは判然としない。

事件の真相を比較的正確に告げるものもあつたが、いい加減なものもあつた。このことについて『遭難始末』には次のとおり記してある。

(引用部中略)

と書いている。しかし背囊を焼くが如き虚構の流説に関しては、同じ本の第二章軍実施及び遭難の景況の第三日(一月二十五日)の項の中に、大隊長が人事不省になったとき、

「……背囊ノ木框ヲ脱シテ燃料ト為シ、火ヲ点ジテ大隊長ヲ煖メ蘇生ヲ図リ……」

と書かれている。背囊を焼いたのではなく、背囊の木框だけを焼いたのだという詭弁はかえって世人の矚感を買った。『遭難始末』は明治三十五年の七月に出版されたものであるから、軍としても未だに冷静を取り戻してはいなかったものと考えられる。

(終章 1)

新田が『遭難始末』を参考文献としながらも盲信していたわけではないことが知られる。遭難隊が背囊を燃やして暖をとったと噂された件については、具体的に『遭難始末』の矛盾を指摘している。背囊と同時に銃を焼いたかどうかも事件発生当時は議論となったが、銃を焼いてしまうと小説の中の「銃二挺」という小道具の意味がなくなるため、新田は銃の問題には触れていない。

三月の末になって、東北新聞記者、百足登編として、本文書店から『青森聯隊遭難 雪中行軍』という本が出版された。この本にも徳島隊が五聯隊の遭難凍死者二挺と二挺の小銃を発見したことが書かれてあった。

(終章 2)

本稿で前述した『青森聯隊遭難雪中行軍』も参考資料として名前が挙がっているがなぜ発行日が1ヶ月後になっている。なにより、実際には新田はこの資料を見していない。前述の『八甲田山死の彷徨「遭難始末」との出会い』に記載がある。重要な一節と思われるので長めに引用する。この史料が自衛隊の広報施設にて保管されていると知った新田は史料の一部を書き写して欲しいと知り合いに依頼する。

その資料はある将校が転任の際持ち出したままで行方不明になっていることだった。戦前の軍隊では考えられないことだし、現代の感覚でも了解に苦しむことだった。問題の資料は『青森聯隊遭難雪中行軍』と題して東北新聞社記者百足登編、明治三十五年二月、本文書店によって発行されたもので、その中には、歩兵三十一聯隊の福島小隊が雪中行軍中に、第五聯隊の遭難凍死体二名と銃二挺を発見したことが記述されている本であった。明治三十五年二月という

と遭難直後に発行されたものであるから、生々しいことが書いてあるだろうと思つたが、ついにこの資料には目を通すことができなかった。

やはり新田は「二月」という正確な発行年月を知っている。引用文中の「福島小隊」とは、小説中の徳島大尉率いる弘前行軍隊のことである。将校(幹部自衛官のことか?)が貴重な資料を紛失したという話が真実であれば、不適切な物品管理、幹部のモラルの低さが露呈している。反対に紛失そのものが外部に対する虚偽の説明であれば、嘘をついてまで見せたくない何かその資料に書かれていたともとれる。戦後発足した自衛隊が日露戦争前の旧軍をかばうかのような、一種異様な身内意識が感ぜられ気持ち悪い。現在『青森聯隊遭難雪中行軍』は国立国会図書館のデジタルコレクションで公開されておりインターネット経由で誰でも読むことが可能であるが、新田の言う死体発見の箇所は81ページからの欠落部分に合致する。奇妙な符合である。

徳島隊を案内した熊ノ沢の案内人の七人は、徳島大尉に絶対言うなと口止めされたまま、長い間、沈黙を守っていたが、昭和五年になって苦米地吉重氏によって初めて事実が明らかにされた。『八甲田山麓雪中行軍秘話』がこれである。

(終章 5)

広範な資料に基づき『雪の八甲田で何が起ったのか』を著した川口は「著書の中に、『八甲田山麓雪中行軍秘話』と『陸奥の吹雪』の存在を書き記している。これは小説家の誠意というものであろう」と評価している。筆者も同感である。新田が『八甲田山麓雪中行軍秘話』を入手して読んだのか、小笠原からその存在だけを聞き知ったのかは分からない。短編『八甲田山』ではどの資料名も出てこない(「一月三十日の大阪朝日新聞」という一節があるのみ)。以上のように、『八甲田山死の彷徨』は小説でありながら、研究論文さながらに多くの参考資料名がその著者名、発行年と共に示される。現実の事件に取材したことを強調するための演出という見方もできるだろう。しかし、後世の研究者に『遭難始末』だけが史料の全てではなく、また『遭難始末』に書かれたことが全て真実とも限らないというメッセージを織り込んだ、とも解釈できる。新田の本当の狙いは推測するしかないが、後世多くの八甲田山遭難事件研究者を生んだ要因の一つではあろう。小説の内容については第三章において後述したい。

⑥ 映画『八甲田山』

映画『八甲田山』は小説発行の六年後、1977年（昭和五十二年）公開。監督、森谷司郎。脚本、橋本忍。3年に渡る冬の八甲田山でのロケーション撮影などが話題になる。改めてその配役を見れば製作陣の力の入れようが伝わってくる。

弘前第三十一連隊 高倉健（徳島大尉役）

前田吟（斉藤伍長役）

加賀まりこ（徳島大尉の妻妙子役）

秋吉久美子（案内人さわ役）

青森第五連隊 北大路欣也（神田大尉役）

三國連太郎（山田少佐役）

加山雄三（倉田大尉役）

栗原小巻（神田大尉の妻はつ子役）

上官役にも大滝秀治（旅団参謀長）、丹波哲郎（第三十一連隊長）、藤岡琢也（第一大隊長）、小林桂樹（第五連隊長）と錚々たる顔ぶれが並ぶ。

もともと、筆者の世代では70年代の日本映画をリアルタイムには鑑賞していないため、その空気が掴めない。本稿では映画監督・押井守の映画評を手がかりとする。

『押井守監督が語る映画で学ぶ現代史』では「仁義なき戦い」を取り上げ、高倉健を「着流しの任侠映画」の代表格として、伝統的な世代のヤクザ映画の俳優と位置付ける。高倉健のように着流しを着こなせる俳優が少なくなってきた、一方で映画会社の新規路線開拓という需要があり、そこに現代ヤクザを描いた『仁義なき戦い』（1973年）という画期的な作品が現れた、と押井は見ている。

第一作のヒットを受けてわずか3ヶ月後に公開された第2作『仁義なき戦い 広島死闘編』において、北大路欣也は本作の主役とも言えるべき山中正治役を演ずる。明治の軍人と戦後のヤクザでは真逆のようでもあるが、組織の矛盾に翻弄された若者が最後に孤独な死を迎えるという役どころに、筆者はある種、共通するものを感じる。北大路欣也はさらに1974年6月公開の第5作『仁義なき戦い 完結編』でも松村保という重要な役を演ずる。東映の製作にも関わらず、高倉健はこのシリーズには5作いづれにも登場しない。

映画『八甲田山』で青森隊、弘前隊、それぞれの雪中行軍を指揮した隊長役を、現代ヤクザ映画で注目を集めた北大路と任侠ヤクザ映画で確固たる地位を得ていた

高倉が演じていたことになる。筆者の感想では、両名の年齢差もあり、原作よりも徳島大尉に貫禄がありすぎるように思える。

小説に書かれる神田大尉の「彼は明治元年秋田県の漁村に生れた。十九歳のとき陸軍教導団に入団し、二十一歳で軍曹になり、累進して、二十八歳のときに少尉に任官した。大尉になったのは、明治三十四年五月であった」という略歴は、現実の神成大尉のそれとほぼ合致する。山下は生まれを1869年（明治二年）とする。雪中行軍時、数えでなく現代の年齢の数え方でいえば32歳。一方の徳島大尉について新田は「神田大尉の方が年齢は上であったが、大尉になったのは徳島大尉の方が早かった」と書くが、これは神田大尉の平民出のコンプレックスを強調するためのフィクションである。モデルの福島大尉は1866年（慶応二年）生まれ、明治三十一年に大尉昇進。確かに大尉になったのは福島が三年早い、神成も福島も同じく教導団を経て士官、年齢が三歳上で同じようなコースなのだから特に不思議はない。雪中行軍時35歳。対して映画公開時の北大路欣也は34歳、高倉健は46歳。なお、映画の神田大尉と徳島大尉の会話の中で、徳島大尉は津軽出身だと語られる。現実の福島大尉は群馬馬場の出身であり、小説では徳島大尉の生まれに関する記載は無い。映画では回想シーンとの辻褄合わせのために設定を変えたのだろうか。結果的に、映画の徳島大尉は部隊経験も長く、郷里青森の自然や地形にも詳しいというアドバンテージを得てしまった。

小説を原作とする映画のヒットにより、新田が構築したフィクションとしての八甲田山遭難事件が映像と共に人々に共有され、現在多くの人々のイメージの源泉となっている。映画もその内容については、小説と並行して第3章で詳述したい。

二. 四 「リーダーシップ論」という受容

前節で、明治の事件発生後の資料と昭和になってから成立した小説、映画について一連の流れに沿って概観し、それぞれの資料が作られた際に様々な思惑で情報の取捨選択や意図的な改変が行われていることを見た。小説と映画のヒットにより多くの日本人が八甲田での悲劇を再確認することとなった1970年代、太平洋戦争の敗戦からも四半世紀が過ぎ、世の中は経済成長の真っ只中である。遭難事件を軍隊という特異な組織を背景として起きた不条理な悲劇としてではなく、ビジネスパーソンとしての視点から、有り体に言えば会社勤めの我が身に照らして捉え直した者も多かったのだろう。軍隊の序列を、会社の中間管理職に見立てた作品の理解が現れた。三上の述べたように、このような読み方は小説がヒットした早い段階から現れていたようである。

「会社が危難に直面した時、中間管理職や企業のトップとはどのように進退を決すべきかを教えてくれる本でもある」と紹介され、社員研修の教材にまとめ買いする会社があったと新聞に取り上げられた。それがまた話題になって売れ行きを増やした。

このような受容を背景に、小説または映画を元にしたリーダーシップ論が語られるようになる。一例として山下康博の著した『指揮官の決断』を挙げる。山下は1940年(昭和十五年)青森生まれ、高校で教鞭を執ったのち実業界に転身、八甲田山遭難事件を題材としたセミナーを数多く開く。2004年に講演録『天に勝つべし―八甲田山雪中行軍成功のリーダーから学ぶ』(北の街社)を発刊、『指揮官の決断』(中経出版)は2冊目の本となる。

大所帯の青森隊を企業に見立てれば、この企業は全滅、倒産の道をたどったことになり、一方の弘前隊は小所帯ながらビッグプロジェクトを見事に成し遂げ多くの成果を後世に残した。

山下の視点は明確である。学ぶということは、お手本あるいは正解があるという前提で遭難事件を理解するということである。すなわち弘前隊のリーダー福島大尉を理想のリーダーとするストーリーがセミナーの主軸となるため、「弘前隊」＝「成功」＝「善」が強調され、対照的に「青森隊」＝「失敗」＝「悪」と評価せざるを得なくなる。「私は、成功と失敗の要因をもって勝ち負けを論じるつもりはない」と慎重な姿勢を見せつつも「空前の大恐慌の中で、大企業は倒産し、中小企業は見事に生き残ったのである」と断言してしまう。軍隊内の力学で自発的に課した八甲田雪中行軍というリスクと、一企業や個人の判断では避けがたい経済恐慌のリスクを同一視することができるのだろうか。

本稿ではもちろんセミナーの是非までは踏み込まないが、問題はセミナー講師の主張ではなく、それを良しとしたセミナー受講者の側にこそあると考える。なぜ山下のセミナーは好評を博したのか? 「弘前隊」＝「少数精鋭」＝「中小企業」という分かりやすい見立てが、まさに中小企業を率いる経営者の耳に心地良かったからではないか。歴史上の出来事から教訓を引き出すことは勿論重要だが、100年も前に終わった出来事の結果だけを見て「遭難」＝「失敗」、「生還」＝「成功」という単純な2元論で評価を下すのは、セミナーとしては教えやすく聞きやすいだろ

うが、遭難事件の本質からは遠ざかっている。リーダー個人の資質とチームワークにのみ成功の理由を求めると、結局は安易な精神論に陥るように思える。

二・五 「資料」＝「真実」という誤解

『陰謀の日本中世史』の終章「陰謀論はなぜ人気があるのか?」において、呉座勇一は「過去を復元することの困難さを知る歴史学者は安易に「真実」という言葉は使わないのだが、陰謀論者は乱発する」と指摘した上で次のように書く。

陰謀論も、表の歴史、公式的な歴史とは異なる裏の歴史、真実の歴史という触れ込みがあるからこそ、人気を博す。「教科書の記述を盲信する一般人と違って、私は歴史の真実を知っている」という自尊心を陰謀論は与えてくれるのだ。まして、前述のように、陰謀論は教科書的な歴史像より単純明快で分かりやすいことが多い。歴史の勉強をせずとも簡単に理解できて、かつ周囲の人間に対して優越感を抱けるなら、これほどコストパフォーマンスが良いものはないだろう。

八甲田山遭難事件の「真実」と喧伝されているものは、いわゆる「陰謀論」とは多少性格を異にするが、なぜ多く語られ受け入れられるのかを考察する上で、重要な指摘かと思う。八甲田山遭難事件は小説と映画のヒットにより有名になった。映画の原作でもある『八甲田山死の彷徨』は、新田次郎の構成の確かさもあり、作中でフィクションであることを何度もほめかしているにも関わらず、あたかも遭難事件の「正史」のような位置付けを得てしまった。その反動として、後年の著述家は競って本のタイトルに「真実」を標榜するという慣例を生んだ(本稿も敢えてその不思議ならわしに従った)。2002年、百年の節目を機会に遭難事件が再注目され、その後、関連本の出版が相次いだ。ここではこの時期に発行された3冊の本の、帯の作文(表紙側)に注目してみたい。傍線はすべて筆者による。

兵士たちの死は無駄ではなかった

明治35年、青森歩兵五連隊の199人が死亡した吹雪の惨劇。真相追及半ばに倒れた元時事新報記者・小笠原孤酒の遺志を継ぎ、元毎日新聞記者の著者が調査、晩年に力を振り絞って書き下ろした迫真のドキュメント。

(三上悦雄『八甲田山の雪中行軍真実を追う』2004年)

「死の行軍」の真相 作家 早乙女貢 推薦

二百十名のうち、たった十一名しか生き残れなかった「雪中、死の行軍」。その指揮官山口大隊長のピストル自殺は、果たして事実か。多くの疑問を抱かせられていた「八甲田山雪中の迷走」の真相がここにある。日露戦争を目前にした皇軍の苛酷な訓練が齎した悲劇。もう一人の指揮官福島大尉の苦悩と決断。これは百年目にしてはじめて明かされた死の行軍の真相である。

(山下康博『指揮官の決断』2005年)

日露戦争の2年前、厳冬の八甲田山系で既に闘いは始まっていた!

防衛庁秘蔵の資料を駆使して、生存率5%の大量遭難の謎と真相に迫る。

(戦略戦史研究会『生存率5%の闘い』2006年)

残念ながら『生存率5%の闘い』に関しては、少なくとも筆者の手元の初版第一刷では誤字脱字が多いことを指摘しておかねばなるまい。さらには『遭難始末』の「携行すべき器具材料並糧秣」の表中「清酒 二斗〇〇」とあるのを「二〇〇斗」と写し間違え、「清酒一人当たり百合は明らかに多いが」凍結実験のためかしら、などと書いている。巻頭には「本書を国家のために八甲田山及び日露戦争で戦死した二百余名の戦士に捧げる」とある。大丈夫だろうか。

三上の本は親交のあった小笠原孤酒の業績を世に知らせたいという想いで書かれた。山下の本は前述の通り福島大尉の功績を伝えようと書かれたものである。戦略戦史研究会はその会の名称が示す通り、戦史から教訓を得ようと書かれた本であろう。三者三様、異なる動機を持つて書かれているにも関わらず、共通して「真実」を謳い文句にしているのが面白い。同時に、「真実」を謳う遭難事件本において、会話文が多用されるのも不思議な一致である。

村上の剣幕に、温厚な山口がたじろいだ。

「わかった。連隊長がなぜ大寒にこだわるのかわからないが、行軍時期の変更をお願いしてみる。そのときは土地つ子の村上さんが、『一月実施では、軍医として参加隊員の命の保証ができないと言っている』と説明してもいいかな」
「どうぞ、どうぞ。いくらでも村上のせいにしてください」

「部下を死地に又火鉢か、との一言は効いたよ。北の脅威に備えて一兵たりとも損じてはならない時期だ。そのおりは、私の同行も検討しなければなるまい」

三上は(あるいは小笠原は)山口少佐の雪中行軍参加に不自然なものを感じたのだろう。大隊付き軍医の村上からの諫言という場面を創作している。しかしこの説を探ると、今度は村上軍医の雪中行軍隊不参加が不自然になってしまう(同行し遭難死したのは三大隊付きの永井軍医)。

弘前隊は雪塚の中で終夜立ち続けて夜明けを待った。

「眠るな、眠らせるな! ここで凍死すること日本がロシアに負けることだ。

満州やシベリアはこんなもんじゃないぞ!」

一人なりとも死なせてはならないという福島大尉の叱咤が飛ぶ。

山下が福島大尉にリーダーの理想を見ているのではなく、理想のリーダーとしての福島大尉を創作しているのである。福島大尉がどこまでロシアとの開戦を意識し自分たちの雪中行軍を位置付けていたか、あるいは部下にも意識させていたか、実際のところは分からないが、本場に「満州やシベリア」を意識していたのなら、地元の人を依頼することや村落での宿泊・食糧調達は一切するべきではなかったのではないか。あるいは、この時点で全て現地調達による大陸侵攻を企図していたのか:

鳴沢露营地から馬立場に出るまで、川や岸に阻まれて三度も転回運動をしたので、絶望した神成大尉が「天は我を見捨てた。全員昨夜の露营地で死のう。」と叫んだ。

映画で有名になったシーンであるが、生存者の証言からそのような発言があったと考えられている、というだけである。特に遭難後の経緯は少数の生存者の証言と遺体発見位置から推定されたものであり、証言も極限状態での思考能力低下、錯覚、記憶の混乱などを踏まえて吟味すべき資料であろう。小説なら読者を引き込むために会話文を使うのは全く問題ない。「真実」を求めた研究本であると称しながら不用意に会話文を挟むのが危険なのである。

このように3冊に目を通していくと、彼らが言う「真実」とはなにかが見えてくる。つまり、新田の小説と資料に違いを発見して、脊髄反射的に小説は嘘、資料こそ真実、と仕分けしているに過ぎないのだ。新田の小説は、フィクションなのだから創作を含むのは当然である。しかし、小説がフィクションであることは、これに

反する資料が絶対的な真実であることを意味しない。当然である。オセロの駒のように黒をひっくり返せば白になるという単純なものではないはずだ。すでに『青森聯隊遭難雪中行軍』や『遭難始末』に誤謬や矛盾があることは指摘した。資料そのものの正確さを吟味する視点が、ごっそり抜け落ちていと言わざるを得ない。

ここで再度、雪中行軍は一泊か二泊かの問題を蒸し返そう。三上は小笠原が取材で得た複数の傍証をもとに二泊行軍説を採ったとしている。山下は一泊二日、ただし天候が良ければ二泊三日に伸ばそうという二段構えだった、という解説をする。戦略戦史研究会は山口大隊長は二泊三日の行軍を決定したと記しながら、命令では一泊行軍と書いており、単に『遭難始末』の矛盾をそのまま引いている。

「真実」は「陸軍は雪中行軍隊の計画が一泊なのか二泊なのかすら把握しておらず、遭難発生後も確認できなかった」、である。

二六 「日露戦争開戦前夜」という言説

八甲田山遭難事件について解説した書籍において、「日露戦争開戦の二年前」という但し書きは最早、枕詞かと思えるほど定番の表現になっている。後世の我々は1902年遭難事件、1904年日露戦争開戦という歴史年表を元に事件を見てしまいがちである。もう少し長いスパンで見ると、日清戦争→三国干渉→八甲田山遭難事件(日英同盟締結)→日露戦争→ポーツマス条約締結という時系列の中で遭難事件の位置付けとなるだろうか。しかし、遭難事件の当事者にとつて、日露戦争はあくまで未来の出来事である。結果的には国民が戦争を支持し開戦、日本が勝利したため、遭難事件に関して陸軍が主張した「厳冬期訓練の必要性」「訓練想定の妥当性」「事故から教訓が得られた」という言説が説得力を持つて受け入れられているが、これらは全て、あくまでも結果論である。

アンヌ・モレリはその著書『戦争プロパガンダ10の法則』において、第一の法則を「われわれは戦争をしたくない」、第二の法則を「しかし敵側が一方的に戦争を望んだ」とする。これらの法則を八甲田山遭難事件にまで敷衍すれば、陸軍は冬季訓練実施の妥当性を主張するがために来たべき日露戦争の蓋然性の高さを挙げながら、一方でその戦争とは、我々の望まない侵略に対する防衛戦争だ、とする態度を取り続けなければならなかった。本音としての海外の寒冷地への出兵を前提とした訓練、建前としての自衛手段を講じるための訓練。この本音と建前の合の子が、ロシア軍の青森侵攻という想定だと言つて良い。

『生存率5%の闘い』の「はじめに」では「第五連隊第二大隊が八甲田雪中行軍を実施したのは来るべき対ロシア戦に備えるためであった」と書き、「プロロー

グ」においても「ロシア艦隊が青森湾を封鎖した場合においても、青森から田代街道を経て三本木平野に進出できるようにする意義があった」とする。

山下はこの想定をさらに進めて、『指揮官の決断』において略地図も用い、第八師団が考えていたとする「ロシア軍上陸の想定シナリオ」を次のように説明する。

まず、ロシア艦隊は津軽海峡に進入し陸奥湾を封鎖、海上から青森の町へ向けて猛烈な艦砲射撃を浴びせる。すつかり焦土と化した青森の町に、ロシア軍の地上部隊が上陸、手始めに鉄道と道路を封鎖、同時に電線・電話線も切断し、交通と通信の手段を断つ。

前述の通り山下は昭和十五年の生まれなので、軍隊経験は無い。当たり前だが第八師団配属の経歴は無い。書中に引用や脚注も示されていないため、山下がこのシナリオの裏付けとして参照した資料も不明であるが、地上目標に対する徹底した艦砲射撃とその後の上陸という作戦は、日露戦争というよりむしろ太平洋戦争における米軍の作戦を想起させる。圧倒的な物量差と上陸・占領による戦略的価値(太平洋戦争時の米軍にとつては飛行場の開設)があつて初めて成立する作戦である。雪に閉ざされた青森を占拠したロシア軍は、そのまま春を待つのだろうか。平館海峡を通じて青森に食料や物資を運ぶロシア船舶は、日本海軍の格好の標的にならないだろうか。

艦砲射撃という戦法は、砲の射程や精度により、その時代その時代で評価が変わる。日清戦争では「澎湖島の砲台を目標に、こつちの艦から三十センチの大砲で射撃するので、まるで演習のようなもの、敵の砲台から撃ち出す砲弾は艦隊には達せずに途中で落ちてしまう」という状況もあつたらしい(1895年、古島一雄の回想)。日露戦争では、ロシア軍の旅順要塞攻略に苦戦した日本軍が「海軍陸戦重砲隊」を特別編成、艦船に搭載していた砲をわざわざ陸揚げし砲台に据え付け、陸軍の作戦に参加した(1904年7月)。要塞や市街地に遠距離砲撃を加えた他に、海上のロシア艦を撃沈大破したとされる。さらに二〇三高地の制圧の後、陸砲により旅順艦隊残存艦艇を攻撃、壊滅させたという記録もある(1904年12月)。日露戦争の事例については山下の想定にある「艦船」↓「地上」ではなく「地上」↓「艦船」の砲撃であり、真逆である。

なぜ八甲田山遭難事件に関して、陸奥湾経由、青森侵攻というシナリオが生まれ語り継がれたのか。筆者の推測では、大元は『青森聯隊遭難雪中行軍』の74ページ「第四、大惨事の調査」にある「元来青森弘前の二衛戍地は敵軍が津軽海峡を占

領し青森湾付近に上陸してまさに首府に迫らんとするの危害に備えるにある」の一文だと思われる。青森、弘前にそもそも連隊が置かれている理由として青森湾への侵攻を挙げ、今回の遭難事件は平時の訓練中の事故であったが、もしこれが戦時中の兵力損失であつたら防衛作戦全体が破綻してしまうだろう、というのがこの文章の趣旨である。訓練計画のための神成大尉の想定とされる「八戸平野に侵入せる敵に對し」「三本木に進出し」（『遭難始末』）とは直接の関係は無い。資料の引き写しを繰り返すうちに、三題漸が成立してしまつたのだろう。

後世に軍の想定の前部分だけを間に受けこれを鵜呑みにしてしまうと、青森焦土作戦にまで行き着く。本音であるシベリア出兵まで考えたときに、青森行軍隊が地元民を案内に使わなかつた意味が初めて理解できるのだ。

二七 事故の教訓

「厳冬期訓練の必要性」「訓練想定の妥当性」が2年後の日露戦争により後付けでの説得力を持ち得た、という筆者の見解を述べた。もう一つ、「事故から教訓が得られた」についてはどうだろうか。筆者はこの点についても否定的に見ている。否定的な理由の一つ目は、軍が日清戦争の反省を活かしていないこと。二つ目は、日露戦争に活かされていないことである。

映画『八甲田山』において、青森、弘前、両雪中行軍隊が軍歌に合わせて行進するシーンがある。歌詞は山下の書籍に従つた。

雪の進軍 氷を踏んで どれが河やら 道さえ知れず
馬は斃れる 捨ててもおけず ここは何処ぞ 皆敵の国

日本陸軍には、すでに日清戦争における寒冷地での体験があるからこそ、この軍歌「雪の進軍」が作られていたのである。山下は日清戦争での凍死者を四千数百人とする。二十四万余りを動員した日清戦争の戦死者数千三百三十二名、ただし戦病死者も含めた死者一万三千四百八十八名、さらに公式にカウントされていない軍夫の死者が約八千名と言われている。凍死者数は諸説あるものの、戦闘中の死者より（凍死者含む）病死者の方が圧倒的に多かったというのは明らかである。もし日清戦争の反省から陸軍が学んでいたならば、八甲田山での遭難事件を待たずして、陸軍の冬季装備の不備は明らかだったのである。一方で、青森五連隊、弘前三十一連隊が属する第八師団は、日清戦争後に増強された師団の一つである。兵の頭数は増やしたものの、装備の充実には手が回らなかつたということか。量の議論は誰にで

もできるが、質の議論は愚者にはできない。日清戦争の反省を活かせない組織が、どうやって遭難事件の反省を活かすというのか？

それでも八甲田遭難事件の反省が2年後の日露戦争に活かされたという言葉がまことしやかに語られている。反証を挙げたい。遭難事件生き残りの一人、倉石大尉は参加者の中で一人だけゴム長靴を履いており、これが凍傷を防ぎ奇跡的な救助に繋がつた、とされる。17名の救助者のうち6名は病院で死亡、8名は凍傷により四肢切断という重傷だつたことを考えれば、素人考えにもゴム長靴の優位性は明らかである。ならば、陸軍はゴム長靴を正規の装備品とし全将兵に配るべきだつたのではないか？実際の日露戦争時に支給された防寒装備は編上靴にメリヤス製の防寒靴下である。どこに遭難事件の反省があるのだろうか？あるいは、高価なゴム長靴は兵士にはもつたないという判断だつたのか？

事実は全く逆で、軍はゴム長靴の効果が限定的だという具体的なデータを持つていたのだろうか。それならば、倉石大尉の奇跡の生存とゴム長靴を結びつけて語るのは危険である。

新田の小説の終章においても、師団長立川中将が連隊長相手に演説する場面で、「遭難事件取調委員会の具申によつて、軍の寒中装備は全面的に改良されることになつたようだ」と語らせており、この解釈が一般に支持されている。しかし、「改良」の具体的な内容について記載された資料を未だに見ない。小説のセリフも、よく読むと伝聞であり、もしかすると靖国神社と同じ構図かもしれない。合祀すると言いつつ、合祀していなかった。改良すると言いつつ、改良していなかった。果たして、教訓は活かされたのか。

三二 小説『八甲田山死の彷徨』

三二 一 小説の概要

改めて、新田次郎の小説の内容について確認する。ノンフィクションを志向した小笠原と異なり、新田は小説としての完成を目指した。小説の序章で旅団司令部における会議から両隊の準備状況までが描かれ、第一章「雪地獄」では弘前隊の行軍の様子を、第二章「彷徨」で青森隊の行軍と遭難までを描き、第三章「奇跡の生還」で再び弘前隊に戻り、青森隊がまさに遭難した難所に弘前隊が突入していくという構成で、弘前隊の八甲田山系通過も遭難と紙一重であつたことが描かれる。本稿で特に指摘しておきたい創作部分を挙げれば次の4点となる。

① 旅団司令部での会議

小説の冒頭、弘前にある旅団司令部の会議室において、旅団長より二人の中隊長に直々に厳冬の八甲田山雪中訓練が呈される。あくまで検討課題の付与という体裁をとるが、同席する連隊長、大隊長の頭越しに直々に若い中隊長に出された打診は、実質的な命令と言えよう。「空気」「忖度」で動く日本の組織がここにも見てとれる。実際には、青森第五連隊の側は1月に入ってから、別の中隊長から神成大尉に行軍指揮官の交代があったという記録があり、一方の弘前第三十一連隊の側では3年がかりの研究行軍の仕上げという位置付けであったことから、史実においては部隊間の申し合わせは無かった、と考えられている。遭難当初、弘前隊青森に到着の報が青森隊の帰隊と混同され情報が錯綜したという記録（混同したというエピソードは小説にも使われている）もあり、上級部隊が実施時期・場所まで指定し関与したというのは新田の創作であろう。ただし、上級部隊が冬季訓練を励行する雰囲気は記録からも感じられる。また、日清戦争の講和から7年が過ぎようとしており、将官の中には武功を焦る者も居たのではないか。

『青森隊遭難雪中行軍』には第八師団長「立見中将の談」として以下の文が載る。「青森の連隊でも去二十三日三組の雪中行軍を催し或者は数泊行軍或者は一泊行軍をする事になって数泊行軍は師団長の命を待ちますが一泊行軍は連隊長限りで出来るので山口大隊は実此一泊行軍を企てたのです」（72ページ）。新田は小説内で徳島大尉に「三日以内の営外演習なら、旅団長の許可は必要としません」と語らせているが、現実の師団長の談話とは矛盾する。また同じ日に青森連隊の「三組」の雪中行軍隊とは、一体何を指しているのだろうか。いずれにせよ、早い段階で上級部隊の長が、遭難した行軍隊は一泊の予定、かつ一泊であれば自分の責任ではない、と明言してしまったことが、『遭難始末』での一泊か二泊かを曖昧にした記載など、その後の混乱の元凶かと思われる。このような上級部隊の関与の否定、無責任体質を資料の行間から敏感に感じとったからこそ、新田次郎は小説の起点を会議室に設定し、上級部隊の関与を明確にしたかったのではないか。

② 神田大尉の徳島大尉宅訪問

①で前述の通り第五連隊の指揮官は行軍の直前に変更されているため、また兩名の間に特別な親交があったというような記録も残っていないことから、12月のはじめに神田大尉が徳島大尉の家を訪ね意見交換をするという場面は完全にフィクションである。小説ではここで「当時の将校の履歴を見るとほとんどが士族又は華族出身」と書かれ、神田大尉は教導団を経て大尉となった数少ない平民出身の将官

だとする。すなわち神田大尉は実力を備えた優秀な軍人である、という設定なのだ。反面、士官学校出身の徳島大尉に対し自ら卑下するかのような態度も描写される。徳島大尉のモデル、福島大尉も教導団出の将官で、エリートという設定は新田の創作による。新田は二人の行軍隊長のいわゆるキャラクターを立て、それぞれの性格を際立たせるとともに、二人の親交を巧みに創作することで物語に重層的な人間関係を設定し深みを与えている。

③ 徳島隊の遭難者発見

小説において、最大の難所となる鳴沢を現地の案内人に従って通過した徳島隊は、雪の中に銃と遺体を発見する。この遺体は長谷部善次郎、神田大尉の従卒であり、また徳島隊の斎藤伍長の実弟でもあった。この血縁関係は小説内の設定である。また、小説の設定では旅団長からの示唆を両連隊長が忖度し、青森隊と弘前隊は「八甲田山あたりで擦れ違う」ような行軍日程が計画されており、徳島大尉は青森雪中行軍隊との接触を（遭難の可能性も含めて）予期していた。よって小説を読み進める上では徳島隊の遭難者発見になんらの不自然さは無いが、このフィクションに噛み付いた人物がいる。福島大尉の甥にあたるという高木勉である。氏は『われ、八甲田より生還す』『実録八甲田山指揮官福島大尉の人間像』『八甲田から還ってきた男』の3冊を上梓、遭難の事実を一貫して否定した。友軍の遺体を雪山に残置したとなれば福島大尉の不名誉に繋がる、と考えての懸命の訴えだったようだが、逆にこの問題にスポットを当ててしまった感がある。その後、様々な資料の存在が明らかになり、『歩兵第五聯隊雪中行軍遭難に関する委員復命書附録』で福島大尉本人の証言も確認され、現在では弘前隊による遭難者発見は史実であると考えられている。二次遭難のリスクを考えれば、小説中の徳島大尉の判断は妥当とするのが、現在の大方の見方である。

④ 倉持見習士官

史実にはあまり直結しないかもしれないが、弘前雪中行軍隊、倉持見習士官というキャラクターの存在は、徳島大尉の造形に陰影を与え、小説に凄みを与えている。筆者は、倉持見習士官の設定こそが、小説の構成を支える要石になっていると評価したい。

倉持見習士官は、徳島大尉が獵師の弥兵衛に五十錢玉二個を与えるのを蔑如の目で眺めていた。なんと気障なことをする隊長だろうと彼は思った。

弘前隊の隊員の中に、徳島大尉への批判的な視点を導入することで、決して弘前隊が一枚岩の完璧な組織ではないことを示す。この人間関係にある僅かな不信の芽を描き、これが極限状態においてヒビとなり亀裂となつて、青森隊と同じように組織の崩壊につながるのではないか、という緊張感を持たせているのである。

倉持の徳島大尉への眼差しは、青森隊における神田大尉の山田少佐への眼差しに絶妙に重なる。

従軍した七人の見習士官中、平民出身は彼一人であつた。倉持見習士官はなにかといえば、平民と士族を区別したが、軍の風潮に反発を感じていた。

平民出身というコンプレックスは神田大尉の苦悩にも繋がる。また、行軍中の課題として雪中における路上測図を割り振られていた倉持は、歩測を担当した斎藤伍長と近しく、彼の異変にいち早く気付く。これは、後の実弟の遺体を発見する下りに繋がる。倉持見習士官の存在が、物理的には隔離されている弘前隊と青森隊を結びつける役割を果たしている。

現実の弘前隊隊員名簿には高倉見習士官という名前が見え、福島を徳島と置いたように名前を拝借したのかもしれないが、彼の研究課題は「行軍長径並びに歩度の調査」であつて路上測図ではない。他6名の見習士官の研究テーマにも測図というキーワードは見当たらず、すなわち、路上測図とはストーリーの展開上、倉持見習士官と斎藤伍長の会話を自然なものにするための創作だと考えられる。新田のフィクション構成の緻密さには、ただ驚かされるのみである。

以上、小説の創作部分のうち重要と思われる4点を挙げた。しかしながら、新田の圧倒的な筆力による巧みな「小説」||「虚構」の成立こそが、追隨する多くの研究者による「史料」||「真実」という誤解に結びついたきらいもある。

三二 映画『八甲田山』での変更

濃緑の中に点在する紅葉が美しい、八甲田山系の空撮映像がスクリーンに映る。

1977年公開の映画『八甲田山』の幕開けである。前述の通り映画は新田の小説のストーリーをほぼ正確にトレースしているが、いくつかの点で映画独特の解釈や逸脱が見られる。例えば、雪中行軍を前に、神田大尉が徳島大尉宅を訪問するという場面設定そのものは小説を踏襲しているが、映画ではさらにこのシーンに徳島大

尉の妻と愛娘を登場させる。物語にさらなる奥行きを与えようという脚本上の配慮か、家庭の温かみを映すことで後の雪山の峻厳さを引き立てようとする視覚的な効果を狙つたものか、あるいは単に興行的な成功のため女優を登場させるという、映画業界での慣例だったのか。現実の福島大尉は八甲田山行軍時には独身¹。行軍の9ヶ月後、1902年10月に成田キエと結婚、一女をもうける。意外や子煩悩であつたことも「史実」のようだが、この長女が1歳の時に福島大尉は日露戦争黒溝台の戦いで戦死¹、映画のような団欒は実現し得なかつた。

女優に関して言えば、遺体安置所で気丈に振る舞う神田大尉の妻（栗原小巻）と男泣きに咽ぶ徳島大尉（高倉健）のやりとりは、映画では屈指の名シーンだが、これも映画のオリジナルで小説には無い。そもそも、小説の徳島大尉は神田大尉が亡くなつたことを聞かされただけで、遺体を見てはいない。

徳島大尉率いる弘前雪中行軍隊は、小説の（従軍記者除き）37名よりもさらに人員を減らし、映画では27名という設定となつている。キャストینگ上の制約も当然あつただろうが、部隊が行進する時に絵になるかどうかで決めた人数なのではないか。これも映画というメディアの特性ではあるが、結果的に弘前隊の少数精鋭¹が史実以上に強調されてしまつた。

資料になく小説で創作された部分、本稿の前節で取り上げた①③については、いずれも小説をそのまま踏襲するのに対し、④倉持見習士官のキャラクターに関しては再現されていない。小説と同名で登場はするものの、彼の徳島大尉への反感という描写は映画では一切描かれな¹い。高倉健の演技も相まって、映画では徳島大尉が理想の人物像として描かれ過ぎていくさ¹ら¹いがある。もちろんこれは俳優に遠慮をしたというわけではなく、映画というフォーマットと限られた上映時間の中で大規模な遭難事件を伝えるために、主役の徳島大尉には小説以上に明確なキャラクター付けが必要とされる一方、脇役の一人一人について細かな描写をする余裕がなかつた、ということだろう。ただし、この万人に分りやすい指揮官像が、公開後の安易なりーダーシップ論の温床となつてしまつたとも言えよう。

映画では視覚に訴える映像という表現手法のメリットを活かし、青森隊と弘前隊の様子が交互に映し出され二隊のコントラストが強調される。小説でも歩きながら斃れる兵士や発狂して裸になる兵士などが容赦なく書かれるが、映画で生身の人間が演じることによる迫力はまた別のものである。さらに崖からの滑落などが執拗なまでに繰り返し映し出され、雪を染める出血の表現などもあり、遭難の悲惨さが視覚的に増強される。

大隊長の自決のシーンはどうだろうか。小説では山田少佐に新聞を持って来るよう頼まれた看護卒が病室を離れた間に銃声が響き、看護卒が走って部屋に戻った時には「すべては終わっていた。山田少佐は心臓を見事に射ち抜いて倒れていた」とその瞬間の直接の目撃者を排除して描かれる。映画では入院着を白装束と見立てた山田少佐がピストルを心臓に向け当てがい、引き金が引かれるまでを正面からワンカットで見せる。人払いした病室であることには違いないが、映画では観客がその瞬間の唯一の目撃者となる。

小説と映画の違いとして特記しておきたい象徴的な変更が、案内人さわわのシーンである。小説では弘前隊の1月24日の行程において、宇樽部から戸来までの案内をする。川口によれば『吹雪の惨劇』第二部には山本ハルという婦人が登場しており、ならば、小笠原の取材メモを元に新田が造形した人物であろうか。『青森聯隊遭難雪中行軍』にも記載があるが、「なお最も驚嘆すべきは二十二、三歳の婦人は二人の男と共に軍隊の後を追ってこの危険を冒したるの一事なり」「一婦人にしてよしや軍隊の援助」があつたとしても驚くべきことだ、と紹介している。この文章では案内人というより、行軍隊の後を追従、さらに男性二人と行軍隊のサポートを得ながら同じ経路を踏破しただけ、とも読める。婦人が命を賭してまで隣村に行かなければならない事情とはなんなのだろう。あるいは単純に明治の軍人にとつて、女性に先導されたとは書きにくかつたのだろうか。新田の小説では「二人の男」も存在せず、さわわ一人が案内に立つ。

隊員たちはさわわ女に牽かれていた。そこには大尉も中尉も少尉もなく、指揮官はさわわ女であつた。さわわ女が先頭にいるかぎり、この雪地獄から脱出できると、信じていた。

隊員たちは、さわわ女に引張られて犬吠峠を越えた。

悲壮な決意を秘めた徳島大尉、そして命ぜられたままに黙々と進軍する弘前隊と、舞うように吹雪を避けて進むさわわの対比は、筆者の大好きなシーンの一つである。ただ、小説と映画では次の村落にたどり着いた際の徳島大尉の行動が180度逆転する。戸来に到着した場面を小説では次のように描く。

下に部落が見えると、徳島大尉は、さわわ女に案内料として五十錢玉一個を与えて、

「案内人は最後尾につけ」

と大きな声で怒鳴った。

「もう用はねえつてわけかね」

さわわ女が言った一言は、それを聞いていた隊員たちの心を打った。隊員たちは心の中で彼女にすまないと思った。

前に指摘している通り、倉持見習士官の目を通して徳島大尉の案内人に対する態度を描写した上での、この文章である。

一方、映画の徳島大尉（高倉健）はどうか。村落が近づき、副官は案内人を後方に下げるよう徳島大尉に提案するが、徳島大尉はこれを却下、さわわを先頭にしたまま二列縦隊で行進、部隊は日の丸の小旗を振る村人に迎え入れられる。さわわと別れる際には、徳島大尉は行軍隊に頭右の号令をかける。頭右とは階級が上の者に対する部隊全体での敬礼であり、この場面では最敬礼を表したと言つて良いだろう。軍隊の儀礼についてはよく分らないさわわは、とにかく笑顔でお辞儀をしながら去っていく。これも心に残るいいシーンである。階級・職業・性別を超えたりスベクトル：ただし、この価値観は、戦後の平和を享受する1970年代だからこそ共感を得られたものかもしれない。

文章を重ねて読者の想像を促す小説と、映像と音楽の力で登場人物への追体験に誘う映画では、当然ながら表現のセオリーが違ってくる。小説と同じテーマを継承していたとしても、映画が小説通りである必要はないし、また同じであることはあり得ない。何よりも、具体的な資料名を挙げてフィクションであることを繰り返し表明した新田の小説と異なり、映画ではあたかも史実をベースに作られた物語のように受け取られてしまう。この映画の大ヒットにより、新たな八甲田山遭難事件のイメージが「おそらくは新田の小説よりかなり毒抜きをされたイメージが「昭和の価値観において共有されてしまった、とも言える。

四. 山口少佐謀殺説について

最後に、山口少佐の死因について考察しておきたい。

『遭難始末』で「二月一日夜入院治療」「二月二日午後九時死亡」と記録される山口大隊長について、新田は侍従長視察の夜、ピストルで自らの胸を撃ち抜いたとした。この話の元は小笠原が取材の中で山口の親族から聞いたスクープであり、新田は小笠原の説に従つたとされる。大隊長の自決は映画でも踏襲された。しかし、自殺説の元となった山口少佐の実兄、成澤知行予備砲兵中佐の行動につ

いて、川口は当時の鉄道ダイヤを含めて詳細に検討し、多くの矛盾を指摘している。さらに自殺説への疑念を一步進めて、謀殺説にまで展開したのが弘前大学麻酔科教授の松木明知である。山口少佐は四肢凍傷のため自決は不可能、主治医中原貞衛が1月31日の段階で一人山形から師団長の命令で青森に呼ばれたことなどから、麻酔薬として使用されるクロロフォルムを高濃度で投与した可能性に言及している。いずれも傍証ではあるが説得力があり、少なくとも拳銃自殺はあり得ないと考えられる。

松木の説の弱点を挙げるとするならば、軍の動機が明確でないことだろう。山口少佐を謀殺するメリットは何か、誰が得をするのか。確かに表向きには山口少佐は加療の甲斐なく死亡、このため軍の責任は曖昧になり、一方で山口少佐の遺族にだけは自決したという「真実」が語られることで、このプライバシーに関わる秘密の共有は箝口令と同じはたらきを持った。確かに軍にはメリットがあつたようにも思われる。ただ、これらのメリットはあくまで結果論から見たものに過ぎない。

呉座勇一は『陰謀の日本中世史』の中で、最終的な利益を得たものが最初から全てをコントロールしていたという考え方は陰謀論に陥りやすいと説く。遭難事件が報道されてからまだ数日しか経過していない、捜索を開始したばかりの2月2日の時点で、その後の世論の動向を正確に予想し得たものは居ない。山口少佐の病状についても然り。その後どんなに手を尽くしても甲斐なく亡くなったかもしれないし、四肢切断の手術を受けて命だけは取り留めたかも知れない。このような特異な状況の患者について、僅か一日程度の経過観察で正しい診断が下せるだろうか。

そもそもは行軍隊中最高齢、東京出身で雪国育ちではない山口少佐が、いかに他の兵より優先されたとしても、1月23日の部隊の出発から発見される1月31日までの8日間、極寒の山中で生き残ることができたことが良く言えば奇跡、悪く言えば不可解なのである。『遭難始末』の曖昧な命令の記述では、そもそも山口少佐本人の行軍参加すら確認できないことを述べた。

遭難中の描写にも、不審なものが多い。『遭難始末』には25日朝、彷徨の末に元の野営地に戻ったところで「山口少佐人事不省となり」倉石大尉が「遺言を問いても、答ふる所」なかったとある。しかし『第五聯隊遭難始末』では、「後藤伍長の談話」として「大隊長は此時既に絶命せり」、倉石大尉の「遭難談」として死者の携行品を集めて焚火をなし大隊長を暖めたが「大隊長は蘇生せず」と書いている。後藤伍長は最初に発見された遭難者だが、倉石大尉は山口少佐と共に谷底から救助されたはずである。『遭難始末』では同日昼ごろ「山口少佐は火辺にありて暖氣を得、元氣稍回復せり」。また同日夜には「山口少佐は三たび昏倒せしも、部下

之を救護して、三たび蘇生し、其露営地に達するや又全く人事不省となれり」。翌26日午前1時「山口少佐は昏倒して起たず」兵を数名付けて行軍を再開。再び『第五聯隊遭難始末』を見れば倉石大尉が「種々介抱したりと雖も、『あゝ』と云う声のみにて蘇生せず。止むを得ざるにより、強壯なる兵士数名をして守らしめ前進せり」と言っている。倉石大尉の言う「蘇生せず」とは自力で歩けず、かなりの意味なのだろうか。「後藤伍長の談話」では「一行は、山口大隊長の屍体を棄つるに忍びず、毛布に包みて交々之れを担いつつありしが、全身凍えて身体自由ならざるにより、初めて之れを棄つるに至りぬ」とある。ただし、発見直後で「精神慥ならず」との編集者注が付いている。『遭難始末』に26日（川口は27日と指摘）「暫くして、山口少佐卒一名と又来り、会す」とあり、再び合流を果たす。遭難時の状況は生存者の証言と遺体の発見位置から推測したもの過ぎない。どこまで克明に記録されていたとしても、それは「真実」ではないという当たり前のことが、山口少佐の生死を追うと明瞭に浮かび上がる。

不可解な現象を見ると、人は本能的に合理的な説明を求めたがる。「正史」である『遭難始末』の山口少佐の生死に不自然さを感じた小笠原は親族からのスクープという形でもたらされた自殺説を「真実」とし新田に紹介した。新田の小説とこれを原作とする映画が大流行し、こちらが「正史」の座を占めると、今度はこの自殺説に不自然さを感じた川口は疑義を唱え、松木は謀殺説を主張する。筆者はその謀殺説に不自然を感じた。いつまで経っても堂々巡りなのかも知れない。

五. おわりに

八甲田山遭難事件について、現在までどのような語りを経て伝えられてきたのかを確認した。事件当時の資料には混乱や錯誤が見られること、小説・映画はおのの表現手法の特性により効果的な創作が重ねられていること、創作のイメージが共有され逆説的に資料を真実として鵜呑みにする言説が現れたことなどを見た。それぞれの段階の資料は著者や製作者の思惑をはらんでおり、それぞれに矛盾している。その矛盾を拾い上げるだけで大幅に紙幅を費やしてしまった。

最も古い資料として事件直後に発行された『青森聯隊遭難雪中行軍』まで行き着いたが、結局は新たな矛盾が見つかるだけで、「真実」には辿り着けなかった。まさに「環状彷徨」に陥ったような感がある。異常気象という言説、捜索隊の初動に関する疑問などにも触れたかったが力及ばなかった。今後の研究課題としたい。

六. 補遺

本稿の脱稿後に入手した資料について追記したい。

元自衛官で、自衛隊による「八甲田演習」にも参加経験のある伊藤薫が著した『八甲田山消された真実』²⁵は、当時の陸軍の言説を鵜呑みにせず、失敗の本質を明らかにしようというスタンスで書かれており、その主張に本稿と多くの共通点を見出すことができた。2冊目の著書『生かされなかつた八甲田山の悲劇』²⁶において、伊藤はさらに日露戦争までを視野に入れ、八甲田山遭難事件の教訓が本当に陸軍の運用や装備に活かされたのか、丁寧に検証している。

伊藤の著作を手掛かりに遭難事件発生直後の資料を再確認し、『青森聯隊遭難雪中行軍』²⁷とほぼ同時に出版された『第五聯隊遭難始末』²⁸を見つけることができた。現在、国立国会図書館デジタルコレクションで、1902年2月10日印刷・3月1日発行とある初版第一刷と、同年3月10日印刷・3月17日（「七」に修正痕あり）発行とある増補四版の両方を見ることができる。本稿の二、三②で触れた予行練習について書かれた文章を、これら事故直後の資料と比較したものが表1である。

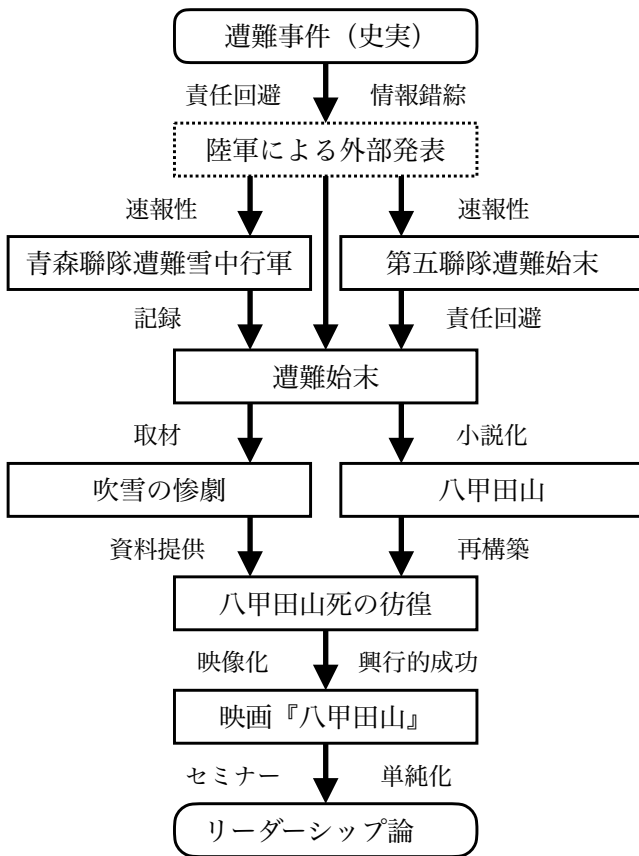


図3 遭難事件資料・文献の関連（修正版）

表1 予行演習に関する記載の対応

資料A：2月12日印刷，16日発行，24日増補再版，『青森聯隊遭難雪中行軍』3ページ（木文書店）
 資料B：2月10日印刷，3月1日発行，『第五聯隊遭難始末』5ページ（北辰日報）
 資料C：3月10日印刷，3月17日増補四版，『第五聯隊遭難始末』4ページ（北辰日報）
 資料D：7月15日印刷，7月23日発行，『遭難始末』5～6ページ（第五聯隊）

資料A	同日午前八時三十分第五聯隊屯營を出發シ
資料B	此行軍ハ同日午前八時三十分 屯營ヲ出發シ
資料C	此行軍ハ同日午前八時三十分 屯營ヲ出發シ
資料D	午前七時三十分 屯營 出發
資料A	同十一時三十分目的地たる燧山近傍に達シ午後二時 歸營、
資料B	十一時三十分 ヲ以テ 燧山近傍ニ達シ午後二時ヲ以テ歸營セリト云フ
資料C	十一時三十分 燧山近傍ニ達シ午後二時 歸營セリト云フ
資料D	同十一時三十分 小峠丘麓ニ達シ午後二時 過 歸營ス
資料A	屯營 燧山間の距離 約二里半にして往路には四時間、歸路 は二時間を費シ
資料B	尤モ屯營ヨリ燧山間ノ距離ハ約二里半ニシテ往路ニハ四時間 歸路ニハ二時間ヲ費シ
資料C	尤モ屯營ヨリ燧山間ノ距離ハ約二里半ニシテ往路ニハ四時間 歸路ニハ二時間ヲ費シ
資料D	屯營 小峠間 里程 約二里強 往路ニハ四時間 歸路ニハ二時間ヲ費ヤシ
資料A	少しく人跡ある部分は一里の徒歩行に一時間半、全く人跡なき部分 は 二時間を要す、
資料B	少シク人跡アル部分ハ一里 ニ一時間半 全く人跡ナキ部分 ハ 二時間ヲ要シ
資料C	少シク人跡アル部分ハ一里 ニ一時間半、全く人跡ナキ部分 ハ 二時間ヲ要シ
資料D	全く人跡ナキ部分ノ行進ニハ一里ニ二時間ヲ要セリ

る。『遭難始末』が既出の資料にわずかな改変を加えつつ成立したことは前述の通り明らかであるが、さらに『青森聯隊遭難雪中行軍』と『第五聯隊遭難始末』の類似から、これらに共通する引用元の存在が推測できる。伊藤の調査と合わせて考えれば、事故直後の陸軍の外部発表（地元紙東奥日報による報道か）があり、各社が引用したと考えられ、この資料を発見することができれば、遭難事件への理解がさらに深まるものと期待できる。本稿の冒頭に示した図1を、伊藤の著作によってもたらされた観点によつて修正すれば、図3のようにまとめ直すことができる。

北辰日報社は弘前に位置し、『第五聯隊遭難始末』初版から「第三十一聯隊雪中行軍紀」を含み、福島大尉の行軍も紹介している事実までを指摘し、補遺とする。

参考文献

- (1) 歩兵第五聯隊編『遭難始末』1902年7月発行。
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/844357> (最終アクセス2021年2月15日)
- (2) 百足登編『青森聯隊遭難雪中行軍』1902年2月発行。
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/844295> (最終アクセス2021年2月21日)
- (3) 新田次郎『八甲田山死の彷徨』新潮社、1971年。
- (4) 新田次郎『八甲田山死の彷徨』新潮文庫、1978年。
- (5) 新田次郎『強力伝・孤島』新潮文庫、1965年。『八甲田山』収録。
- (6) 新田次郎『白い花が好きだ』光文社、1976年。
- (7) 藤原てい『流れる星は生きている』中公文庫、初版1976年、改版2002年（昭和二十四年五月 日比谷出版社刊、昭和四十六年五月 青春出版社刊）。
- (8) 『八甲田山』1977年制作、MRBF-1001（愛蔵版DVD）。
- (9) 丸山泰明『八甲田山雪中行軍遭難事件と靖国神社合祀のフオークロア』（川村邦光編『戦死者のゆくえ 語りと表象から』青弓社、2003年、p.139-172.）
- (10) 三上悦雄『八甲田山死の雪中行軍真実を追う』河北新報出版センター、2004年。
- (11) 山下康博『指揮官の決断』中経出版、2005年。
- (12) 川口泰英『雪の八甲田で何が起こったのか 資料に見る“雪中行軍”百年目の真実』北方新社、2006年。
- (13) 戦略戦史研究会編『生存率5%の闘い 八甲田大量遭難の謎と真実』ブイツーソリューション、2006年。
- (14) 歴史群像シリーズ特別編集『決定版図説・日露戦争 兵器・全戦闘集』株式会社学習研究社、2006年。
- (15) アンヌ・モレリ、永田千奈訳『戦争プロパガンダ10の法則』草思社、2002年。
- (16) 堀栄三『大本営参謀の情報戦記』文春文庫、1996年。
- (17) 松木明知『中原貞衛と「第五連隊惨事 奥の吹雪」』(二)―山口少佐の死因をめぐって―『日本醫事新報、No.4072 2002年。』
- (18) 鴻上尚史『不死身の特攻兵 軍神はなぜ上官に反抗したか』講談社現代新書、2017年。
- (19) 稲賀敬二・竹盛天雄・森野繁夫監修『カラー版新国語便覧』新版四訂、第一学習社、2019年。
- (20) 押井守、野田真外『押井守監督が語る映画で学ぶ現代史』日経BP、2020年。
- (21) 『仁義なき戦い』ブルーレイコレクション、BSTD20093
- (22) 呉座勇一『陰謀の日本中世史』角川新書、2018年。
- (23) 佐谷眞木人『日清戦争』講談社現代新書、2009年。
- (24) 原田敬一『日清・日露戦争』シリーズ日本近現代史③、岩波新書、2007年。
- (25) 伊藤薫『八甲田山消された真実』山と溪谷社、2018年。
- (26) 伊藤薫『生かされなかつた八甲田山の悲劇』山と溪谷社、2019年。
- (27) 北辰日報社編『第五聯隊遭難始末』（初版）1902年3月発行。
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/844359> (最終アクセス2021年4月4日)
- (28) 北辰日報社編『第五聯隊遭難始末』（増補四版）1902年3月発行。
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1083845> (最終アクセス2021年4月4日)

1 はじめに

中世期を中心に、説話集と呼ばれる多くの作品が生み出されているが、その編纂スタイルや編纂意図、収録される説話の傾向などは多種多様である。説話集の分類として、仏教説話か世俗説話かという枠で語られることも多いが、ここから説話集同士の関連性などを図ることはできない。たとえば三大説話集と言われる『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』（以下、それぞれ『今昔』『宇治』『著聞』とする）はいずれも世俗説話集に分類されるが、周知のとおり『今昔』は仏教説話的様相の強い一面を持っており、また『著聞』も「釈教篇」などはその篇名が示すとおり、仏教にまつわる説話が収録されている篇である。このように雑多な特徴を持つ説話集の作品としての性質を総合的にとらえ、作品同士の類似性の様相を可視化する手段として、本稿ではテキストマイニングの手法を取り入れた傾向分析を試みる。

テキストマイニングとは、テキストデータから有意な情報を取り出す技術の総称であり、情報工学の分野においては広く用いられている既存の手法である。対象とするテキストを単語の集合体であると見なし、それらをまず単語単位に切り分け、分解された単語をテキストデータごとに数えて定量化する。この算出結果は出現頻度と呼ばれ、その傾向をもとに複数のテキストデータの類似性などを分析することができる。

近年では、このような情報工学の手法を文学研究の分野にも応用しようという試みが、徐々に増えつつあるようである。古典文学を題材としたものとして、初期には、安本氏が統計的なアプローチで『源氏物語』の作者に関する検証を行っており⁽¹⁾、これはその後、土山氏・村上氏らの研究へと発展している⁽²⁾。コーパス研究⁽³⁾の成果も数多く発表されており、説話文学を対象とした研究としては、田中氏・山元氏による同文説話の検証⁽⁴⁾などがあげられる。

情報工学の技術を活用する利点の一つは、膨大なデータを扱える点にある。しかし、多くの作品を同時に取り上げ、類似性により分類するという観点からの検証は、まだ少ないように見受けられる。小林氏・小木曾氏による日記や物語文学を対象とした検証⁽⁵⁾や、大川氏による平安鎌倉期の文学作品の類型検証⁽⁶⁾などは一部これにあたるかと思われるが、彼らの検証は文体的な観点によるものであり、内容面からの類似性にはほとんど触れられていない。また、和歌や物語等の分野に比べ、説話の分野における検証が少ないのも現状である。これは、説話文学のテキストの多様性にも関係するかもしれないが、説話文学はさまざまな文献や場から説話を収集するという性質を持つものであり、その影響関係を明らかにするうえでも、複数の作品間における類似性の検証は欠かせないものと考ええる。

とはいえ、さまざまな表記によりさまざまな形態で伝えられる説話文学のテキストデータの作成は、容易ではないというのもまた事実である。文体のみならず内容面での類似性にも着目しつつ、複数の説話集間の関係性を明らかにしていくことが著者の目的とするところではあるが、本稿ではその手始めとして、三大説話集を取り上げることにする。そして、テキストマイニングの手法を活用することにより、この三作品間の類似性がどのような形で表されるのかを提示し、その有意性を検証したい。また、古典文学研究にこのような手法を持ち込む際の難しさについても考察を加えるものとする。

2 分析の手法

(1) 分析の準備

本稿で取り上げる説話集は三作品と少ないため、ここでは各作品における巻や篇を単位として一まとまりのテキストデータとし、分析を行う。それぞれのテキストデータにおける単語の出現頻度の傾向をもとに、類似性の高い巻や篇を探してグループピングしていくものとする。このようにグループピングしていくことをクラスタリングと呼び、類似性が高いとしてグループピングされた各集合体はクラスタと呼ぶ。

テキストマイニングを行うにあたって、まず必要となるのは対象とする各作品のテキストデータである。『宇治』と『著聞』については、国文学研究資料館のホームページで公開されている、岩波の『日本古典文学大系』の本文データベースを利用した。また、『今昔』のテキストデータについては、岩波の『新日本古典文学大系』をもとに、著者が準備した。

このようにして準備したテキストデータを、コンピュータを使って単語単位に分割する作業を形態素解析と呼ぶ。テキストマイニングを行うには、まずこの形態素解析を行わなければならないが、国文学研究資料館で公開されている本文データベースのような形は、この解析を行ううえで不都合な点が多い。本解析に使用したのは、形態素解析辞書「中古和文 Unidic」と形態素解析エンジン「MacCab」⁽⁷⁾であるが、ここで大きな問題となるのは、漢文表記や Unicode などでも表示できない文字の存在である。

まず、先に示した解析用の辞書は、あくまで日本語としての文章を対象としているため、白文のままでは解析にかけてうまく単語の分割ができない。よって、漢文表記となっている部分は、書き下し文に改めることにした。『今昔』のカタカナ表記はひらがなに改めている。また、活字として表示できない文字については、やむを得ずひらがな表記に置き換えた⁽⁸⁾。このような置き換えが、テキストマイニングを行う際に少なからず影響を及ぼす可能性は否定できず、この点についてはさらなる検討を要する課題でもある。また、データのもとになっている岩波の大系本はすでに校正されたものであり、複数の伝本からの情報を合わせて推測した部分や、原本にはなかったはずの記号などが加筆されている。これは、原本が現存していない中で検討を行わざるを得ない古典文学研究ならではの如何ともしがたい問題でもあるが、少なくとも、

句読点や「」など、明らかに原本には存在しなかったと思われる記号の類いが分析結果に影響を与えることを避けるため、これらは除くことにした。また、今回の分析では、それぞれの説話集に収録されている説話の内容に着目した分析を目的としたこと、また、巻や篇をテキストデータの単位としたことにより、全体の序文や跋文、各説話の表題にあたる箇所は除いて解析を行うことにした。

このようなテキストデータの整形の後に、ようやく形態素解析が可能となる。分割された単語の集合は、出現頻度を記した単語文書行列と呼ばれる行列の形にする。これは、出現単語のすべてを行に、また各作品の巻や篇を一まとめにしたテキスト名を列に並べ、それらの単語が登場した回数を行列として示したものである。この単語の出現頻度を要素に、これらをベクトル化する⁽⁹⁾。

また、どのテキストにも表れる遍在的な語と、少数のテキストに表れる特徴的な語との違いを考慮し、TF-IDF法⁽¹⁰⁾と呼ばれる手法を使って単語の重みづけを行った。これにより、少数のテキストに表れる偏在性の高い単語には重みを与え、逆にどのテキストにも遍在的に表れる単語の重みは軽くすることができ、各テキストの特徴的な語がより明確化できる。

さらに、単語総数の多いテキストを使用すればするほどベクトルが多次元になり、可視化が困難となるため、主成分分析によりベクトルの次元圧縮を行い、二次元のグラフにした。

対象となる各テキストデータは表1のとおりである⁽¹¹⁾。

(2) クラスタリング

先に述べたように、ここでは各作品の巻や篇を単位として、類似性の高いもの同士をクラスタリングしていくことを目的としている。クラスタリングの手法にもさまざまなあるが、大きく分けると、階層的クラスタリングと非階層的クラスタリングとに分される。

表1 対象となるテキスト数および単語総数

	今昔物語集	宇治拾遺物語	古今著聞集
巻(篇)数[個]	28	15	20(30)
単語総数[語]	751,695	126,336	165,500

階層的クラスタリングは、最も似ていると思われるもの同士を順番にペアにしていき、結果を樹形図状に示していくものである。どの巻とどの巻の類似性が高いかを確認するには適しており、著者自身もこの手法を用いたクラスタリングをすでに実施している¹²。紙面の都合上、このクラスタリング結果の詳細に関する報告は機会を改めるが、この手法には、対象とするテキスト数が多くなれば多くなるほど、図が読み取りづらくなるという弱点がある。今回は三作品のすべての巻、計六十三のテキストを対象としたため、少々結果が読み取りづらい樹形図となってしまった。よって、ここでは非階層的クラスタリングの実施結果を提示することにする。

非階層的クラスタリングの代表的なものとして、*k-means* というものがある。

これは、あらかじめ指定された*k*個のクラスタに分類するというものであり、クラスタの数を実施者自らが設定する必要がある。階層的クラスタリングでは、樹形図が完成した後に、そのどの階層部分を基準として見るかにより、クラスタの数を実施者の側がある程度恣意的に設定できる。しかし、*k-means* においては、

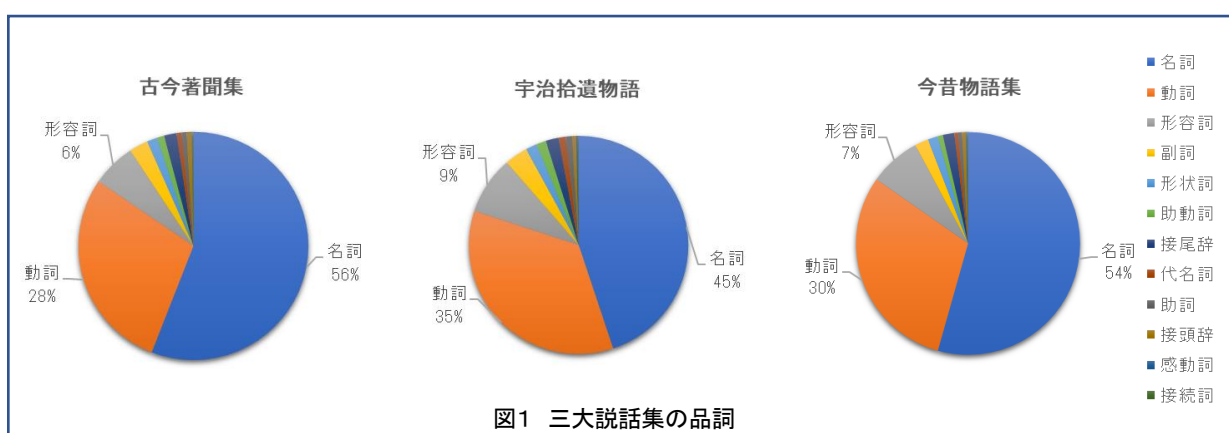


図1 三大説話集の品詞

先に実施者がクラスタの個数を設定しなければならないので、いくつのクラスタに分けるのが適切なのか見当を付けづらい場合などは扱にくい。この問題を解消し、実施者の判断ではなく、コンピュータにクラスタの数を判定させる手法が *x-means* である¹³。ここでは、この *x-means* の手法を利用して、クラスタリングを試みることにする。

クラスタリングに先立ち、形態素解析を行って各作品内における使用語彙の品詞割合の傾向を調べてみると、図1のような結果が得られた¹⁴。品詞の構成で見ると、『今昔』と『著聞』は非常によく似ている。『宇治』は他の二作品と比べ名詞の割合が低く、代わりに動詞や形容詞の割合が高くなっていた。ただし、いずれの作品においても名詞の割合が最も高いことには変わりなく、名詞、動詞、形容詞の三品詞で全体の約九割を占めていることがわかる。クラスタリングを行う際、その特徴をより明確化するため、遍在性の高い語についてはストップワード¹⁵として分析対象から除く場合がある。今回はストップワードの除外を行わないが、その代わりに、作品全体の構成割合の上位を占める三品詞に分析対象を絞り込み、巻の類似性の検証を品詞ごとに行うことで、特徴の明確化を試みた。

3 クラスタリングの結果と分析

(1) 巻ごとの分析

岩波大系本の本文に従い、まずはそれぞれの作品を巻の単位で分けた場合のクラスタリング結果を図2から図4に示す。同色で印を付けられたものが、同一クラスタに属するものである。

それぞれの品詞における各クラスタの構成要素とその特徴を以下に示す。いずれの品詞においても、クラスタは四つに分かれた。

名詞

【クラスタA…赤】

『宇治』 1・2・3・4・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15
 【クラスターB…緑】

『宇治』 5、『著聞』 12・16・17・20

【クラスターC…青】

『今昔』 22・24、『著聞』 1・3・

4・5・6・7・8・9・10・11・13・14・15・18・19

【クラスターD…水】

『今昔』 1・2・3・4・5・6・7・9・10・11・12・13・14・15・16・17・19・20・23・25・26・27・28・29・30・31、『著聞』 2

《特徴》

クラスターAは『宇治』のみで形成されている。このクラスターにおいて、特徴的な語として上位にあがってくるものは、「やう」「こと」「もの」などの形式名詞の類が多い。これが意味するところは、巻におけるテーマ性が見みづららしい群のクラスターなのではないかということである。クラスターBは『宇治』と『著聞』の一部で構成されている。一部にクラスターAのような傾向を持ちつつも、固有名詞や普通名詞が特徴語の上位にあがっている。ただ、形式名詞以外の特徴語に関しては、雑多な印象のあるクラスターである。クラスターCは『今昔』の二巻と『著聞』から成る。「大臣」「朝臣」「納言」など、王朝貴族的な語彙が特徴語の上位にあがってくるクラスターである。クラスターDは『今昔』と『著聞』巻2から成る。仏教的要素の強い語彙が特徴語として上位にあがってくるクラスターである。『著聞』の巻2は「釈教篇」であり、内容としても領けるところである。

動詞

【クラスターA…赤】

『著聞』 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・17・18・19・20

【クラスターB…緑】

『宇治』 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15、

『著聞』 16

【クラスターC…青】

『今昔』 1・2・3・4・5・6・7・

9・10・11・12・13・14・15・16・17・19・20・23・24・25・26・27・

【クラスターD…水】

『今昔』 22

《特徴》

動詞に関しては、作品ごとに分かれる傾向が顕著に見られた。クラスターAは『著聞』、クラスターBは『宇治』、クラスターCは『今昔』から構成されている。異例なのは、クラスターBの『著聞』巻16と、クラスターDに単独で分離された『今昔』巻22の二つである。『著聞』巻16は「興言利口篇」であり、笑話の要素が強い巻である。内容的には『宇治』と同クラスターに入ってもおかしくないものではあるが、図を見ると、緑の点が一つだけ離れていることがわかり、おそらくこれが『著聞』巻16であると考えられる。二次元化されたグラフにおいてはクラスターAに近いように見受けられるのであるが、コンピュータの判定としてはクラスターBであった。特徴語を見ても、「いふ」「あり」「まある」などが上位に来ており、やはりクラスターB寄りのものであった。『今昔』巻22の特徴語のトップには「給ひ」が来ている。巻22は藤原氏の列伝の様相を持つ巻でもあり、これが何かしらの影響を与えている可能性がある。

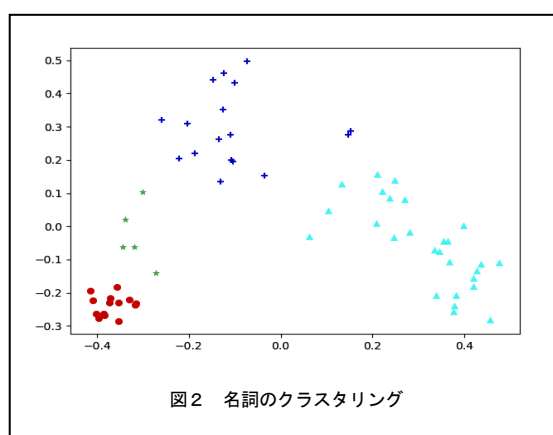


図2 名詞のクラスタリング

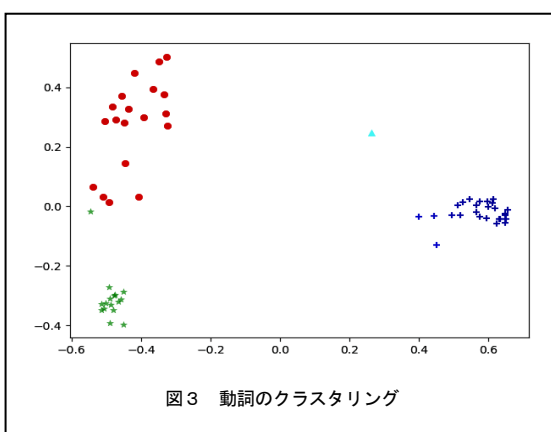


図3 動詞のクラスタリング

形容詞

【クラスターA…赤】

『今昔』22・23・24・26・27・28・
29・30・31

【クラスターB…緑】

『今昔』15・16・19・20・25

【クラスターC…青】

『今昔』1・2・3・4・5・6・7・
9・10・11・12・13・14・17

【クラスターD…水】

『宇治』1・2・3・4・5・6・7・
8・9・10・11・12・13・14・15、
『著聞』1・2・3・4・5・6・7・
8・9・10・11・12・13・14・15・
16・17・18・19・20

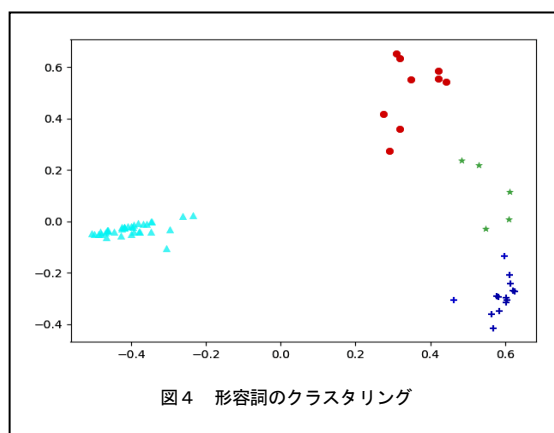


図4 形容詞のクラスタリング

《特徴》

形容詞は、大きく『今昔』のクラスターと『宇治』『著聞』のクラスターに分かれた。クラスターAとCはいずれも『今昔』のみで構成されている。『今昔』はもともと片仮名宣命書というスタイルで表記されていた⁽¹⁶⁾とされており、漢語的表現にこだわったためか、形容詞においては決まりきった言い回しが多い。その中において、クラスターAは他の『今昔』の巻よりも比較的語彙の多様性が認められる特徴語を持つ一群である。クラスターCは「無し」とその活用形で特徴語のほとんどが占められているもので、クラスターBはクラスターAとCの中間的性質を持つ。これに比べ、『宇治』や『著聞』は和文の特徴を活かし、その表現にも多様性が見られる。

巻をテキストの単位とした三品詞のクラスタリング結果とその特徴を示した。いずれの品詞においても、同一作品の巻同士は類似の傾向を示すことが多いことがわかる。これは各説話集が持つ固有の特色を示しているとも言えよう。また、形容詞はその特徴語の様相から、特に文体の影響を強く受けていることが推測できた。ただし、説話内容の類似性を見るという点において、この分析手法には若干の問題点がある。

『今昔』は周知のとおり、巻1～5が天竺編、巻6～10が震旦編、巻11～31が本朝編と分かれており、さらにそれぞれ仏教部と世俗部がある。特徴語を見ても、異国性を感じさせる語彙が並ぶ巻1～10や、仏教的な語彙が並ぶ巻、王朝的なテーマを感じさせる語彙が並ぶ巻など、ある程度巻ごとのテーマ性が確認できる。しかし、『宇治』にはこの傾向がほとんど見られない。これが意味するところとして、『宇治』は巻ごとのテーマ性が非常に薄い作品であるということではあるまいか。

そもそも『宇治』の巻の括りに関しては、やや問題がある。十五の巻の括りはテキストデータを作成する際のもとなった岩波の旧大系本によるものであるが、古本系の伝本では上下二巻となっており、十五巻での流布は後世のものとしてされている。つまり、十五巻に分けられた構成は、『宇治』編者の意図するところではないと考えられるのである。ならば、巻のテーマ性が見出せないのは当然のことであろう。説話配列においても、『宇治』は連想によって一九七話の収録説話同士が繋がっているという指摘もある⁽¹⁷⁾。このような論を支持するならば、もともと編者には作品全体が一旦まとまりと意識されていたということになり、巻ごとのテーマを持った編纂などという意識はなかったものと想定される。

さらに、『著聞』はテーマごとに三十の篇に分けられているという特徴がある。これは編者自らが序文で述べているように、二十の巻の区分も三十の篇の区分もともに編者自らの意図によるものである。二十巻の区分は勅撰和歌集を意識した体裁上のものであろうが、内容的な括りとして見るのであれば、むしろ篇を単位にクラスタリングを実施したほうが、より特徴が出やすいのではないかと推測されるのである。

(2) テーマ性を意識した括りでの分析

編者の意図や内容的な括りを意識し、説話の内容面での類似性をよりはっきりさせるため、『宇治』と『著聞』のテキストの括りを変えてみることにした。『今昔』はそのまま巻ごとに、『宇治』は作品全体を一つに、『著聞』は篇ごとにテキストのまとまりを変更し、同様のクラスタリングを行った結果が、図5〜7である。

名詞

【クラスタA…青】

『今昔』 12・13・14・15・16・17・19・20・23・24・25・26・27・28・29・30・31

【クラスタB…茶】

『今昔』 22、『宇治』、『著聞』 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30

【クラスタC…緑】

『今昔』 6・7・9・10・11

【クラスタD…赤】

『今昔』 1・2・3・4・5

《特徴》

テキストのまとまりを変えたことで、クラスタリングの結果に最も変化の見たれたのが名詞である。『著聞』の三十の篇は、一まとまりのクラスタになった。また、『今昔』の天竺編、震旦編のまとまりがはつきりと分かれたことも一つの特徴である。『今昔』の括りを変えていないが、他のテキストの括りを変えたことで、よりその特徴が明確化したものと思われる。ただし、本朝仏教部の冒頭とな

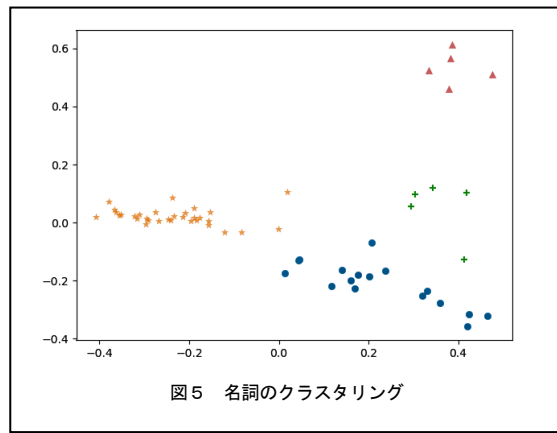


図5 名詞のクラスタリング

る巻11は、震旦編の一群であるクラスタCに分類された。また、『今昔』巻22が『著聞』と同じクラスタに分類される点は、先の巻ごとの分析の際と変わらなかった。

動詞

【クラスタA…青】

『宇治』、『著聞』 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・26・27・28・29・30

『今昔』 1・2・3・4・5・6・7・9・10・11・12・13・14・15・16・17・20

【クラスタB…茶】

『今昔』 19・22・23・24・25・26

【クラスタC…緑】

『今昔』 27・28・29・30・31

《特徴》

全体の点の分布の形は巻ごとの分析結果と似ているように見えるが、今回より強く類似性を示したのは、『宇治』と『著聞』から成るクラスタAである。巻ごとの分析では、逆に『今昔』が強い類似性を示しており、結果としては逆転した形になっている。『今昔』は二分され、本朝世俗部の一群がクラスタCにまとまった。

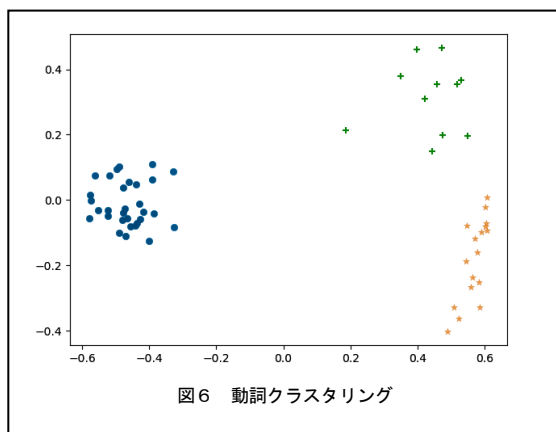


図6 動詞クラスタリング

形容詞

【クラスタA…青】

『宇治』、『著聞』 1・2・3・4・

5・6・7・8・9・10・11・12・

13・14・15・16・17・18・19・20・

21・22・23・24・25・26・26・27・

28・29・30

【クラスターB…茶】

『今昔』 1・2・3・4・5・6・7・

9・10・11・12・13・14・17

【クラスターC…緑】

『今昔』 15・16・19・20・25

【クラスターD…赤】

『今昔』 22・23・24・26・27・28・

29・30・31

《特徴》

巻ごとの分析と比較しても、結果はまったく同じであった。形容詞は文体に影響を受けやすいのではないかと先に述べたが、ともに和文的傾向の強い『宇治』と『著聞』のテキストの括りが変わっても、さほど影響は受けなかったものと推測される。

テーマ性を意識した括りでのクラスターリング結果を示した。巻ごとの分析と同様、作品ごとにクラスターがまとまる傾向は変わらないが、この括りでのクラスターリングの方が、より明確にその傾向を見出すことができた。特に『著聞』は、どの品詞においても三十の篇が別のクラスターに分散することはなく、常に同じクラスターに属することがわかった⁽¹⁸⁾。これは作品全体としてのテーマや文体の統一性を示すものと考えられる。つまり、篇ごとにテーマを示しているながら、実は他の篇との共通点を多く持つということになる。動詞や形容詞においては特にその類似性が顕著であり、同じような語彙が作品全体を通じて使用されていると見ることができている。

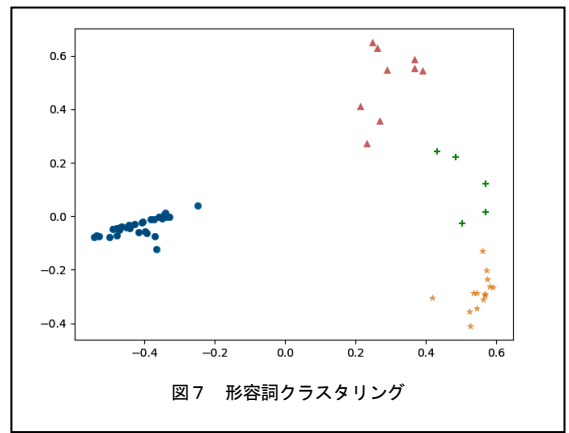


図7 形容詞クラスターリング

また、『宇治』と『著聞』は常に同じクラスターの中にあるということもわかった。

これは本稿で取り上げた三つの品詞にとどまらず、助動詞以外のすべての品詞において見られる傾向である。助動詞のみ『今昔』と『宇治』が同一クラスターにまとまったことについてはさらに検証を行う必要があるが、つまりこれは、三大説話集を対象とした場合、使用されている語彙の傾向を見る限りでは『宇治』と『著聞』がかなり近い関係性にあることを示していると言える。これが顕著に表れる例として、次に各説話を単位とした名詞のクラスターリング分析結果を示す。

(3) 説話単位での分析

各説話集に収録されている全説話を対象に、一話一話を一まとまりのテキストとしてクラスターリングを行った。特に内容的な類似が顕著に出る名詞の分析結果を図8に示す。上の図が各クラスターを色分けして示したものであり、下の図はその説話がどの作品に属する説話かを示したものである。点が多く重なり合っている部分はその詳細がわかりづらいため、それぞれのクラスターにおいてどの作品の説話が多いのか、その内訳を表2に示した。行に作品名を、列にクラスターをとり、それぞれの説話の含まれる割合をパーセンテージで示した。

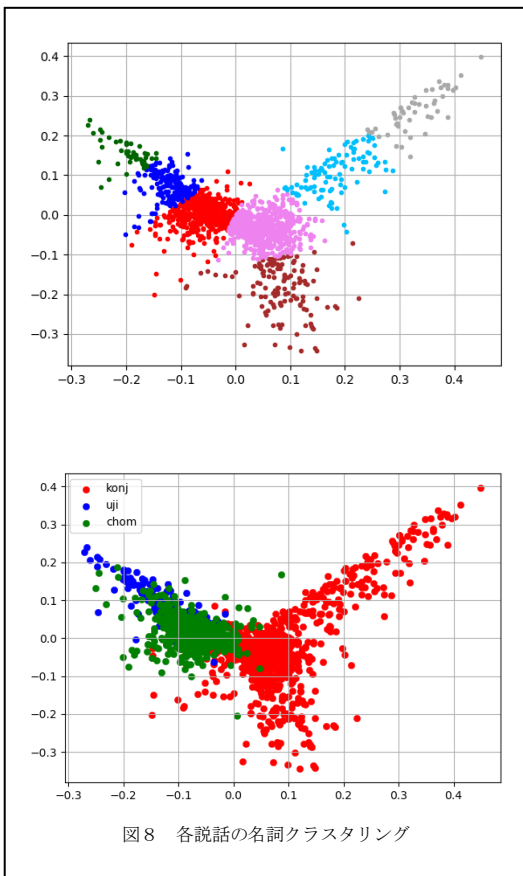


図8 各説話の名詞クラスターリング

図8および表2より、名詞を対象とした三大説話集の説話群の様相は、まず『今昔』の説話群と『宇治』の説話群とが大きく分かれて位置し、『著聞』の説話群は『宇治』寄りに位置すると見て取れる。つまり、説話集間の類似性としては『宇治』と『今昔』が対極にあり、その間の性質を持つのが『著聞』であるが、その位置関係は決して中間ではなく、『宇治』寄りの傾向を持つということである。

4 まとめ

以上、非階層的クラスタリングの一つである x-means の手法を用いて、三大説話集を対象としたテキストマイニングを行った結果を示してきた。これを踏まえ、得られた事柄についてここにまとめる。

まず三大説話集を対象とした分析ならではの傾向について述べる。

一点目は、いずれの品詞においても、同一作品の巻同士は同一クラスタに分類されやすい傾向にあるという点である。これは個々の作品としての特性を示すものとも言えよう。『宇治』や『著聞』には特にこの傾向が強く見られた。ただし、『宇治』は巻ごとに検証しても傾向らしい傾向が見当たらず、特定のテーマ性が見出しにくいという点を持つのに対し、『著聞』は一見篇立てというテーマ性を意識しているように見えながら、実は篇同士の性質が非常に近いという点に多少の違いがある。同一作品内の巻同士が非常に近い関係性にあるということは、同じような語彙が作品全体を通じて使用されているということにもなり、これは作品全体としての統一性とも言える。一方、『今昔』はいくつかのクラスタに分かれることが多く、その分かれ方は天竺・震旦・本朝という編構成の枠組みや、本朝の仏教部と世俗部というようなテーマに沿った巻構成に準ずる形になることが多い。特に本朝世俗部に属する巻は同一クラスタ

表2 各説話の名詞クラスタリングの内訳 (%)

	A [緑]	B [青]	C [赤]	D [桃]	E [茶]	F [水]	G [灰]
『今昔』	0.0	0.0	13.2	93.8	99.2	99.0	100.0
『宇治』	86.7	46.8	9.9	0.4	0.0	0.0	0.0
『著聞』	13.3	53.2	76.9	5.8	0.8	1.0	0.0

としてまとまりやすく、この一群と天竺・震旦・本朝仏教部を一群とするクラスタとに分かれやすい傾向のあることがわかった。これについては、階層的クラスタリングにおいても似たような傾向を示す。ただし、一部にはこれによらないものもあり、この点についてはさらなる検証の必要がある。このようなクラスタの分かれ方に巻のテーマ性が影響しているのはもちろんのことであるが、作品としての統一性という観点から言えば、文体の違いや特徴的な語彙の違いは、編者が一人なのか複数なのかという編纂上の影響の可能性も考えられる。

二点目は、三大説話集を対象とした場合、『宇治』と『著聞』は同一クラスタになることが多いという点である。クラスタリングを行った場合、『宇治』と『今昔』は対照的な位置づけになることが多い。『著聞』はその間に位置しながらも、かなり『宇治』寄りの傾向を示す。類似性という観点で言うならば、『宇治』と『著聞』は非常に近い関係性であるとして判定されたのである。もちろんこれは、「三つの作品においては」という条件付きである。テキストの括りを変えたことで結果に若干の差異が生まれたように、他の作品群と合わせてクラスタリングすれば、少し違った傾向を示す可能性がある。

次に、テキストマイニングという手法の活用により、普遍的に得られる事柄について述べる。

一点目は、類似性の傾向を視覚的に直感的に捉えやすいという点である。テキストマイニングにはさまざまな手法が存在するが、その結果は図の形で示されるものも多い。大まかな傾向を瞬時に直感的につかむことができ、文学作品の細部の検証というよりは、全体像などを把握したい場合に適している。

二点目は、クラスタの構成要素を確認することで、特徴的なテキストの抽出が可能となる点である。例えば、『宇治』や『著聞』のクラスタの中に、『今昔』の巻が一つだけ入っていたというようなものがあつたが、このような結果が出てくれば、本校の学生のように文学的な事柄にはさほど詳しくない者であっても、この巻は異質だと気付く。つまりこれは、研究者の気付きを助ける要素になるということである。人の目視により丁寧かつ詳細な分析を行う文学研究の手法は、これまで同様、今後も廃れ

ることにはないと思われるが、テキストマイニングの手法がその取り掛かりとなる事項の抽出を助ける可能性が見出せるのではないかと考えるのである。人間の目視ではなかなか気づきにくい部分をコンピュータが補い、テキストデータの類似性や異質性の発見を通してさらに詳細な分析を行ってあげれば、より深い考察に辿り着けるのではないだろうか。つまり、研究の糸口を見つける手法の一つになり得るということである。

5 おわりに — 今後の課題 —

テキストマイニングの手法は多数ある。現段階では、何をどのように利用すればより有意な情報が得られるのかを模索している段階と言える。最後にその難しさと課題について言及したい。

一点目は、作品本文のテキストデータ作成の難しさである。特に説話の場合は、漢文表記や和文表記が入り混じることが多い。また、『今昔』などは、「成り給はざりける」を「不成給^{ザリケル}」と記すなど独特の表記方法があったりする。先に述べたように、活字として表記できない文字も存在する。そのため、このような表記をどのようにデータ化するか非常に悩ましい。このテキストデータの作成のあり方によって、その後の解析結果にも大きな影響を与えてしまう可能性があるのである。実際に試行を繰り返す中で、和文的か漢文的かという判定に、漢字表記か仮名表記かの影響が非常に強く出てしまった失敗例がある。この漢字か仮名かという問題がある以上、本分析で採用したような、活字として出ない語をひらがな表記に置き換える方法は不適切であるということになる。また、単純に書き下し文に改めるなどの手法についても、再検討が必要である。

二点目は、テキストマイニングの手法の選択に関する難しさである。先にも述べたとおり、テキストマイニングの手法は多数あり、目的によってそれらの手法を使い分ける必要がある。複数の手法を取り入れながら分析を行っていくのが理想的だと思われるが、その際どの手法とどの手法を組み合わせるべきかは検討を重ねていく必要がある。たとえば本分析では *x-means* を取り上げたが、全体的な巻の類似的傾向を視覚

的に表すには便利な反面、特にどの巻とどの巻の類似性が高いのかは読み取ることができない場合が多い。この点に関しては、階層的クラスタリングの方が優れており、このような他の手法を複数取り入れながら分析を行っていく必要があるだろう。ただし、その手法の選択があまりに恣意的なものになってしまった場合、それは研究を主動する者にとって都合のよいデータを抽出するためだけの分析とみなさなれない。たとえば先に述べたストップワードの除外なども、傾向が出にくいからといってむやみにストップワードを定めてそれらを除外するなどすれば、それは研究方法として不適切と言わざるを得ないであろう。文学作品に適した分析の手法の確立は、当面の課題である。

【注】

- (1) 安本美典「文体統計による筆者推定—源氏物語、宇治十帖の作者について—」(『心理学評論』二巻一号、心理学評論刊行会、一九五七年)
- (2) 土山玄・村上征勝「語の使用頻度の計量分析による宇治十帖他作者説の検討」(『情報処理学会研究報告』Vol.2012-CH.94, No.5、二〇一二年)
- (3) 電子化された形で蓄積された言語データのこと。『国文学 解釈と鑑賞』第七四巻一号(至文堂、二〇〇九年)などを参照。
- (4) 田中牧郎・山元啓史「『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応—語の文体的価値の記述—」(『日本語の研究』10、二〇一四年)
- (5) 小林雄一郎・小木曾智信「中古和文における個人文体とジャンル文体—多変量解析による歴史的資料の文体研究—」(『国立国語研究所論集』6、二〇一三年)
- (6) 大川孔明「和漢の対立から見た平安鎌倉時代の文学作品の文体類型」(『訓点語と訓点資料』139、二〇一七年)
- (7) 小木曾智信・小椋秀樹・田中牧郎・近藤明日子・伝康晴「中古和文を対象とした形態素解析辞書の開発」(『人文科学とコンピュータ』情報処理学会研究報告 Vol.2009-CH.85、情報処理学会、二〇一〇年)。当初、先に公開されていた辞書「中古和文 UniDic」を使って解析を行い、適宜修正を加えていたが、「中世文語 UniDic」の登場に伴い、これを使用して解析を再度行った。大きな変動がなかつ

ため、本稿の分析結果については「中古和文 Unidic」に基づく解析結果のままになっている。

(8) 平本留理・蓬萊尚幸・河原井翼「テキストマイニングによる説話文学研究の可能性―『古今著聞集』巻一、抄入部の検証を中心に―」（『国語の研究』第四三三号、二〇一八年）の中で、テキストデータの整形について述べている。

(9) 本稿は文学研究的視点に重点を置くため、技術的説明の詳細については割愛する。情報工学の技術を要する実際の作業は、茨城高専電子情報工学科の廣原花音の協力を得て行っている。

(10) 単語が出現するテキストデータの数（文書頻度）を偏在性の指標に用いて重みづけを行うもの。出現頻度を文書頻度で除算する。

(11) 解析の過程で、多少の誤差を含むものとする。『今昔』は巻31まで存在するが、巻8、18、21はその内容を欠くため、テキスト数としては二十八となる。

(12) 階層的クラスタリングの中でもよく用いられるウォード法によるクラスタリングを実施している。

(13) 石岡恒憲「クラスター数を自動決定する k-means アルゴリズムの拡張について」（『応用統計学』二九（三）、二〇〇一年）参照。

(14) 品詞については、Unidicの辞書による区分に従うものとする。

(15) テキストの話題の種類と関連を持たないと考えられる遍在性の高い語のこと。

(16) 自立語を大字の漢字で、付属語を小字の片仮名で示す表記形式のこと。

(17) 小出素子「宇治拾遺物語の説話配列について―全巻にわたる連関表示の試み―」（『平安文学研究』六七、一九八二年）など。

(18) 本稿で示した三品詞以外の品詞においても、この傾向は顕著である。

【参考文献】

・奥村学『自然言語処理の基礎』（コロナ社、二〇一〇年）

・奥村学、高村大也『言語処理のための機械学習入門』（コロナ社、二〇一〇年）

・黒橋禎夫『改訂版 自然言語処理』（放送大学教育振興会、二〇一九年）

・末吉美喜『テキストマイニング入門―ExcelとKH Coderでわかるデータ分析』（オーム社、二〇一九年）

・奥野陽他『自然言語処理の基本と技術』（翔泳社、二〇一六年）

【本文参照テキスト】

・『新日本古典文学大系 33』今昔物語集（岩波書店）

・『日本古典文学大系 27』宇治拾遺物語（岩波書店）

・『日本古典文学大系 84』古今著聞集（岩波書店）

・『新潮日本古典集成 古今著聞集 上・下』（新潮社）

【付記】

本研究は JSPS 科研費 1P17K18499 の助成を受けたものである。

論理回路開発・設計による PBL 実験とその学生アンケート結果

飛田 敏光

PBL experiments by logical circuit development and design and the results of student questionnaires

Toshimitsu Tobita

Abstract: PBL experiments simulating the development process of enterprises are carried out by logic circuit design. In this paper, the outline is shown, and the result of the evaluation by the questionnaire to the student is shown. The results of the questionnaire show that it is well received by students and can improve their motivation to learn.

1. はじめに

3年生の実験でブレッドボードを用いた PBL 実験を行っている。電子制御工学科では、5年生を対象に1年間の PBL 実験をこれまで平成 20 年度（2008 年度）から 13 年間行ってきた。この種の学生実験は、他の高専、大学等でも行われており¹⁾²⁾、本校機械システム工学科でも実施、報告されている³⁾。

電子制御工学科での取り組みは、企業出身者が実験内容を考案し、企業の開発過程を模擬した形で行っていることが特徴であり、その一部は、学会にて報告されている⁴⁾。

この取り組みは学生にも好評であったので、カリキュラムの改訂のあった平成 29 年度より、3年生でも実施することとなった。

本報告では、3年生で実施することとなった PBL 実験の内容と学生へのアンケート結果、また、モデルコアカリキュラムにおける「技術者が備えるべき分野横断能力」との対応について述べる。

2. 学生実験の概要

5年生での PBL 実験は、4年間かけて学んだ知識を使用して、製品開発を模擬して、決められた条件の満たすものを1年かけて設計・製作する。学んだことを使って製品開発を模擬する形で行っているため、3年の学生実験では2年生で学習した論理回路の知識を用いて科学おもちゃなどの設計・製作を行うことにした。

使用したブレッドボードは、サンハヤト株式会社の IC 実装・応用セット IC トレーナー-MODEL CT-311S で、これに実習セット（デジタル編）MODELCT-311S-P01 を組み合わせたものである。IC トレーナー-MODEL CT-311S にはプッシュスイッチ 10 個、データスイッチ（トグルスイッチ）10 個、データ LED10 個、7 セグメント LED2 個、クロック回路一式、スピーカ回路一式が備えられており⁵⁾、実習セット（デジタル編）には、以下の IC 等の部品が用意されている⁶⁾。

表 1 使用する IC 等の種類

型式	機能
74HC00	Quad 2-input NAND gate
74HC02	Quad 2-Input NOR Gate
74HC04	Hex inverter
74HC08	Quad 2-input AND gate
74HC10	Triple 3-input NAND gate
74HC14	Hex inverting Schmitt trigger
74HC32	Quad 2-input OR gate
74HC74	Dual D-type flip-flop with set and reset; positive edge-trigger
74HC86	Quad 2-input EXCLUSIVE-OR gate
74HC112	Dual JK flip-flop with set and reset
74HC132	Quad 2-input NAND Schmitt trigger
74HC165	8-bit parallel-in/serial out shift register
74HC390	Dual Decade Counter
2SC1815	低周波電圧増幅用トランジスタ
TLC555	CMOS TIMER

実験は、3～5人を1つのグループとし、4～5回、1回3時間で行っている。各回の内容は以下の通りである。

- 1日目：説明と構想作成
- 2日目：論理回路、周辺回路の設計
- 3日目：デザインレビュー（設計審査）、製作
- 4日目：製作
- 5日目：動作の確認、プレゼンテーション

上記は、5日間で行う場合の日程であるが、4日間で行う場合は、4日目が製作、動作の確認、プレゼンテーションとなる。

以下、各日の実施内容の詳細を説明する。

2. 1 1日目 実験内容の説明とアイデア発想、企画書の作成

グループで製作するゲームや科学おもちゃのアイデア発想を行う。また、ブレッドボードの使い方を学習するために、74HC00、NANDゲートのみでブレッドボード上に、ExORを作りその動作を検証する。回路図、真理値表を作成し、実際その通りになっているかどうかを確認する。

また、設計書の形式で企画書を作成する。企画書には、製作する科学おもちゃ等の概要、各人の分担等を記載する。

2. 2 2日目 論理回路、周辺回路の設計

回路の設計を行い、設計書を作成する。設計書はお互いに内容をチェックし、照査、承認し合う。また、テストデータを決め、機能試験のためのチェック表、試験仕様書を作成する。

2. 3 3日目 デザインレビュー（設計審査）、製作

設計書をもとにデザインレビューを行う。ここで、必要性を認められれば、部品、デバイスの追加を行うことができる。残りの時間は製作に使用する。デザインレビューは、チェックリストを作成しないワークスルー方式で行う。

2. 4 4日目設計の続きおよび回路の製作

設計の続きおよび回路の製作を行う。ここでは、学生からの質問等の受付やアドバイスをを行う。

2. 5 5日目 プレゼンテーション

動作の確認を機能試験用チェック表に基づいて行う。実際に稼働するところを見せてプレゼンテーションする。

2. 6 参考資料と設計書の構成

この実験を進めるための学生用参考資料として、ICトレーナーの取扱説明書の他、実習セットに含まれるIC、その他部品のデータシート、設計書の例を用意している。また、インターネットで調べるためのパソコンも用意したが、学生は、自分のパソコン、スマートフォンを用いることが多かった。その他図書館等の利用も推奨している。

設計書は、先に述べたように、企画書、回路の設計書、機能試験のためのチェック表、試験仕様書で構成される。

以下に用意した設計書の例の一部と、実際に学生が製作した設計書の例を示す。

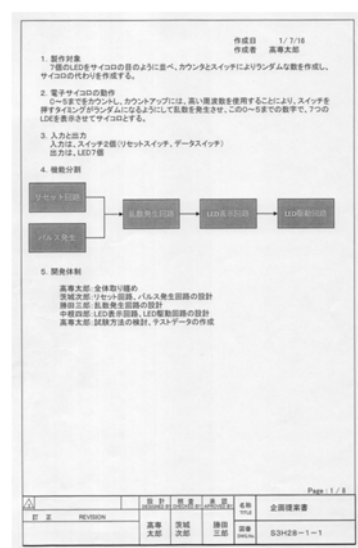


図1 企画書

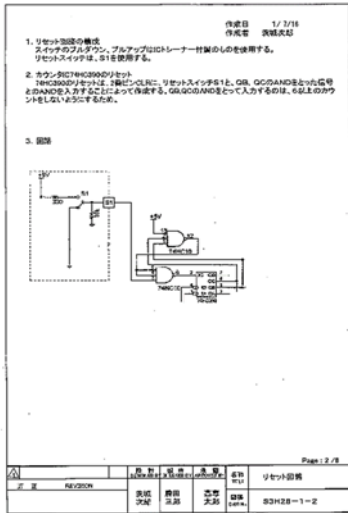


図2 カウンタ回路

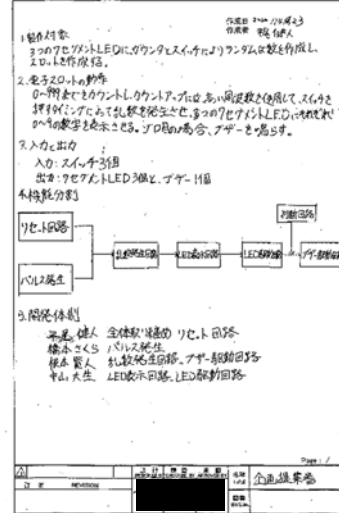


図5 学生による企画書

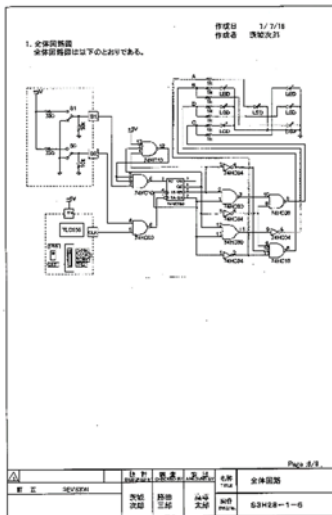


図3 全体回路

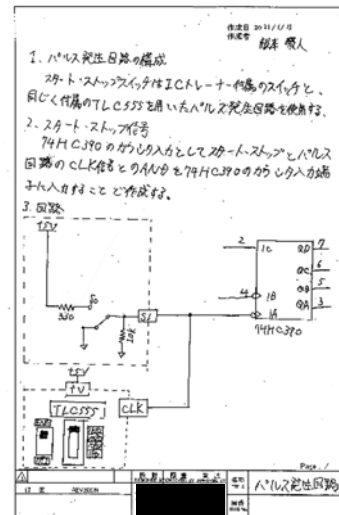


図6 パルス回路

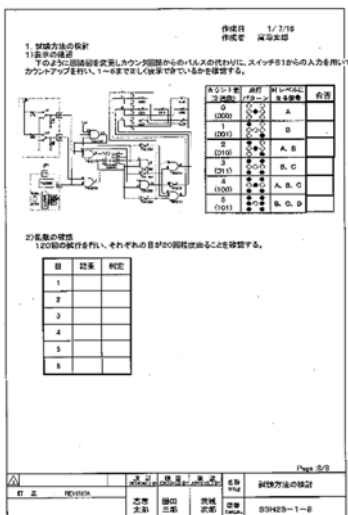


図4 試験方法の検討

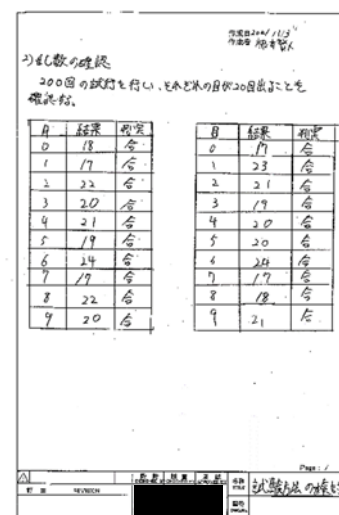


図7 試験方法とその結果

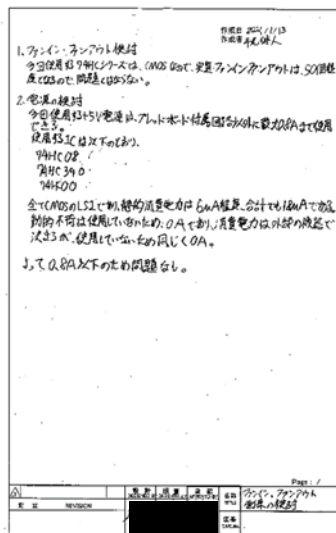


図8 ファンイン・ファンアウト、電源の検討

図1は、企画書の例であり、図5がこれを参考に学生が作成したものである。企画書では、まず何を製作するか製作対象を示し、次にその動作や使用方法、ゲームなどの場合はルールを記載する。次に入出力、機能分割、開発体制として各自の役割を記載する。各自の役割は、全体取りまとめのリーダーや分割した機能の設計担当者等である。

設計書には設計者、照査、承認の欄があり、各自で相互チェックを行う。これにより、リーダー以外の役割の者も各パートの担当者として、他パートの設計をチェックし、意見を述べるようにすることで、リーダー以外の者もリーダーシップを発揮することができるようにしている。

図2、3は、設計書の例であり図6は、学生が設計した設計書である。

図4は、試験方法の検討を示した設計書で、テスト仕様書になる。図7は、それを学生が記述したものである。

このほか、今回は問題となることはないが、実際の製品化では必要となるファンイン・ファンアウトや電源の検討も行っており、図8は学生による検討結果である。

以上のように、製品企画から設計、試験方法、電源などの検討といった、製品開発で実施する事項を疑似体験させている。実習セットのIC以外にも全加算器などのICを用意しており、これらのデータシートは、自分でメーカーのホームページなどから入手する必要があり、インターネットなどを利用した情報収集なども各自で行って設計しているの

で、情報収集・活用の訓練にもなっている。図9に実際に作成した回路を示す。

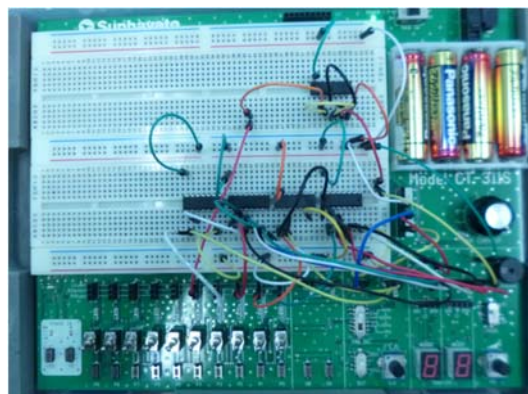


図9 学生が作成した回路

3. アンケートの結果

この実験では、終了時に実験に関するアンケートを採っている。平成29年から5年間のアンケートであり、令和1年、2年からは、学科再編に伴い従来の電子制御工学科に相当する機械・制御系制御コースだけでなく、機械システム工学科に相当する機械コースの学生も本実験を受講するようになったので、それらの違いを含め、アンケート結果について述べる。

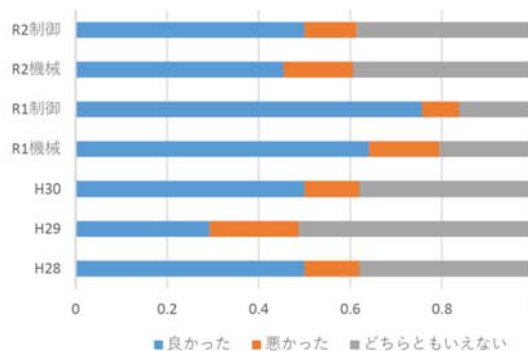


図10 PBL実験の感想

図10は、本実験に関する感想である。年度により良かったとどちらともいえないが逆転しているが、悪かったという評価は少ない。また、悪かったという評価をした学生も、本実験を体験したこと自体について高評価であることが、

アンケートの自由記述欄やレポートの感想の記載などからわかった。

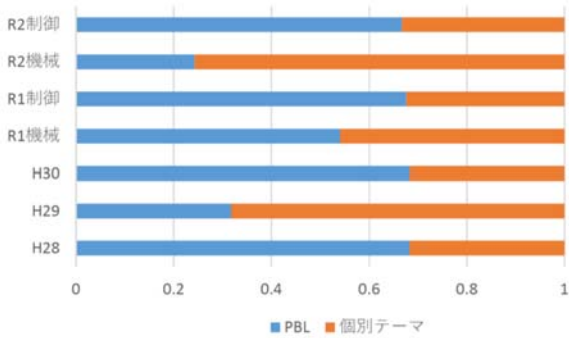


図 11 従来型の実験と PBL 実験の比較

図 11 は、従来型の実験との比較であり、電子制御工学科、制御コースは、平成 29 年度を除き、本実験の方が良いという評価である。機械コースは、従来型の実験の方が良いとの意見が多い。平成 29 年度と機械コースが他とことなる理由については、後の質問の考察で述べる。

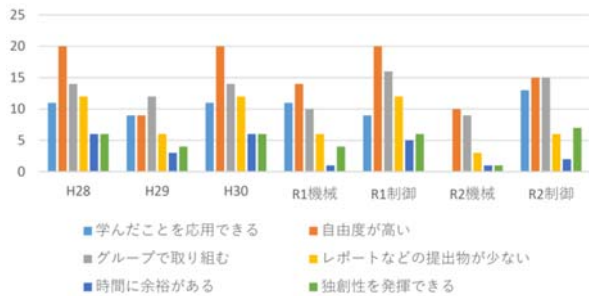


図 12 今回の実験の良かったところ（複数回答可）

図 12 は、今回の PBL 実験で良いと感じたところを聞いたもので、やはり自由度が高いことやグループで取り組むことに対する評価が高い。

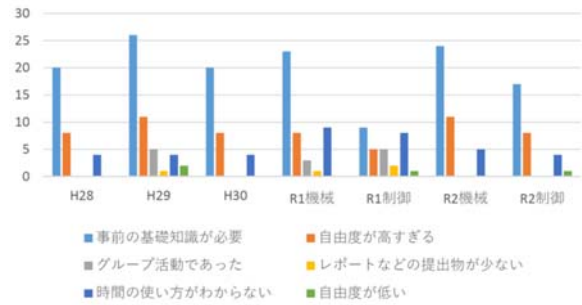


図 13 今回の実験の悪かったところ（複数回答可）

図 13 は、逆に悪いと感じたところで、年度やコースによらず、事前の基礎知識が必要な点を挙げている。アンケートの自由記述欄や、レポートの感想を見てみると、悪いというよりは、学生自らの理解や知識の不足に気づき、これを反省している記述が多いことから学生が主体的に実施する PBL 実験の効果がでているものとする。また、自由度が高すぎるという意見や、時間の使い方が分からないという意見も少なくない。

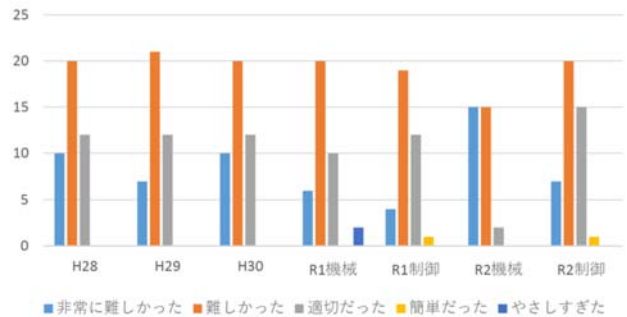


図 14 3 年生の実験としての難しさ

図 14 は、3 年生の実験としての難しさを尋ねたもので、やはり非常に難しかった、難しかったという評価が多いが、機械コースに比べ、制御コースは適切だったという意見が多い。

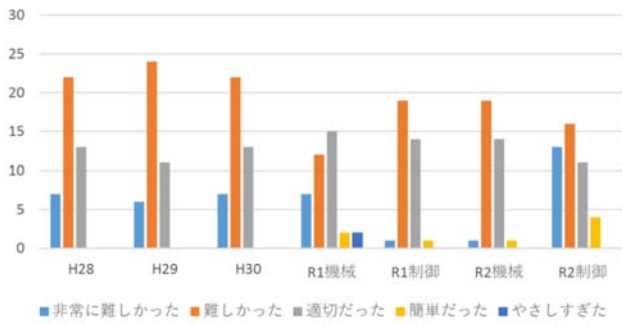


図 15 論理回路の実験としての難しさ

図 15 は論理回路の実験としてはどうかと尋ねたもので、先の質問と同じような傾向にある。

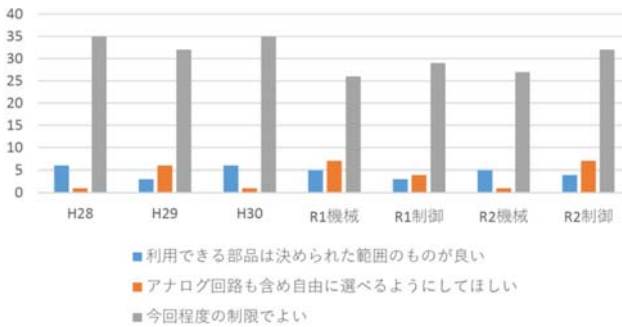


図 16 使用する部品について

先の自由度とも関係するが、図 16 は、使用する部品の自由度について尋ねたものである。年度、コースの別なく今回程度の制限で良いという意見が多い。これは、図 13 の自由度が高すぎるという意見が少なくないことから、あまり制限無く行くと学生がどうすれば良いか分からず混乱してしまうものと考えられる。

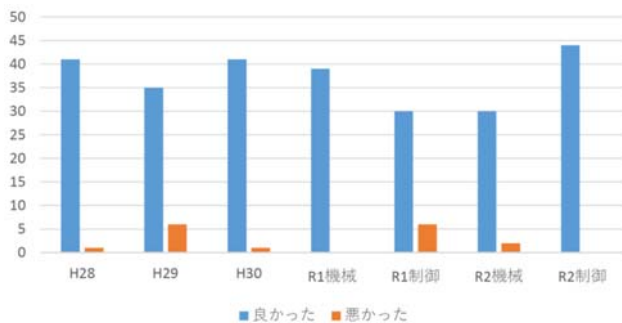


図 17 グループで取り組むことの善し悪しについて

図 17 はグループで取り組むことの善し悪しについて

尋ねたもので概ね良かったという意見が多いが、平成 29 年と令和 1 年機械コースで少なからず悪かったという意見がある。これが、図 10 の PBL 実験が悪かったという評価につながっている。

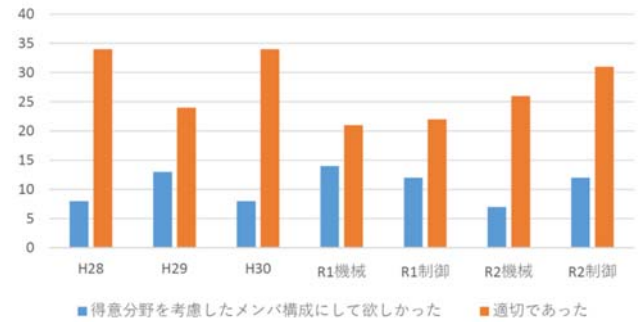


図 18 班分けの方法（メンバ構成）

図 18 は班の分け方メンバー構成について尋ねたもので、概ね適切であったとの意見が多いが、得意分野を考慮して欲しかったという意見も少なくない。メンバーの中に詳しい人が欲しいという希望が表れたものとする。

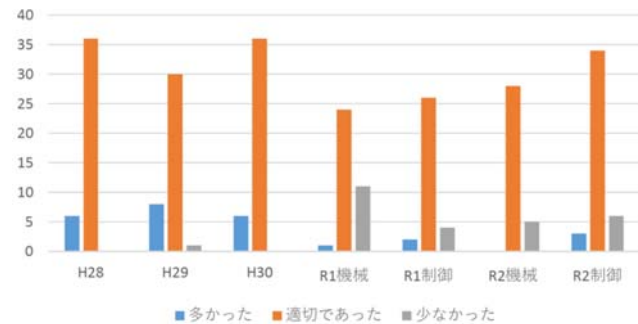


図 19 1 班当たりの人数

図 19 は、1 班当たりの人数について尋ねたもので、概ね適切であったとの評価である。平成 28 年から平成 30 年までは 1 班当たり 4～5 名で構成していたが、多かったという意見が少なくないため、令和 1 年、2 年では 3～4 人で構成するようにした。このため、令和 1、2 年では少なかったという意見が出てきた。これより大体 4 名程度の人数が適切であると考えられる。

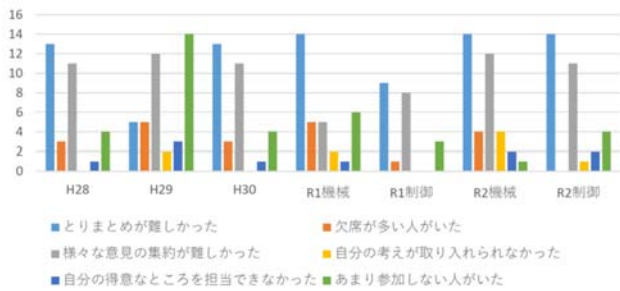


図 20 グループ活動の問題点

図 20 は、グループ活動の問題点について尋ねたもので、取りまとめが難しかった、意見の集約が難しかったという意見が多い。今回グラフにした質問とは別に、リーダーかその他かもアンケートで回答させているが、リーダーか否かにかかわらず、同様の傾向が見られた。また、平成 29 年と令和 1 年機械コースで、あまり参加しない人がいたという意見が多く、これが図 10、図 11 の悪かったという意見や、PBL よりも従来型の個別実験の方が良いという意見につながっている。あまり参加しない人がいると 1 班 3 名では照査、承認もできなくなるので、どのようにして全員を積極的に参加させるかが今後の課題となる。

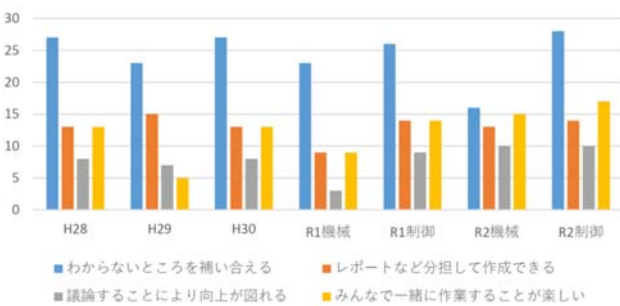


図 21 グループ活動で良かった点

図 21 は、グループ活動で良かった点である。分からないところを補い合える、みんなで一緒に作業することが楽しいという意見が多く、また、議論することにより向上がはかれるという意見も一定数見られる。

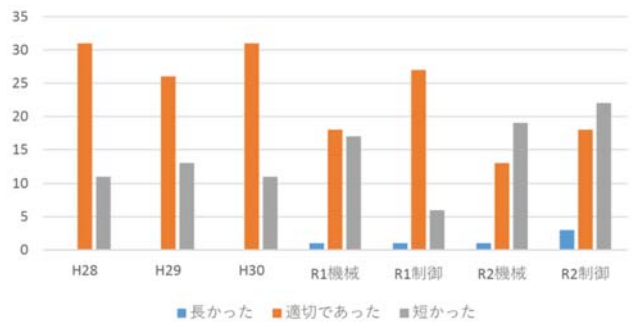


図 22 実験期間

図 22 は、実験期間の長さについて尋ねている。適切であるという意見が多いが、短かったという意見が令和 1 年の機械コース、令和 2 年の両コースで見られる。これは、授業としては、機械コース、制御コースの別なく 2 年生の時に論理回路を学んでいるが、制御コースの学生は、電子工作などが好きで、自ら電子工作などを行っているものが多いためと考えられる。また、令和 2 年度は、感染症の影響のため半数が集中講義となったことが影響していると考えられる。

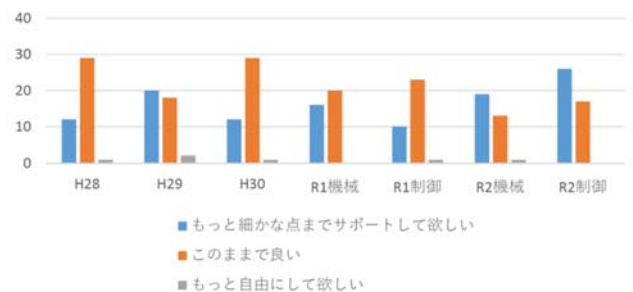


図 23 教員のサポート

図 23 の教員のサポートについては、もっと細かな点までサポートして欲しいという意見とこのままで良いという意見が拮抗している。学生が主体的に実施する PBL の特性を考えると教員のサポートをあまり多くすることはできない。しかしながら、図 13 にあった「時間の使い方が分からない」という学生が少なくないことについては、これに関する指導方法を検討する必要があると考える。この質問は、1 年間かけて行う 5 年の PBL 実験のアンケートの質問をそのまま持ってきているものであるが、4～5 日、12 時間から 15 時間、プレゼンテーションなどの時間を除くと 8 時間程度の時間をどのように使うか分からない学生が少なからずおり、

そのような学生の中には、機能分割の必要性や方法について分からないという者がいる。これらについてどのように教育していくかという点も今後の課題と考える。

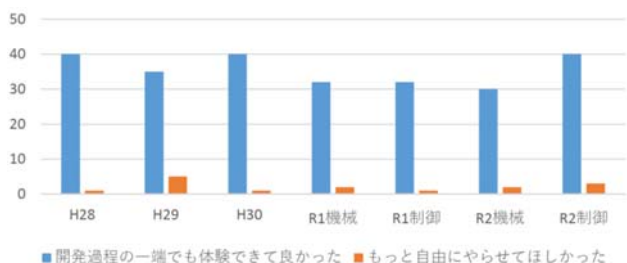


図 24 開発過程の模擬について

図 24 は、実験を開発過程の模擬ということで行うことについての意見を尋ねたものである。もっと自由にやりたいという意見も若干見られるが、開発過程の一端でも体験できて良かったという意見が大半である。これについては、アンケートの自由記述欄、レポートの感想でも触れている学生が多く、企業における開発実務の一部を体験することで多少なりとも企業活動を理解させることができたのではないかと考える。

4. モデルコアカリキュラムとの関連性

本実験は、企業の開発活動を模擬したもので、実際にいくつかの製品開発を行った教員が担当しているため、モデルコアカリキュラムの「技術者が備えるべき分野横断的能力における到達目標」⁷⁾との親和性が良い。

以下では、モデルコアカリキュラムの学習内容との対応について述べる。

4.1 モデルコアカリキュラムⅦ 汎用的技能について

モデルコアカリキュラムⅦ 汎用的技能は、「他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の意見を正しく伝えることができるとともに、仕事をする上で課題を発見・分析し、計画を立てて路理的に課題解決していけるようになるための教育領域」であり、「課題発見、情報収集、論理

的な思考といった解決のためのスキルを実践することができる」との技能であるが、コミュニケーションスキルや合意形成については、設計書の作成とこれを用いたプレゼンテーションを行うことや、班のメンバーとの議論によって企画、設計を行うことで実現している。課題発見や、論理的思考力についても同様に一部を実施、体験している。

4.2 モデルコアカリキュラムⅧ 態度・志向性(人間力)について

Ⅷ 態度・志向性(人間力)は、「目標を持ち、自らを律しながら主体的あるいは他者と協調して行動することができる。また社会の規範に沿って適切に行動できるようになるための教育領域」。「自らのキャリアデザインに対して将来にわたって学んでいく姿勢を身に付けることができるようになるための教育領域」とのことであるが、主体性、自己管理能力、責任感、チームワーク力、リーダーシップについては、個々に担当するパートを持たせ、責任を持って設計・製作することで養われていると考える。チームワークについては、アンケート結果を見てもグループで仕事を行うことの大切さを知ってもらうことができたと思う。また、リーダーシップについても、相互に照査、承認を行うことによって、リーダーだけでなく、班メンバーの一員であってもリーダーシップを発揮する場面があるので、これを涵養する効果があるものとする。アンケート結果が、リーダーと班の一員で変わらないことからこれを伺うことができる。

企業活動理解については、実際の開発過程を模擬しているので、その理解を深めることに役立っているものとする。学習と企業活動の関連についても、企画、開発、設計という企業活動の一部ではあるが、それに必要な能力とは何かを考える機会になったのではないかとアンケート結果からも分かる。

4.3 モデルコアカリキュラムⅨ 総合的な学習経験と創造的思考力について

Ⅸ 総合的な学習経験と創造的思考力は、「工学的課題を

理解し、その課題の解決のためにシステム、構成要素、工程等を創出できるようになること、さらにはクライアントの要求を解決するためのプロセス(企画立案から実行)を理解し解決策を創案できるようになる」とのことであるが、論理回路によるゲーム、おもちゃの企画・設計・製作を行っているので、創成能力の到達目標に一致していると考ええる。

「工学的な課題を論理的・合理的な方法で明確化できる」、「要求に適合したシステム、構成要素、工程等の設計に取り組むことができる」は実際本実験で十分ではないがある程度体験させている。また、エンジニアリングデザイン能力の「課題や要求に対する設計解を提示するための一連のプロセス(課題認識・構想・設計・製作・評価など)を実践できる」も実際に課題認識・構想・設計・製作を行い、テスト仕様書による試験という形で、評価も実施している。「提案する設計解が要求を満たすものであるか評価しなければならないことを把握している」も同様に試験方法を検討させ、テスト仕様書を作成させることで、これを認識させている。

5. おわりに

以上、現在3年生で行っているPBL実験の概要とアンケートの結果およびモデルコアカリキュラムとの関係について述べてきた。実際の企画・開発設計業務を模擬した実験で、これらを模擬体験させることで、学生の学習意欲の向上をはかることや、モデルコアカリキュラムが要求する「技術者が備えるべき分野横断的能力における到達目標」の達成に向けた内容の一部を実施することができた。

こちらから与えるのではなく、学生自らがグループで一つのを、自ら企画・開発する体験は、アンケート結果等から好評であり、一部の学生からは自らの進路を考える機会にもなったとの話もあった。

まだ一部のあまり参加しない学生への対応や、時間の使い方、スケジューリング、機能分割の考え方の教育方法など解決しなければならない問題点も多いので、他の科目との連携も考えて改善していきたい。

参考文献

- 1) 矢野昌平他: 電気電子系学科における ICT 教育の検討, 論文集「高専教育」第 34 号, pp. 7-12, 2011 年 3 月
- 2) 釜野勝他: 製品開発を意識した学生実験におけるものづくり教育, 論文集「高専教育」第 34 号, pp. 7-12, 2011 年 3 月
- 3) 加藤文武, 澁澤健二: 機械工学系学生による電気・電子工学の P B L 実験 (導入事例), 論文集「高専教育」第 33 号, pp. 769-774, 2010 年 3 月
- 4) 平澤順治: ロボットを用いた P B L 教育における班の編制方法, 日本ロボット学会誌, Vol. 33 No. 3, pp. 67-74, 2015 年 4 月
- 5) サンハヤト株式会社: IC 応用・実験セット IC トレーナー MODEL CT-311S 取扱説明書, 2015 年 1 月
- 6) サンハヤト株式会社: CT-311S 実習セット(デジタル編) MODEL CT-311S-P01 取扱説明書, 2015 年 1 月
- 7) 独立国立高等専門学校機構: モデルコアカリキュラムガイドラインー (経済・ビジネス系を除く), pp. 113-115, 2017 年 4 月, mce2017a11.pdf (kosen-k.go.jp)

令和3年5月発行

編集・発行 茨城工業高等専門学校
総務課研究協力・地域連携係

〒312-8508 茨城県ひたちなか市中根 866

TEL 029-271-2952